ラブライブ！彼女のために何ができるか

パンナコッタ吹雪

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主がμ' ｓメンバーと廃校を阻止するために、色々としていく物語です。

果たしてオリ主とμ' ｓメンバーは廃校を阻止できるのか？

楽しんで行ってください。

原作改変点としては音ノ木坂は共学です。

目次

特別話
西木野真姫誕生日記念 ―― 1
東條希誕生日記念 ―― 19
矢澤にこ誕生日記念 ―― 34
高坂穂乃果誕生日記念 ―― 53
南ことり誕生日記念 ―― 71
消失した女神編
消えゆく女神と水の女神との遭遇 89
水の女神の目的と黒き太陽 ―― 104
A―RISEの穂乃果 ―― 124
アニメ一期
廃校!? ―― 137
これだ!! ―― 146
スクールアイドル!? ―― 159
にこ先輩とのお話 ―― 170
作曲をしてもらえ! ―― 185
曲をゲット! ―― 198
チラシ配り ―― 208
ファーストライブ ―― 219
アルパカ使いと覚えてない西木野家 235
まきりんぱな ―― 246
にこ先輩勧誘活動 ―― 258
リーダー? ―― 267

ラブライブ出場のために親鳥の出した条件とは!? ―――― 281

特別話
西木野真姫誕生日記念

「ミーンミーン」
　セミの鳴き声が聞こえる。
「疲れたァー」
「凛もだにゃー」
　と穂乃果と凛が言った。それもそのはずであろう。今は夏休みの真っ最中なのだから。２時間にも渡るダンス練習に加え、この炎天下だ。相当体力を使うだろう。男の俺ですら立っているだけで汗だくなのだ。μ'ｓメンバーの体力の多さはすごいと思う。
「じゃあ、このあとはそれぞれでクールダウンして解散な」
　俺の指示とともにメンバーがそれぞれストレッチに入った。
　ストレッチ後、俺は生徒会の活動のため、生徒会室で仕事をしていた。
「義政くんは、今日の練習見ててどうやった？」
　希が話しかけてくる。てか、希もう仕事終わらせたのかよ。まだ３０分しか経ってないぞ。

「うーん、ミスは減ってきてますけど、やっぱり動きに重みを感じますね」
「エリチと同じ意見やね」
「そうね。どうしたらいいかしら？」
「1日休みを作るのはどうですか？この暑さですし、みんな疲れがたまってると思うので」
「じゃあ、明日を休みにしましょう」
　決まるのはやくね？まあ、休養は大切だからいいと思うけど。
「ほな、またなー」
「じゃあね、義政。また明後日」
　えっ？2人ともう仕事終わしたの？俺、遅すぎる？
「あっ、さようなら」
　そう言って2人は帰っていった。それから３０分ほど経ち、仕事も終わり、生徒会室を出るとピアノの音が聞こえた。音楽室まで足を運ぶと、やはり真姫がいた。
「まだ作曲中か？」
「あっ、義政。作曲中じゃなくて、ただ趣味で弾いてただけだから平気よ」
「なら良かった。明日休日になったのは知ってるか？」
「えっ？ちょっと待って」

真姫がスマホを見ている。どうやら演奏に夢中で連絡に気づかなかったらしい。
「本当ね。それじゃあ、明日何しようかしら」
「宿題でもやればいいんじゃないか?ほぼ毎日練習あるんだし」
「もう終わしたわ」
今、真姫なんて言った?終わした?ありえないだろ・・・ 聞き間違いであってくれ。
「真姫さん、もう一度言ってもらってもよろしいですか?」
「何でよ。もう終わしたって言ったの」
どうやら聞き間違いではなかったらしい。
「早くないですか?」
「早くはないわよ。ママに早く終わらせた方がいいって言われたから終わしただけ。あと、なんで敬語なの?」
「すごいな。俺も進めてはいるけどまだ終わってないよ。敬語なのは痺れて憧れてるからです」
「なにそれ意味わかんない!」
「だろうな。言った俺にもわかんないし・・・」
「あっ、明日空いてる?」
「えっ、多分空いてるけど」

「じゃあ、作曲するためのお出かけに付き合ってよ」
「別にいいぞ」
「じゃあ、明日の１０時秋葉原駅に集合ね」
「分かった」
　というわけで真姫の作曲のためにお出かけに付き合うことになったのだが

　なんでここにいるんだろう・・・
　俺は真姫とともにお台場ウォーターパークに来ていた。メールで水着持ってこいと言われた時点でおかしかったよ。でも約束したから仕方なくだったけど、これ傍から見たら完全にデートだよね。そんなこと気にしてないのか、真姫はというと
「キャー」
　楽しんでいるようで何よりです。てか、恋人同士でもないのにプールなんて来ないよね？
「ふう、楽しかったわ。義政はやらないの？」
「いや、作曲については？」

「えっ？楽しめばいい曲が思いつくもの。だからめいいっぱい楽しみましょ」
「分かった。じゃあ俺もウォータースライダー滑って来るわ」
「意外とスピード出るからね」
「分かった」
と言って脱出したはいいものの…
やべぇ、真姫のこと直視できない。水着エロすぎだろ。そんなことを考えていたせいだろう。気づくとウォータースライダーのてっぺんにいた。
「お客さん、お客さん」
「あっ、すみません」
しかも俺の番だったらしい。そのままスライダーの始まる部分に腰を下ろした。その瞬間
「ドボッ」
という音とともに俺は流されていった。てか、はやくね？
「ゴツン」
「いってぇぇぇーー!!」
ウォータースライダーが終わると同時にプールに飛び込み頭を床にぶつけた。

「本当に何やってるのよ」
「すまん」
「プールの床に頭ぶつけるなんて」
「本当にすまん」
「私、スピード出るって言ったはずなんだけど」
「ガチですまん」
「なのに頭ぶつけて、こんなに大きいたんこぶ作るなんて」
「真姫さん、そろそろ許してくれませんか？」
「嫌よ。私の楽しみを奪ったんだから」
「本当にごめんなさい」
「一応は保健所で見てもらって、異常なしだったからよかったけど、下手したら死んでたかもしれないのよ」
「お願いだから許してください」
「このあと、どう責任とってくれるのかしら？それによってはゆるしてあげる」
「任せてください」
　よし、とりあえずそろそろお昼時だから美味しい飯を食うところでも探すか。・・・どこもレビュー高くない？

「ま、真姫」
「なによ」
「何食べたい？」
「はあ？」
「いや、ここら辺の食べ物屋どれもレビュー高くて・・・」
「そうね。トマトかな」
「ん？トマト？」
「ええ」
どうやらセレブのお嬢様には俺らの常識というものは通用しないようだ。お昼にトマトって・・・ とりあえず調べてみるか。
「おっ、特製トマトソースのパスタがあるけどそれでいいか？」
「えっ、特製トマト？」
「うん」
てか特製トマトに反応するってどんだけトマト好きなんだよ。
「いいわよ」
そういうわけでそのお店へと向かった。お店に着くと、めちゃくちゃ人が並んでいた。

「どうする？別の店にするか？」
「こ、ここでいいわ」
　いつもと違い、言葉がうわずいていた。どんだけ楽しみなんだよ。
「分かった」
「ただ待ってても暇なだけだから何か話しましょ」
「別にいいけど」
「なんでμ’ｓを、手伝おうとしたの？」
「えっ、穂乃果のおかげかな。やっぱり、あいつについてって後悔した事ないから」
「へぇー」
「まあ、もう一個あるけどな」
「なによそれ？」
「おっと、次は俺の番だ。真姫ってなんでツンデレなの？」
「はあ？なにそれ意味わかんない」
「いや、ツンツンしてるけどたまにデレるじゃん」
「いま、猛烈に義政のこと殴りたいわ」
「ほら、ツンツンしてｒぐぉ」
　マジで殴ってきやがった…

「そういうこと言うからよ」
「めっちゃ痛いんですけど」
「知ーらない」
「デレな」
「えっ？何か言った？」
　あっ、これ以上言ったら殺される。
「いえ、言ってません」
「そう」
　今の真姫は超ツンツンモードだ。何も言わない方がいいな。それから、重い空気が続いた。そしてやっと俺たちが店に入れた。メニューを開き
「ま、真姫、何にする？」
「特製トマトソースのパスタ」
「オッケー。すみませーん」
　と店員を呼び特製トマトソースのパスタを２つ注文した。料理がとどき、真姫がさっそくパスタを食べ始めた。
「美味しいか？」
「もちろんよ」

「よかったー」
　それから他愛もない雑談をしながらパスタを食べおわした。問題はお会計の時に起こった。
「ちゃんと自分の分は自分で払うわ」
「いや、俺が払うべきだろ」
「いいえ、自分のは自分で」
「いいや、ここは俺が」
　と真姫のプライドが高いのと、俺の先輩としてのプライドがぶつかり合い喧嘩になってしまった。
「今日のプールのこともあるし、ここは俺が」
「だったら尚更私の言うことを聞くべきじゃない」
「あの…　お客様？後ろが詰まってきておられるので」
「あっ、すみません」
　とさっさとカウンターに1万円を置いて、お釣りをもらい真姫を連れて外に出た。
「はい」
　真姫がお金を渡してきた。
「いらねーよ」

「なんでよ、受け取りなさい」
「こーいうのは男が女に奢るものだからだよ」
「それはデートでの話でしょ」
「これをデートと言わずなんて言う？」
「はあ？ただ2人で遊んだりしてるだけじゃない・・・」
　どうやら真姫も気づいたようだ。俺たちが傍から見るとどんな関係に見えるかを。
「だからここは俺に持たせてくれよ」
「分かったわ」
　よかった。真姫に納得してもらったようだ。さてとこのあとはどうするか・・・
「どうする？どこか行くか？」
「そうね、美術館でも行かない？」
「そうだな」
　そういうわけで美術館へと行くことになった。
　近くの美術館につき、最初に絵画ゾーンにいった。問題はピカソのエリアに入った時だった。
「なにこれ意味わかんない」
「なんで微妙に私のセリフパクってるのよ」

何か真姫が言ってる・・・ まあ、それよりも
「なんでこんな絵が美術館に置かれるんだ？」
「なんで分からないのよ。あなたそれでもμ’ｓのマネージャーなわけ？」
「いや、分からないから聞いてるんだが。正直子どもが書いてる絵と何も変わらないぞ」
「はあ、伝統的な西洋美術の傾向や考え方から離れ、独自な理論のもとにその伝統から、徹底的に自由になろうとしたことにあるからしいけど・・・」
「真姫もいいところが分かってない系だろ」
「いいのよ、絵を見て思うことなんて人それぞれでしょ」
「まあ、そうだな。んで、作曲のためになりそうなことはあったか？」
「うーん、まだないわね」
「えっ？マジで？」
「ええ」
「うーん、どこか行きたい場所ある？」
「特にないわね。ウォーターパークも途中でやめることになったし・・・」
「その件についてはマジですまん」
真姫のやつまだ引きずってたのかよ。まあ、完全に悪いのは俺だけど。
「仕方ない、プラネタリウムでも行こうか」

「いいけど」
「じゃあ早く行かないともう5時だし」
　と俺は真姫の手を握って走り出した。
「ちょっ、手をつなぐ必要ないじゃない」
「こうでもしないと間に合わないだろ」
「ちゃんと走れるから」
「いいだろ、デートなんだし」
「デートじゃなーーい！」
　そうして真姫の手を握ったまま駅まで走った。
「ふう、何とか乗れたな」
「何普通に話せると思ってるの？」
「えっ？」
「えっ？じゃないわよ。あんなに強く握って・・・」
「そんな強く握ってたか？」
「ええ」
「ごめんな」
「別にいいわよ。嬉しかったし」

「なんか言ったか？」
「別にいいわよって」
「それはよかった。おっ、そろそろ着くみたいだぞ」
「そうね」
「また走るからな」
「ヴェエ」
「女の子なんだからそんな声出すなよ」
「仕方ないでしょ、癖みたいなものなんだから」
「そうか、なら仕方ないな。着いたぞ。さあ、走ろうぜ」
「手は繋がないからね」
「じゃあちゃんとついてこいよ」
「もちろんよ」
　それからプラネタリウムまで走り、定員ギリギリで入れた。
「よかった～」
「そうね」
「じゃあ、楽しもうか」
「ええ」

それからは星座を見始めた。
「あれは？」
「そんなのも知らないの？牡羊座よ」
「はあ」
「私の太陽星座でもあるけどね。持ってる意味は「自分の手で世界を切り拓く」ね」
「そうか」
「義政は確かみずがめ座よね」
「ああ」
「持ってる意味は「新しいものを求め、創造する」ね」
「めっちゃ詳しいな。どこかで習ったのか」
「別に、本を読んでたら書いてあっただけ」
「よく覚えたな」
「まあね」
それから、真姫とたくさんの星座を見て、真姫からたくさんの星座の意味を教わった。
あっという間に時間は過ぎ、気づいたら閉館時間になっていた。
帰りの電車にて、
「今日は楽しかったわ」

「それはよかったよ」
「まあ、ウォーターパークは残念だったけど」
「それは本当にごめんって」
「まあ、いいわよ。プラネタリウムすっごく楽しかったし」
「よかった～」
「おかげで作曲に関してもそれなりのが浮かんだし」
「本当か？」
「ええ」
「よかった～。マジで何もなかったらどうしようか迷ってたしな」
「そう。今度はμ' sメンバーで遊びに着たいわね」
「そうだな」
「あっ、もう着いたわ。じゃあね」
「送ってくよ」
「えっ？」
「こんな夜遅くに女の子を1人にするわけにも行かないしな」
「そう、ならお願いしようかしら」
　となり、俺は真姫のことを真姫の家まで送ってくことになった。

「真姫はこのあと、どうするんだ？」
「家で？」
「ああ」
「そうね、勉強したあと作曲かしら」
「マジか、すごい大変だな」
「まあ、μ' sの練習後もこんな感じだし慣れたわ」
「それになれるのがすごいと思うよ」
「そういう義政は何やるのよ？」
「俺はとりあえず宿題かな」
「そういえば終わってないって言ってたわね。あとどのくらい残ってるの？」
「あとは自由研究だな」
「そう。それって今日の夜に出来ることなの？」
「いや、多分無理」
「じゃあどうするの？」
「明日の練習後とか使うよ」
「それならいいんだけど。今日無理させちゃった？」
「全然無理してないよ」

「よかった～」
「おっ、着いたな。いつ見てもすごい大きいな」
「そう？」
「ああ」
「じゃあそういうことにしとくわ。また明日ね」
「おう、また明日」
　と俺は家に帰った。
　翌日俺は夏休みの恒例となったμ'ｓの練習に来ていた。いつも通りの練習が終わると、真姫が
「昨日はありがとう。義政。またデート行きましょ」
　と言ってきた。てか、最後デートって・・・
　その後俺がどうなったかはお察しだろう。

東條希誕生日記念

なぜこうなっているのだろう。俺は1人で山の奥にいた。なぜこうなったかって？それは3日前の練習終わりが原因だ。あの日いつものように練習をし、皆が着替え終わった時穂乃果が

「もう夏休みも終わりだけど何もしてなくない？」

の一言から始まった。

「そうだにゃー。凛たち練習しかやってないよ」

「そうね。でも、夏休みも残り5日もないし、何か出来ることあるかしら？」

「う～ん、肝試しなんてどうや？」

「私は賛成！」

「私も」

「凛も」

あー、穂乃果と凛はガチで賛成だけど、ことりは絶対誰か驚かそうとしてるぞ。少し黒い笑い方をしてるし… まあ、驚かされるのが俺だったら大歓迎だけどな。

「私は…」

「どうしたんエリチ？もしかして怖いん？」
「えっ・・・　怖くなんてないわよ」
「じゃあできるやんね」
「え、ええ」
　絵里まで希に丸め込まれたか・・・
「肝試しやるとしたらどこでやるんだ？」
　この質問はしない方が良かったのかもしれない。
「う～ん、電車で1時間くらいのところに幽霊の出る山があるんやけどそこでどうや？」
「山ですか？」
　あっ、海未が目を輝かせてる。
「なんや海未ちゃん、山は嫌なん？」
　希さん、海未のその顔は嬉しい時の顔です。会話だけで決めない方がよろしいかと思います。
「いいえ、むしろ大歓迎です」
「よかった。他に意見ある人おる？」
　・・・誰も何も言わなかったので
「んじゃ決まりやね」

そういう感じで肝試しをすることになったのだ。

そして今日。練習終わってから2時間後くらいに駅に集合し、山へと向かった。希が言うには、その山には神社があるので、明るいうちに神社に行き、それぞれのペンを置いて、暗くなったらペアずつに分かれて自分のペンを取りに行こうと感じの肝試しを行うことになった。

とりあえず、μ'sメンバー全員で神社に行き、ペンを置いて山を降りた。まだ暗くなるまで時間があるので何をするかと話になっていた。

「ご飯食べよ～」

「いいけど何を?」

「みんなは何がいい?」

たまに思うけど穂乃果って考えたことそのまま口に出してるの?聞き返した絵里も苦笑いしてるぞ。

「凛はラーメンがいいにゃ～」

「私は白米を・・・」

「うちは焼肉」

「私はチーズケーキ!」

ことりさん?今は夕食の話し中ですよ。チーズケーキは後で一緒に食べに行ってあげるから今は我慢しようね。
「バラバラだな」
「そうですね」
何かいいとこはないかと考えていると穂乃果が
「あっちに定食屋があるみたいだよ」
と言った。確かに定食屋ならみんなの言ってるのもあるかもしれないな。みんなもそう思ったのか特に異論もなく夕食は定食屋に決まった。
みんなで夕食を食べてる。俺も焼き魚定食を食べてるし、みんなが好きなのを食べれてるからよかった? いや、よくないと思う。みんなが好きなのを食べれてることがだ。なんだよ!チーズケーキ定食って!ご飯に味噌汁まではいい、主菜がチーズケーキってここは自由の国ですか!?さらに花陽は白米定食と言う謎の定食頼むし・・・　とりあえず2人にはちゃんとしたものを食べさせないとね。
そんなこともありながら、夜の8時になったので山へと向かった。山道の入口について
「じゃあ、2人1組に分けようか」
と希が言い出した。

「いいけど、どうやって分けるの？」
「う～ん、くじ引きでどうや？」
　希はそう言いながら割り箸を取り出した。二つに一つが同じ色で塗ってありそのペアが五つあった。
「もう準備はできてるで」
　そうしてみんながくじを引きペアが決定した。穂乃果とにこ、海未と花陽、ことりと真姫、凛と絵里、そして俺と希だ。山に入ってく順番は俺達から凛絵里ペア、海未花陽ペア、ことり真姫ペア、穂乃果にこペアになった。
「じゃあ、行こうか。義政くん」
「分かりました」
　と俺達は山へと入って行った。
「希、みんなのこと驚かす気満々ですよね？」
「お～、よく分かったな」
「いや、肝試しと言った時点でなんとなく察しが付いてましたよ」
「じゃあ、このあとうちが言うことも分かるよな？」
　・・・分かるけど言いたくない。でも、これは言わないといけない流れかな・・・
「希の分もペンを取ってこいってことですか？」

「そうや」
「了解しました」
　そう言って俺は1人で山の奥へと向かった。

　そして冒頭に戻るわけだ。本当に何をしてるのか。そもそも俺お化けのこと苦手だし。1人で夜の山なんか歩きたくなかったよ。
「キャァァーーー」
　ああ、希がワンペアを手にかけたか・・・　てか、声が大きすぎて俺までビビったわ。そんなことを思いながら10分ほど歩きやっと神社にたどり着いた。この間に4ペア分の悲鳴が聞こえてきたけど・・・　俺と希のペンを持ち来た道を戻ろうとしたら
「わあ!」
　茂みから希が飛び出てきた。
「ヒッ!」
　驚いてそのまま後ろに転んだ。
「驚きすぎやろ」
「いや、急に驚かされたらこうなりますよ」
「そうなんや。あと、みんなのこと驚かせたからみんなの分も持ってくで」

「分かりました」

μ' sメンバー全員のペンを持って俺達は来た道を戻った。

「義政くんから見て最近のμ' sはどうなん？」

「うーん、みんなのダンスの技術も上がってきてていい感じだと思いますよ。でも、この感覚に慣れるのもちょっと危ない気もしますね。特に作詞や作曲、衣装面では海未や真姫、ことりに頼りすぎてますし」

「あの3人だから頼れてるんやないの？」

「そうですけど・・・ なんて言うか3人のうち誰かがスランプに陥ったら危ないと思うんですよ」

「確かにそうやな」

「だからメンバー全員でもう少し3人を支える様にならないといけませんね。と言うのがマネージャーとしての意見で、1ファンとしての意見は最初からファンになってよかったって感じですね。初めからアイドルの成長を見れること自体がファンにとっては嬉しいですし、正直ここまでのアイドルを最初から見てこれたことは俺みたいなアイドルオタクにとっては宝物です。だからこれからもμ' sのことを見ていきたいですね」

「そうか。ところで今の会話を携帯に録音しといたんやけど、みんなに聞かせてええ？」

・・・希のこういうところが苦手なんだよな。まあ、これが希らしいと言えば希らしいんだけど・・・
「ファンの部分を聞かせないでくれるなら」
「それは聞けない相談やな」
「じゃあ聞かせない方針で」
「分かったで」
　それからさらに少し歩き、そろそろスタート地点に着いてもおかしくないほど歩いた。
「なかなか着きませんね」
「そうやね」
　そんな会話をしているとガサガサと茂みがかき分けられる音が後ろから聞こえてきた。振り向くとそこには絵里がいた。
「2人ともどこに向かってるの？」
「いや、山を降りようとしてるんですけど」
「それなら向かってる方向が違うわよ」
「えっ？」
「今、希と義政が向かってるのは山の周りを回ることになる道よ。降りるなら道を戻ら

ないと」
「そうですか」
「じゃあ行きましょ」
俺達は絵里に続いて２０分ほど歩いたが別の道に当たるどころか神社にすら戻れなかった。
「なあ、えりち本当にこの道であってるん？」
「大丈夫よ」
「なあ、絵里道に迷ったりしてませんよね？」
「・・・大丈夫」
うーん、道を戻ってるどころか既に山を登ってるんだけどな・・・
「義政くん、あれえりちやないよ」
希が小声で言ってきた。
「は?!どういうことですか？」
「静かに」
「はい・・・」
「まずえりちがこんな暗い中懐中電灯なしに歩けると思うか？」
「・・・歩けませんね」

「やろ。あとは勘やけど」
「・・・勘ですか？」
「そうやで」
「じゃあ信じます。希の勘の強さは凄いですし」
「ありがと。じゃあ逃げるで」
「逃げる？」
「多分あれが山の幽霊や」
「はあ」
「ここの幽霊の噂なんやけど人を連れ去って喰うんや」
「マジですか？」
「マジや」
「いつ逃げるんですか？」
「５秒後に逃げるで」
「分かりました」
「５、４、３、２、１、行くで」
　希の合図とともに俺達は走り出した。後ろから
「あっ、ちょっと待って」

と聞こえたが
「気にせず走るんや」
希が言ったのでそのまま走り続けた。しばらくすると神社にたどり着いた。
「希、さっきの絵里はガチで偽物なのか?最後の言葉とかガチで本物みたいだったけど」
「それが幽霊の作戦やで。あのまま戻ってたら完全に喰われてたはずや」
「それが本当なら希に感謝だな」
「やろ」
そんな会話をしていると墓地の方からことりと真姫がやってきた。
「あっ、義政くん」
「おー、ことりに真姫何してんだ?」
「遅いから迎えに来たんだよ〜」
「そうか・・・ 偽物に言われて嬉しい言葉もあるんだな」
「え?」
「希、この2人も偽物だからさっさと逃げるぞ。あと、偽物共。ことりの真似するんならあと数千倍可愛くなって、声の音域を2オクターブ下げてから来るんだな」
「「・・・」」
いや、誰か反応してよ。希もなんか怖そうなものを見てる目で俺のこと見ないで・・・

「早く行くぞ」
　俺は希の手を掴み、走り出した。
「ちょっ、義政くん早いんやけど」
「えっ？あっ、すみません」
「別にええんやけど」
「これからどうします？どんなに走っても山を降りられそうにないですし」
「確かにそうやな」
　・・・どうしよう。何も思いつかない・・・
「希のスピリチュアルパワーでここから脱出するのは？」
「それやー！」
　あれ？冗談で言ったのに真に受けてるの？
「行くで。ムゥゥー」
　なんか瞑想始めたんですけど。
「ハッ！」
　カード引いたし。てか、カードどこから出した？
「こっちやで」
「・・・はぁ」

「どうしたん？ついてこないん？」
「いや、ついてくけど」
「それじゃ行こか」
　そのまま歩いていくと最初に神社に向かって歩いた階段に着いた。スピリチュアルパワーってすげぇー！
「おっ、そろそろ戻れそうやな」
　はあ、やっとこの山から出れるのか。そう安心したのが行けなかったのだろう。後ろから足音が聞こえてきた。しかもだいぶはやく。なんだろうと後ろを振り向くと、μ'sメンバー全員がいた。もう一度言おう。μ'sメンバー全員がだ。
「やばくね？」
「うん、やばいな」
　それからは無我夢中で走った。後ろからμ'sメンバーが追いかけてくるが正直そんなのを構う暇はない。
　走ってる最中に希が転んでしまった。後ろにはμ'sメンバーの偽物が追いかけてきている。
「先に行くんや」
　希はそう言ってるが、ほんの一ヶ月ちょっと前にμ'sは解散しかけたんだ。もうそ

んなことにはさせない。しかも今回に限っては希を見捨ててしまったら二度と会えないかもしれないし。俺は希のことを世間一般で言うお姫様抱っこをして走り出した。そのまましばらくすると山に入った時にあった門にたどり着き、ことりや穂乃果などのμ' sメンバーが待ってた。

「やっと来た～」

「もう、遅いわよ」

「なんで希のことをお姫様抱っこしてるの？」

こいつら俺達の苦労知らないからそう言えるんだよ。

「秘密や」

そう言いながら希は俺の腕から飛び降りた。希さん、ちゃんと言ってください。そうじゃないとμ' sメンバーからの視線が痛いんです。

「ほな帰るで」

希がそう言い希を順番に駅へとみんな進んでいった。あの、希さん、本当にみんなに話してください。じゃないとことりに怒られます。

仕方ないので俺も駅に向かおうとすると、後ろから視線を感じたので振り返った。すると山にμ' sメンバー全員の偽物が立っていてこっちを見てた。偽物達が口を開き

何かを言っていた。恐らくだが

「「「「「「「ま　　た　　来　　て　　ね」」」」」」」

だろう。誰が来るか！

翌日、μ's の練習が終わりみんなが着替え終わった頃に部室に入ろうとすると

「・・・だからこれからもμ's のことを見ていきたいですね」

と俺の声が聞こえてきた。慌てて部室に入ると希が昨夜俺が言っていたことをみんなに聞かせていた。マジで恥ずかしいからやめてくれ。その後、穂乃果を中心に俺はその事を3日間ほど言われ続けた。

矢澤にこ誕生日記念

これはμ’ｓが結成する前の話。

ある日俺はいつものようにＡ―ＲＩＳＥのライブのチケットの抽選会にやって来ていた。Ａ―ＲＩＳＥファンになってからまだ数ヶ月しか経ってないが、部活の先輩のおかげで何度かＡ―ＲＩＳＥのライブにも行けてる。

この抽選の当たり枠は、ライブチケットや握手券などだ。だが１番の当たり枠はライブ後にＡ―ＲＩＳＥと会談のできるスペシャルペアチケット。ここにいるファンのみんなの目的はそれだろう。

そしていよいよ俺の番が来た。まあ、ライブチケットが当たればいいほうだろうと思いながら新井式回転抽選器を回した。

「おめでとうございまーす！特賞のスペシャルペアチケットでーす！」

・・・マジ？

こうして俺がスペシャルペアチケットを手に入れたのはにこ先輩の誕生日２週間前の出来事だった。

翌日、俺は部室に来ていた。いつものように部活があったからだ。そしてドアが開き
「にこ先輩、遅いですよ」
「アンタが早いだけでしょ。にこは2年生なんだから1年生と比べて、勉強も大変だし忙しいのよ」
「その1年生にテスト勉強を教わってたのはどこの2年生でしたっけ?」
「うっ、さあね。にこには心当たりがないわ」
・・・マジで都合のいい頭をしてるな。
「そうですか。・・・ところでいい知らせがあるんですけど聞きたいですか?」
「当たり前じゃない」
「実は、A―RISEのライブのスペシャルペアチケットが当たったんですよ」
「ッエェェーーーーー!!!本当?」
「はい!なので一緒に行きませんか?」
「・・・本当!?行くわ!!」
「それなら良かったです」
「でもなんで私を誘ったの?他にも一緒に行く友達とかいたんじゃない?」
「うーん、ことり達は誘ったら来てくれそうだけどペアチケットだから1人しか誘えま

せんし、中学時代の友達とは最近会ってないので。あと、ライブの翌日にこ先輩の誕生日じゃないですか。なので俺からの少し早い誕生日プレゼントですよ」
「・・・ありがとう」
今小声で何か言ったけどなんだろう？
「えっ？」
「感謝するわ！」
「喜んでもらえて良かったです」
その後は当日の予定などを決めて解散となった。

それからあっという間に時間が過ぎライブの日になった。
「ふわぁーあ、どうしてこんなに早くに集合するんだよ」
「何言ってるの！Ａ―ＲＩＳＥのグッズを買うからに決まってるじゃない！」
「だからと言っても朝６時集合は早すぎですよ。しかもにこ先輩、Ａ―ＲＩＳＥのグッズほとんど持ってるじゃないですか」
「確かにそうね。でも、持ってないのもあるのよ！しかも今回のライブは限定のグッズが販売されるんだから。早く列に並ばないといけないのよ！」
「そうですけど、今日のライブはＵＴＸでやるんですからこんなに早くなくても・・・し

かもＵＴＸは今日午前授業があるからグッズ販売は午後の３時からですし」
「口で言ってもわからないようだし、実際見た方が早いわね」
にこ先輩はそう言い、ＵＴＸの方へと向かってった。

ＵＴＸに着くと驚いた。こんなに朝早くから列を作って並んでる人が約３０名ほどいたからだ。
「マジ？」
「ほーら、分かったでしょ。彼らのような猛者達は私たちより早くに来てるのよ。それもグッズ欲しさにね。あそこにいる人たちは多分グッズをほとんどコンプリートしてるわよ」
うん、よく分かった。俺には彼らのような猛者にはなれないことが。
俺達が列に並ぶと前にいた人が話しかけてきた。にこ先輩に。
「おぉー、矢澤さん。ご無沙汰してます」
「あっ、塩田さん。こちらこそお久しぶりです」
「そちらの方は矢澤さんの連れですか？」
おっ、俺に話しかけてきた。
「はい、そうです。にこ先輩の後輩の岡田義政と言います。よろしくお願いします」

「これはご丁寧に。自分は塩田航大という者です。矢澤さんとはライブの物販の列で知り合いまして」
「そうなんですか。塩田さんはいつもこの時間ぐらいには並んでるんですか？」
「まあ、ほとんどのライブでは。そこで矢澤さんと色々な話をしてるんですよ。前のライブの時もＡ―ＲＩＳＥやれもんみるくの話を」
　あれ？なんかおかしいな？塩田さんは物販の列でにこ先輩と知り合った。知り合ったのはおかしくないけど前のライブの時も話したと。でも、そのライブ俺と一緒に行ったはずだけど・・・
「そのライブもこのくらいの時間から？」
「ええ、そうです。グッズを買ったら矢澤さんはどこかへ行ってしまいましたが」
　やっと理解が追いついた。にこ先輩はいつもこの時間に並びグッズを買って、俺との集合場所に来るんだろう。
「そうなんですか。多分その時に俺を迎えに来てくれてるんだと思います」
「あー、だから最近のライブはグッズを買ったらすぐにどこかへ行ってしまうのですね」
「そうです。今日は義政がチケットを持ってるので朝から一緒に来たんですよ」
「へぇー、そうなんですか。ですけどチケットを貰って矢澤さんだけ先に来るとか出来たんじゃ？」

「普段ならそうするんですけど今回のチケットは特別なもので」
「特別？少し見せてもらっても？」
「ええ。義政、見せてあげて」
「分かりました」
　そうして俺はスペシャルペアチケットを取り出した。すると、塩田さんは
「す、す、スペシャルペアチケットおおおーーー!!」
　叫んでしまった。すると周りにいた人も
「なに、本物か？」
「是非とも売ってくれ！」
　と雪崩のように押し寄せてきた。
「義政、早くしまいなさい！」
「わ、分かりました」
　急いでチケットをしまった。すると押し寄せてきた人達は
「そんなの持ってるやついねえじゃん」
　などの言葉を言いながら元いた場所に戻ってった。
「本当に申し訳ない」
　と塩田さんは謝ってきた。

「いや、別にいいですよ」
　にこ先輩は大人の対応をしていた。
「それにしてもスペシャルペアチケットを当てた人がこんなに近くにいるとは」
「私も義政が当てた時には驚きましたよ」
「まあ、自分の分もＡ―ＲＩＳＥと話してきてくださいね」
「「分かりました」」
　それから９時間ほど立ち話をしながら過ごした。うん、分かったことはもうこんな早くからは並ばないと決めたことだ。そしてグッズ販売の時間になり、このライブの限定グッズをにこ先輩は買いにいった。てか、俺を置いてった。俺もにこ先輩のとこに行き
「なにか欲しいものありますか？」
　と聞いた。
「ここにあるやつ全部ね」
　にこ先輩は当たり前のように答えた。
「いや、１番欲しいものは？」
「うーん、これかしら」
　にこ先輩が選んだのは今回のライブ限定のポスターだった。お値段は３０００円と割と良心的なものだ。

「分かりました」
とだけ言い、俺はそのポスターを持っていった。そしてポスターを買ってからにこ先輩の元に戻り
「どうぞ」
とにこ先輩にポスターを渡した。
「なんでよ」
「誕生日プレゼントですよ。チケットは実質タダで手に入れたようなものですし、ちゃんとした物をあげたかったんで」
「・・・ありがとう」
「どういたしまして」
そんなこともありながらグッズも買い終わり、俺たちは会場へ入る列へと並びだした。
「6時から開演でしたっけ?」
「そうよ」
「お腹減りませんか?」
「入場は5時だから中に入ってからご飯でも買いに行けばいいでしょ」
「そうですね。ところでにこ先輩、塩田さんは?」

「あー、塩田さんは今日のチケット取れなかったのよ。だからと言って今日はグッズ買いに来ただけ」
　うん、ガチ勢って凄いんだな。
「塩田さんはどこに住んでるとか分かります？」
「埼玉って言ってたわ」
　・・・埼玉から6時くらいに秋葉原に来て、グッズ買うだけで帰るのか・・・　本当にファンなんだな。
「ちなみに昨日のうちには東京に来ててホテルに泊まってたそうよ」
　うん、やっぱりガチ勢って怖いわ。

　そんな話をしていたら入場が始まった。俺たちの席はいちばん前の列の中央部だった。本当に凄いチケットらしい。俺は席に着くとＵＴＸの敷地内にあるお店でホットドッグを2本買った。もちろん片方はマスタード抜きだ。それを席まで持ち帰り、マスタード抜きの方をにこ先輩に渡した。
「今日の義政、優しすぎない？あとが怖いんだけど」
「酷くないですか？」
「冗談よ」

本当にこの先輩の冗談は酷いよな。
「あと３０分で開演よ。準備は出来てる?」
「もちろんですよ。この通りブレードも」
「なら大丈夫そうね」
そして、６時になった。いよいよ開演だ。ステージにＡ―ＲＩＳＥの３人が出てきた。優木あんじゅ、統堂英玲奈、綺羅ツバサの順にだ。そして多少のＭＣが入りいよいよ歌が流れ始めた。いきなり「Ｐｒｉｖａｔｅ　Ｗａｒｓ」が流れ俺は興奮した。それからＡ―ＲＩＳＥは５曲ほどぶっ続けで歌い、１度休憩に入った。
「今回のライブ、いつもと違いますね」
「まあ、そうでしょうね。Ａ―ＲＩＳＥにとって今回のライブは初めてのライブからちょうど１年なんですもの」
「なるほど。だからあんなに気合が入ってるんですね」
「そうね。あとは席が近いからいつもと違って見えるのもあるかもしれないけど」
それから再びＡ―ＲＩＳＥが出てきてライブは再開された。そしてライブも終盤になり残り数曲になった時、Ａ―ＲＩＳＥメンバーはソロ曲を披露すると言った。
「今回のライブ、凄くないですか?今までにないライブですよ」
「・・・」

あれ？返事がない。と思いにこ先輩の方を見ると、にこ先輩は頬に涙を流しながら憧れの眼差しをＡ―ＲＩＳＥに向けていた。それもそのはずだろう。にこ先輩は元々音ノ木坂でスクールアイドルをやっていたのだから。でも、その夢は途中で途切れた。しかも、仲間がにこ先輩について行かないという結末で。それでもにこ先輩は諦めずにアイドル研究部を続けた。しかしいつまで経ってもあの時の続きが出来ない。だから今泣いてるのだろう。そして憧れてるのだろう。その時俺はにこ先輩がスクールアイドルを諦めきれてないことを改めて実感できた。

そしてライブが終わった。アンコールの時にと新曲を披露し、累計４曲もの新曲を披露してくれた。そして帰宅準備をしているとＵＴＸの関係者がやってきて

「おふたりはこれからＡ―ＲＩＳＥとの会談がありますよね？」

・・・忘れてた。ライブが凄くて完全に忘れてた。

「あっ、そうでしたね」

「では、荷物を持ってついてきてください」

と言われ俺たちはその人について行き、ＵＴＸ内のカフェテリアの少し外れた若干個室じみた場所に案内された。

「ここで待っていてください。すぐにＡ―ＲＩＳＥが来ますので」

そう言いその人はどこかに行ってしまった。

「いよいよですね」
「そ、そうね」
「緊張してるんですか？」
「し、し、し、してないわよ」
いや、めちゃくちゃ声が震えてるんだけど。それで緊張してないならすごいよ。
などと思ってると
「あら、今回は恋人さん？」
と声がかけられた。
「「違います（違うわよ）!!」」
声を大きく反論してしまったが既に時遅し。俺たちが大声で反論したのはＡ―ＲＩＳＥリーダー綺羅ツバサだったからだ。
「「すみません」」
「別にいいけど、本当に恋人じゃない訳？すごく息があってるけど」
「こら、ツバサ。あまりそういうことは聞くな」
マジか。統堂英玲奈まで来たよ。
「置いてくのは酷いじゃない」
ことりと同じくらいの脳トロボイスが聞こえた。そちらの方を見ると優木あんじゅ

がいた。マジか・・・　A―RISEが揃っちゃったよ。
　それから改めて自己紹介となった。
「私はA―RISEのリーダー綺羅ツバサ。よろしくね」
「私はA―RISEの統堂英玲奈。一応A―RISE作詞担当だ。よろしく頼む」
「私はA―RISEの優木あんじゅ。衣装の担当をしてるわ。よろしく」
　・・・なんでみんなA―RISEって言うの?そこは知ってるよ。まあ、A―RISEとしての会談だからだろうけど。
「わ、わ、私は矢澤にこです。音ノ木坂学院の2年生でA―RISEの大ファンです」
「えっと、俺は岡田義政。同じく音ノ木坂学院の1年生です。A―RISEファンになってからは短いけど俺の見てきたアイドルでイチオシのグループです」
「にこさんに、義政君ね。それでどんな話をしたい?」
「毎日どんな練習してるんですか?」
「それはね・・・」
　あっ、俺だけ置いてきぼりなやつだ。そんなことを思ってると
「義政君は、この3人で誰が1番の推しメンなのぉ~?」
　とあんじゅさんが聞いてきた。
「えっ、それは・・・」

「もしかして遠慮してるのか？それならば遠慮する必要は無いぞ」
「確かにそれは聞きたいわね。にこちゃんは私たち全員が好きらしいし」
「言わないといけないですか？」
「「ええ（ああ）」」
「それじゃあ、あんじゅさんです」
「やった」
「くっ・・・」
「負けたかぁ」
「それでなんで私なのぉ？」
「・・・すごい失礼ですよ。俺があんじゅさん推しな理由。それでもいいですか？」
「別にいいわよ」
「・・・俺の好きな子に似てる部分があるからです」
「えっ!?」
「ちょっ、義政。そこは嘘でもいいからもっともらしい理由を言いなさいよ」
「いや、だって別にいいってあんじゅさんが言うから」
「いや、予想してた答えと違くて驚いてただけ。だから大丈夫」
「これは勝負的にありかしら？」

「そうだな。後で話し合おう」
「でも、義政君は私が推しメンなのには変わらないんだからいいじゃない」
「なんの話してるんですか？」
「大丈夫よ。私たちだけの話だから」
「はあ。聞きたいことあるんですけどいいですか？」
「ええ、何でもどうぞ」
「もしも今ここで俺がＡ―ＲＩＳＥを超えるスクールアイドルを知ってるって言ったらどうします？」
「それが本当なら是非会わせてもらいたいわね。まあ、私たちが負けることはないだろうけど」
　すごい自信だな。まあ、当然か。現役のスクールアイドルトップなんだし。
「まあ、知らないんですけどね」
「嘘つかないでよ」
「いやー、すみません。どういう反応するか見たくて」
「そう。でも、私たちを超えるスクールアイドルがいるなら会いたいわね」
「そうだな」
「そうね」

「まあ、Ａ―ＲＩＳＥの皆さんに負けないくらいの力を持った人なら知ってますけど」
「「「誰？」」」
なんか声多くね？
「にこ先輩ですよ」
「はあ！何言ってるの義政。私がそんなにすごいわけ」
「すごいですよ。だって１人になってもスクールアイドルの夢を諦めなかったんですから」
「でも、私がＡ―ＲＩＳＥに並ぶなんて」
「そうね」
「えっ？」
「私はすごいと思うわよ。１人になってもスクールアイドルを諦めないのは」
「だが、私たちはそう簡単に肩を並べなれるとこにはいないぞ」
「ええ、だってＡ―ＲＩＳＥですもの。私たち３人が揃えば完全にフルハウスなんだから」
・・・何今の。完全にフルハウスって。
「だから言ってるじゃないですか。力を持ってるって」
「えっ？」

「確かに今のにこ先輩はＡ―ＲＩＳＥに並ぶほどの力を持ってません。ですが、そのために必要なものは持ってます。それもＡ―ＲＩＳＥとは違うものを」
「そう。なら、いつ私たちに並ぶのかしら？」
「今はまだとしか言えません。ただ必ずＡ―ＲＩＳＥに追いつけると思いますよ」
「そう。なら楽しみにしてるわ。あなたの言う時が来るまで」
「ええ、楽しみにしててください」
　そうして俺たちとＡ―ＲＩＳＥとの会談は終わった。ＵＴＸを出る直前、ツバサさんが俺に
「あなたには輝きが見えるの？」
　と聞いてきた。俺がその質問に答えられないでいると
「何でもないわ」
　と言い、ツバサさんはＵＴＸ内へと戻ってった。

　帰り道
「とんでもないこと言ってくれたわね」
　にこ先輩は怒ってた。まあ、当然だろう。俺も反省はしてる。後悔はしてないがな。
「いや、俺はにこ先輩がＡ―ＲＩＳＥに並びそうな感じがしたから言っただけで」

「でも、天下のＡ―ＲＩＳＥに喧嘩売る必要はなかったじゃない。これじゃあ次のライブ行けないわよ」
「それは大丈夫じゃないですか？」
「なんでよ」
「だってあの時の３人の顔、笑ってましたもん。そうなったら楽しみだみたいな顔で」
「本当に？」
「本当ですよ」
「なら、良かった～。そうだケーキ奢りなさいよ」
「なんでですか？」
「私に無駄な心配かけされたからに決まってるじゃない」
「わかりましたよ。１個だけですよ」
「やったぁ」

こんな感じだったよな。去年のにこ先輩の誕生日プレゼントは。今年はどうするか？
「何ぼやけた顔してるのよ？」
「いや、にこ先輩への誕生日プレゼント考えてて」

「いらないわよ」
「えっ？」
　にこ先輩がいた。
「いらないわよって言ったの」
「なんですか？」
「だってμ’ｓって居場所をくれたじゃない。それが最高のプレゼントよ」
「分かりました、そういうことにしておきますね」
　まあ、プレゼントはあげるけど。
　とりあえずケーキの積み合わせを当日にあげた。

高坂穂乃果誕生日記念

夏休みも中盤に差し掛かったある日。μ'ｓの練習も終わり、その後恒例の反省会に入った。いつものように海未や絵里から今日の練習でダメだった点について指摘が出て、それぞれが言われた点を改善するためにどうするかを話し合っていた。

「1番の問題は練習時間よね」

「そうですね。ですが、この暑さですので無理はしない方がいいのでは？」

「そうよね。練習が始まる1時間前に義政が打ち水してくれてるのにこんなに暑いんじゃ」

「朝と夕方に練習するのはどう？」

おっ、穂乃果にしてはいいアイデアだな。だけど

「時間が合わない人が出てくるんじゃない？」

そう思った。

「そっかぁ～」

「他に誰かいいアイデアはない？」

「ぶ、部室で練習するのは？」

「いいアイデアだと思うけど、1曲まるまる踊る時狭くないかしら？」
「そ、そうですね」
「待ってください。個人個人で別の練習する時は部室で全体で練習する時は屋上ならいいんじゃ？」
「そうね。そうしましょう」
「花陽。花陽のおかげでこのアイデアが出たんだ。ありがとな」
「い、いえ」
「それじゃあ、今日の練習は終わりでまた明後日から頑張りましょう」
「分かりました」
　それで俺が帰ろうとした時だった。穂乃果が
「ちょっと待って義政くん。少し話があるんだけど…　いい？」
　と言ってきたのは。

「それで話ってなんだ？」
「実は…」
　これってもしかして告白なのか？いや、しかし俺には心に決めた相手が。

「明日、ウチでバイトしない？」
・・・そんなはずないよね。
「バイト？それだったらことりや海未を誘えば良かったんじゃ？」
「２人とも予定があって手伝えないんだよ～。それで義政くんに白羽の矢がたったわけで」
・・・あの穂乃果が白羽の矢なんていう難しい日本語を使ってるだと・・・ 明日は雪が降るんじゃ？
「お～い、義政くん。手伝えるの？」
「あ、ああ。一応暇だし手伝えるぞ」
「ありがと。じゃあ、明日朝の５時に来てね」
えっ？朝の５時？冗談じゃなくて？てか、穂乃果もういないし・・・

俺が家に着くと何故かことりが家の前にいた。
「どうしたんだ？」
「穂乃果ちゃんに何言われたの？」
「えっと、明日お店を手伝って欲しいと言われただけだよ」

「本当に？」
「逆に嘘をつく理由がないだろ」
「良かった。もしも穂乃果ちゃんに告白でもされてたら流石に許せなかったよ。・・・・・・」
「最後何か言ったか？」
「何も言ってないよ。じゃあお手伝い頑張ってね」
「おう」
　そうしてことりは自分の家に駆け込んでいったがなんで待ってたのか・・・　俺には分からん。

　翌日、俺は朝早くにセットした目覚ましの音により目が覚めた。そして朝食を食べ穂乃果の家に向かった。
　穂乃果の家に着くと穂乃果母が出迎えてくれた。
「いらっしゃい義政くん。今日はありがとね」
「いや、たまに手伝ってますし平気ですよ。それで俺は何すればいいんですか？」
「和菓子作りを手伝って欲しいんだけど・・・」
「分かりました」

「じゃあ着替えてきてね。はい」
と服を渡された。
「着替える場所は？」
「あっ、リビング使っていいわよ」
「分かりました。ところで穂乃果は？もう厨房にいるんですか？」
「えっとね、さっき起きて大急ぎで着替えてるの」
「ああ、なるほど。じゃあ着替えたら厨房行きますんで」

リビングでちょうど服を脱いだ時ド、ド、ドと階段を駆け下りる音が聞こえた。そして
「お母さーん」
と穂乃果がリビングに入ってきた。俺が着替えてる最中の。
「キャッ、って義政くん？な、なんでパンツしか、は、履いてないの？」
やべぇ、俺捕まっちゃうかも。全国ニュースものだよ。『スクールアイドルの闇！メンバー宅にマネージャー侵入。服を脱いでいた模様』
なんて報道されるかも。
「ち、違うんだ。和菓子作り手伝うために着替えてただけだから。頼むから見逃してく

れ」
「そ、そうなんだ。じゃあ、私先に厨房行ってるから」
と穂乃果は厨房に向かったがあれは絶対に引かれてた。

着替えも終わり厨房に向かうと既に穂乃果と穂乃果父と穂乃果母が和菓子を作っていた。
「着替え終わったので何すればいいですか？」
「生地作ってくれない？」
「分かりました」
そうして俺は生地を作り始めた。穂乃果と一緒にだ。すごい気まずい。生地の形を整えるのは穂乃果のため、俺は生地を作り穂乃果に無言で渡す作業だった。それが２時間ひたすら繰り返された。まあ、俺も生地の形を整えるのは少しずつやってたけど。
「穂乃果、そろそろこっち手伝って」
「は～い。あっ、義政くん。もっと優しく生地をこねてね。じゃないと穂むらの味にならないから」
「わ、分かった」
それだけ言い穂乃果は仕上げの方へと行った。いつもより生地を作る時力が入って

たようだ。理由は分かってるが…　それにしても穂乃果はすごいな。僅かな違い気づいたんだから。さすがは和菓子屋の看板娘と言うべきか。てか、穂乃果にいつ謝ればいいんだ…

それからさらに時間が経ち、穂乃果母は店番にでて、穂乃果父は材料の買い出しに行くことになったため厨房にいるのは俺と穂乃果だけになった。しばらくの間無言の作業が続き

「材料も無くなってきたし、1度休憩にしよう」

と穂乃果が言った。

「分かった」

うん、分かってたことだけど会話が続かない。本当にこの空気どうすればいいの？

「義政くん、さっきのことは気にしてないからね」

そんなこと思ってたらいきなりこの空気作った元凶について話し出したよこの人は。

「そんなこと言われても俺の中じゃ申し訳なさでいっぱいなんだけど…」

「大丈夫だよ。私頭悪いからすぐ忘れちゃうし」

ああ、穂乃果は自分のことを蔑んでまで俺のことをフォローしてくれてるんだな。これ以上穂乃果に自分のことを蔑ませる訳にはいかないし、俺もこのことについては気にしないでいくか。

「・・・ありがとな穂乃果。おかげで元気がでた！」
「それならいいけど・・・」
「このあとは何すればいい？」
「う～ん、材料が来るまで待機かな」
「分かった。あと生地の件もありがとう」
「あれは義政くんが私に渡してくる生地が固かったから言っただけだよ」
「はー、やっぱり分かるもんなのか？生地の質っていうやつ」
「う～ん、なんて言うか感覚的に？前、義政くんが作った生地と比べても固かったし・・・」
「俺としては普通に作ってたつもりだけどな」
「そっか～、でも私が生地について言ってからはちょうど良かったけど？」
「じゃあ穂乃果が天才ということでいいんじゃないか？いよ！穂むらの看板娘!!」
「もぉ～、恥ずかしいこと言わないでよ」
「いや、ただ単にそう思ったから言っただけだ」
「ふ～ん。そうだ！義政くんが作るのを失敗した生地があるはずだからそれをほむまんと同じように作って、ほむまんと食べ比べてみようよ！そうすれば義政くんにも違いがわかると思うよ」
「いいけど材料は？」

「ちょっとだけなら材料余ってるから。用意だけしといて。ほむまん貰ってくるから」
「いや、お金は払うよ！」

　それから穂乃果がほむまんを持ってきて（後できちんとお金は払いました）俺の失敗した生地でほむまんを作り始めた。てか、穂乃果さん、作るの早くないですか？手際が良すぎるんですが・・・　俺が作るとしたらまだ1つも作れてません。
「すごいな穂乃果」
「えっ？」
「いや、こんなに早く和菓子を作れるのがすごいと思って」
「別にこれくらい普通だよ～」
「こうして話してる最中にも作れてる人に普通と言われても・・・」
「海未ちゃんだって私と同じくらいのペースで作れるよ」
「いや、そうだけどさ。形が崩れるじゃん。海未が穂乃果と同じペースで作ったら。ペース落とせばきちんとしてるけど」
「それは仕方ないよ。こういうのは慣れだもん」
「俺にはできる気がしないのだが・・・」
「じゃあやってみる？」

「はあ？」
「だからやってみる？私たちしか食べないんだし」
「じゃあやってみるか」
　そこから穂乃果の和菓子作り講座が始まった。うん、見てるだけだと簡単そうだけどやってみるとすごい難しいわ。しかもこれを穂乃果と同じペースとか相当修行しないとできないんじゃないか？うん、やってみて分かったことはまず1番に穂乃果はすごいってことだな。そして俺にも多少は才能というものがあったことか。穂乃果に比べたら遅いが形もちょうどいいように作れるようになったからな。
「すごいよ義政くん。これならお店に出しても文句ないよ」
「それは言い過ぎだろ」
「大丈夫だって。お母さーん」
「何かしら？」
「ちょっとこっち来て～」
「分かったわ。雪穂少しだけ店番お願いね」
　いや、なんで穂乃果母が来るんだよ。俺たちだけってさっき穂乃果が言ってたじゃん。
「これが義政くんの作ったやつだけど、お店に出せるよね？」

「う～ん、そうね。これならとりあえず文句は言われないと思うわ。でも、生地がダメじゃない？」

・・・穂乃果母も化け物だったか。なんで見ただけで分かるの？普通無理じゃね？

「まあ、義政くんの失敗した生地で作ったからね」

「それならきちんとした生地で作ればお店にも出せるわね。あっ、お父さんも帰ってきたしテストしてもらいましょうか」

・・・なんでこんな話になってるの？

場面は変わり穂乃果父が穂乃果と穂乃果母から事情を聞き、俺のテストをすることになった。と言っても俺が作れるのはほむまんだけなのでほむまんを作り穂乃果父が認めれば正式に俺の作るほむまんがお店に出されるわけだ。うん、なんでこうなった？

まあ、仕方ないのでただいま生地からほむまんを作ってる。テストと言われて手を抜く俺ではない。どんなテストも優秀な成績を収めてきた身としてはこのテストも合格しなければ。そんなわけで俺は本気でほむまんを作っていた。そしてほむまんを４つ作り終わり、穂乃果と雪穂、穂乃果父と穂乃果母に出した。てか、雪穂。店番はどうした？

そして俺の作ったほむまんがそれぞれの口に運ばれた。まず最初に口を開いたのは穂乃果だった。
「うん、美味しいよ！これなら普通にお店に出せるよ！」
「そうだねお姉ちゃん。お姉ちゃんの作るのよりも美味しいかも」
「雪穂ぉ？」
「冗談だよぉ」
なんか姉妹漫才やってるんだが・・・　問題は親２人だな。
「うん、美味しい。問題ないわね」
おっ、穂乃果母からはＯＫがでたぞ。あとは
「・・・」
すごい緊張してきたんだが・・・　なんで何も言わないんだ？まさかダメなのか・・・
「・・・」
頼むから何か言ってくれ。
「どう？」
穂乃果母の助け舟がでた。
「・・・」
グッ！と穂乃果父は無言のまま手を前に突き出した。

「合格でいいのね？」
穂乃果父は無言で頷き
「・・・」
穂乃果母に何か耳打ちをして、再び和菓子を作り始めた。すると穂乃果母が
「じゃあ穂乃果と雪穂。店番お願いね。義政くんはここでほむまん作り頑張って」
「はーい」
「えっ、分かりました」
そうして穂乃果と雪穂は店番にいき、厨房には俺と穂乃果父と穂乃果母が残った。何この状況？とりあえず、ほむまんを作るため生地を作ってると
「生地は私がやるから仕上げの方だけお願い」
穂乃果母が言ってきた。
「分かりました」
俺はそのまま穂乃果父の隣に行きほむまんを作り始めた。しばらくの間この体制で作業が進んでいった。すると穂乃果父が突然
「義政くん、穂乃果のことどう思っているんだ？」
と聞いてきた。俺は驚いた。まず何よりも穂乃果父が話すところを穂乃果の話でしか聞いたことがなかったからだ。

「突然なんなんですか？」
「いや、気になってな」
　うん、話す時間は最小限だな。話に聞いてた通りだ。
「まあ、いいですけど。最高の友達ですかね」
「それだけか？」
「まさか。本当に俺と友達でいいのかって思うぐらい明るくて可愛い女の子ですよ」
「・・・そうか」
　それで俺と穂乃果父の話は終わったが穂乃果父は何が言いたかったのか。

　それからあっという間に時間が過ぎ既に午後の3時頃になっていた。ちなみに今は穂乃果と一緒に店番をしている。
「お客さん来ないね～」
「それをお前が言うのか？」
「だって本当に来ないんだもん」
「ノーコメントで」
「はぁ、暇だなぁ」
「俺に何かして欲しいのか？店番中だからやれることは少ないが」

「しりとりやろうよ」
「なんでだよ」
「暇だから？」
「疑問形はやめろ」
「じゃあ何するのぉ～」
「いいから少し静かにしろよ。そのうちお客さん来るから」
「なんか義政くんが私の立ち位置にいる気がする」
「確かにな」
　ガララと扉が開いた。まだ小学生ぐらいの子がお母さんに連れられて入ってきた。
「ほらな。お客さん来ただろ」
「そうだね～」
　なんか反応が薄いが気にしてはいけない。すると女の子が穂乃果に
「お姉さんたちは恋人同士ずら？」
　と聞いていた。ずらって何？
「えっ、違うよ。あの人はね夏休みなのに遊ぶ人がいなくてバイトしかやることのない可哀想な人なの」
「教えてくれてありがとずら。可哀想な人もバイト頑張るずら」

とその子はほむまんを買って帰っていった。
「あの子可愛かったね。ずらってどこの方言だろう？」
「ああ、可愛かったな。それよりも誰が可哀想な人だって？」
「あ～、ごめんね」
と穂乃果は調子に乗ったような顔で謝ってきた。うん、可愛いから許せます。
「次からはもう少しまともな紹介してくれよ」
「うん！」
それからもたくさんのお客さんが来てあっという間に日がくれた。

「今日はありがとね」
「いえいえ、また今度も手伝いますよ」
「じゃあ、ウチでバイトしない？」
「いや、今日したんですが？」
「そうじゃなくて正式に」
「そういう事ですか。流石にそれはできませんね」
「なんで？」
「今、俺はμ' sのマネージャーをやっているんで。バイトとかはできませんよ。今は

何よりもμ’ｓが優先事項ですから。なあ、穂乃果」
「うん！義政くんにバイトはして欲しいけどμ’ｓが優先だもんね」
「そういうわけなんで練習がない日くらいは手伝えるんで。その時は是非言ってください」
「分かったわ。あっ、今日のバイト代これでいい？」
「いや、いりませんよ。お昼ご飯ご馳走になりましたし」
「そう？ならほむまん持ち帰ってみんなで食べてね」
「分かりました。ほむまん頂きますね」
「じゃあ気をつけて帰るのよ」
「分かりました」
「あっ、送ってくよ」
「別にいいよ。こんなに遅い時間に穂乃果を出歩かせる訳にはいかないし」
「それは義政くんも一緒だよ」
「全然違うだろ。穂乃果みたいな可愛い子を夜1人で歩かさせれる訳ねえだろ」
「・・・えっ？」
「そういうわけだから帰るな」
俺は駆け足で家に向かった。

翌日俺が部室に入ろうとすると中で話し声が聞こえた。どうやら穂乃果が昨日のことを話してるらしい。
「それで義政くんが私に可愛い子って言ってくれたんだぁ～」
「まあ、当然じゃない？夜だったんでしょ」
穂乃果さん、できればその話はしないで欲しかったなあ。俺がこのあと部室に入る勇気がなくなっちゃうよ。まあ、入るしかないんだろうけど。部室に入ると
「あっ、義政くん。昨日はありがとね」
「おう」
「それでお願いがあるんだけど」
「またか？」
「うん、また来週も手伝ってくれない？今度は海未ちゃんとことりちゃんもいるから、昨日よりは楽だと思うよ」
「りょーかい」
うん。俺の夏休みはμ’ｓのマネージャー6割宿題3割穂むらでのバイト1割の夏休みになりそうだな。

南ことり誕生日記念

ただいまの時刻は８時５５分。おかしい。いつものことりなら既にこの時間には来ているはずだ。そんなことを考えながらも俺はことりのことを待つことにした。

すでに集合時間の９時を１０分ほど過ぎた。もしやことりに何かあったのではと不安になる。その時ことりから連絡が来た。

『ごめんね。少し遅れちゃう。本当にごめんね』

だそうだ。とりあえずことりが無事だったので良かった。

『分かった。気をつけて来いよ』

返信だけした。にしてもなんで家が隣同士なのにわざわざ待ち合わせなんてしたんだ？いつもはどちらかの家に集合なのに。

それから１０分ほど経ってことりがやって来た。めちゃくちゃ可愛い。いつも可愛いが今日はそのいつものことりが霞むほど可愛い。１目見るだけですごいオシャレをしてきたのが分かった。

「ごめん！」

開口一番にことりは謝ってきた。
「いや、いつもことりは集まるとき早いから平気だけど…何かあったのか？」
「いや、何かあったわけじゃないけど…　ただ、ちょっとだけ夢中になっちゃって」
何に夢中になったのかは聞かなくてもわかる。
「あー、だったらいいんだ。何も無くてよかったよ。あと、その服めっちゃ似合ってるよ。すごい可愛い！」
すると、ことりの顔はものすごい勢いで赤くなった。
「あ、ありがとう」
「本当のことを言っただけなんだから感謝の言葉はいらないよ。それよりも早く行こうぜ。混んじゃうだろ」
「うん！」
それから俺とことりは本日の目的である遊園地に向かった。

電車に乗って移動していると妙な視線を多数感じた。まあ、それも仕方ない。なぜならことりは今や有名人だからだ。スクールアイドルμ'ｓのメンバーの1人として知らない人などほとんどいないほどにだ。こうなったのも3月に海外ライブを行ってからだ。あのライブは日本でも中継されていたらしく、それによりμ'ｓ人気は爆発的な

ものになった。それから半年経ったが、未だにμ'sの人気は衰えていない。そんなμ'sメンバーの1人であることりが男と一緒に同じ電車にいたら見られてしまうだろう。現に今も

「なあ、あの子って南ことりだよな？」

「絶対そうだろ。それよりも一緒にいる男は誰なんだ？」

「本当だよな！釣り合ってないぞ！」

「だな。それよりもサイン貰えないかな？」

などと会話が聞こえてくる。いや、まあ、俺も俺とことりが釣り合ってるとは思ってないけど。そんなことを考えてると話をしてた男が2人近づいてきた。

「あの？南ことりさんですよね？サインくれませんか？」

「あっ、俺もお願いします」

こいつら図太い神経してるな。どう見ても俺とことりが一緒にいるのを分かってるのにサインお願いしに来るなんて。もう少し場所をわきまえろよ。

「もちろんいいですよ」

「おぉーー！」

「やったー！」

いやぁ、流石ことり。我らが女神だな。こんな非常識な奴らにもきちんとサインをあ

げるなんて。
「でも、義政くんに謝ってもらっていいですか？」
「えっ!?」
「義政くんが私と釣り合ってないって言う話が聞こえてました。でも、私はあなた達にそんなことを言う資格はないと思うんです。だから、謝ってください」
「は、はい・・・」
「分かりました」
２人はそう言うと俺に
「すみませんでした」
謝ってきた。
「いや、別にいいけど」
「あっ、サインでしたよね？何か書くものありますか？」
その後ことりは２人の出てきたノートにサインをして２人はそのまま次の駅で電車を降りていった。

「ことり、ありがとな」
「えっ？何が？」

「いや、さっき俺がことりに釣り合ってないって言われたの謝らせてくれたことだよ」
「当たり前のことをしただけだよ。むしろ、私ちょっと怒りそうだったもん。なんで義政くんは自分が馬鹿にされてるのに大丈夫なの？」
「いや、実際に俺とことりは釣り合ってないだろ。だから言われてもあまり堪えなかったんだよ」
「それは違うよ」
「え？」
「私が義政くんのことを好きなんだから付き合ってるんだよ。それなのに私と釣り合ってないなんておかしいよ。私と義政くんが釣り合ってる釣り合ってないかは私たち自身が決めることなんだから。勝手に1人で解釈しないで」
「ああ、ごめん」
「うん！それに赤の他人の評価なんて気にする必要ないよ。穂乃果ちゃんや海未ちゃんは私たちのことお似合いだって言ってくれてたもん」
「そうだな」
「じゃあ、早く遊園地行こうか」
「ああ」

遊園地に着くと物凄く混んでいた。見渡す限り人、人、人しかいない。
「すごい混んでるね」
「まあ、それはそうだろ。休日だしな。どれ乗る？」
「う～ん、ジェットコースター？」
「・・・マジで？」
「うん！ダメ？」
はい、その顔は反則だと思います。ことりにそんな顔されたら断るなんて手段はない！
「もちろん問題ないぞ」
そんなわけでジェットコースターに乗ることになったのだが、うん、ちょっとやばいかも。なんなのこのジェットコースター。３回転ぐらいしてるんだけど。
「楽しみだね～」
あっ、ことりの笑顔が多少黒い。これって絶対にはめられたやつだよ。たまにこういうことしてくる面も可愛いから許しちゃうけど、もしもことり以外なら即リタイアものだよ。
そんなこんなで俺たちの順番が来た。うん、結論から言おう。このジェットコースター作ったやつちょっと出てこい。何を考えたらこんなのができるのかを問いただし

てやる。そんくらいやばかった。よく、俺の三半規管持ってくれたよ。
「次、どうする？」
「義政くんの好きなのでいいよ」
「じゃあ、お化け屋敷で」
「えっ！」
「怖いのか？」
「べ、別に怖くはないけど」
うん、怯えることりも可愛いです。俺がお化けならこのことりを見ただけで成仏ものだな。
「怖いんだったら別に行かなくてもいいぞ」
「ううん、大丈夫だよ。義政くんが一緒にいるから」
ああ、本当に成仏してもいい。なんでそういうことを言ってくれるんですかね？
「あー、じゃあ行くぞ」
俺が歩き出すと、ことりが手を握ってきた。
「手、繋いでいい？」
「あ、ああ」
可愛すぎない？もう俺一生お化け屋敷に住んでもいいかも。だって、ことりが手を

握ってくれるんだぜ。もう最高すぎるだろ。そんなことを考えながら俺たちはお化け屋敷の中に入っていった。

ひたすら暗い。いや、多少の明かりはある。しかしそれはどれもこれも消えかかってる照明のため、余計に怖さを感じさせる。

「義政くん、怖くないの？」

「まあ、雰囲気は怖いけどそこまで怖くはないな。さっきのお化け役の人もなんか拍子抜けしたし。それよりもことりは大丈夫なのか？」

「うん！大丈夫だよ！義政くんが手を握ってくれてるから」

やべぇ、めっちゃ嬉しい。生きてて良かった。

「んじゃ、さっさとここから出ようぜ」

「そうだね」

そんな感じで道を進むと何やら子どもが泣いている声が聞こえた。

「この先だよな？」

「そうだと思うけど」

曲がり角を曲がると隅の方に女の子が1人ですすり泣いていた。ことりはいち早く

「大丈夫？どうしたの？」

と女の子を心配し、声をかけた。俺もそれにならい

「親と離れたのか？」
　声をかけた。すると女の子は
「ママがいないの」
　と答えた。
「ママ？いつ離れちゃったの？お姉ちゃんたちと外まで行く？」
「ううん、ママが来るまで待つ」
「いや、そうは言っても多分君のママは外で待ってるんじゃないか？」
「来てくれるはずだもん」
「でも、流石に女の子を1人で残しては行けないよ」
「だよな～、どうするか？」
　そんな時だ。後ろからコツンと足音のようなものが聞こえた。俺は最初、次の人が来たのかと思い振り返りもしなかった。しかしその予想はことりの一声でかき消されてしまう。
「キャァァーーー！」
「どうしたことり？」
　と俺も後ろを振り向くと、後ろには誰もいなかった。ただ、長い髪の毛が上からぶら下がってるだけでだ。俺が天井を見上げると、天井を這いつくばるようにこちらに進ん

でくる女がいた。・・・やばくね？なんか本物ですよ感がめちゃくちゃ出てるんですけど。俺はすぐにことりと女の子の手を繋ぎ走り出そうとした。すると今度は女の子がこちらを振り向いた。その顔には本来ならあるべきはずの目がなかった。俺は女の子の手を振りほどきことりのことを抱えてその場から逃げ出した。

外に出てから落ち着くまで数分かかった。

「大丈夫か？ことり」

「うん。ただ、とっても怖かったよ」

「ああ、あれが人による演出だとしてももう二度とお化け屋敷には行かないことにする」

「だよね。あと、ありがとね。私のこと抱き抱えてくれて」

「いや、あの時はことりのことだけは無事に逃がさないとって思ってたから必死でした」

「だから、ありがとね。ご飯にする？」

「そうだな。んじゃ行くか」

レストランに着き、俺たちは昼食を頼んだ。俺とことりはパンケーキセットを頼んだ。このレストランのセットにはスイーツかドリンクがついており、俺たちはスイーツをセットに頼んだ。俺のセットとしてついたきたのはチーズケーキでことりのはショートケーキだった。すごいことりが羨ましそうにこちらを見てきた。

「ことりが食べるか？」

「えっ!?いいの?」
「ああ、だってことり、チーズケーキ好きだろ?」
「でも義政くんもチーズケーキ好きだよね?」
「そうだな。でも、俺がことりに食べてほしいんだ。だから貰ってくれ」
「うん、分かった」
　そのあと、俺がパンケーキを食べ終わしてことりが食べ終わるのを待ってるとことりがいきなり
「はい、アーンして」
「は?」
「義政くんだってチーズケーキ食べたいでしょ?だから私が食べさせてあげようかなって」
　うん、めっちゃ食べたい。でも食べれない。ことりのアーンで食べたら俺、本当に死んでしまうかもしれない。だが、このチャンスを逃すわけにはいかない。
「ぜひお願いさせていただきたい」
　俺は口を開いた。
「アーン」
　ことりがチーズケーキを俺の口に運んでくれた。うん、控えめに言ってもう死ねる。

というか俺もう既に死んでるんじゃね？こんな素晴らしいことが起こる世界に住んでた記憶がないんだが。それから俺はことりが言うには１０分間ほど意識がその場になかったらしい。

　そのあと、俺たちはこの遊園地で一番人気のフリーフォールに乗ることになった。いや、まあ、ことりに行く場所がこの遊園地になると聞いた時に既に分かってたことだけどね。てか、人の量がえげつないな。待ち時間も2時間超えてるし。

「すごい人が多いね」

「まあ、一番人気のアトラクションだしな」

「そうだよね」

「なんか話でもするか」

「そうだね。う～ん、じゃあ、この前穂乃果ちゃんがね」

　話を始めたのもつかの間、これだけ人が多いとやはりと言うべきかことりに気づく人がいた。

「なあ、あの子って」

「そうだよな。さっき穂乃果ちゃんって言ってたし」

「やっぱりか。それじゃあ、横にいる男は誰？」

「あっ、俺知ってるぞ。あの男の人μ'sのマネージャーだったらしいぞ」
「それ本当か?」
「ああ、確か名前は岡田義政だったはずだが」
てか、なんで俺のことも知ってるんだよ!俺のことなんてスクールアイドルとしてμ'sを登録したホームページとμ's特集のスクールアイドル雑誌にしか載ってないはずだぞ。しかも、顔写真はなかったし。まあ、ここは列の中だしあいつらもサインとかは求めに来る気配はないようだ。・・・そう思っていた。確かに後ろの方に並んでた人たちはサインを求めには来なかったが、俺たちのちょうど後ろにいた女の子たちがなんとスクールアイドルでことりと話がしたいということになってしまったのだ。
「こんな衣装考えたんですけどどう思います?」
「とっても可愛いよ!でも、ここにフリルを付けたらもっと可愛くなるかも」
「確かにそうかも!ありがとうございますことりさん」
といった感じでさっきからずっと衣装の話やどんな練習をしていたかなどの話を続けていた。練習の話には俺も参加出来たが、衣装については1年間もμ'sマネージャーをやっていたにも関わらず、俺が参加出来る余地はなかった。うん、ファッションって難しい。
そんな感じで時間が過ぎていき、気づいたら俺たちが乗る番になっていた。

うん、見ただけで分かる。絶対にやばいやつだ。俺の三半規管が無事で済むかが怪しいレベルに。

そしてアトラクションが動き出す直前、ことりが手を握ってきた。

「義政くん、怖いから手、握っててくれない？」

あー、もう何が来ても大丈夫な気がする。

「分かった」

そしてアトラクションが動き出した。結果から言おう。ことりに頼られていたおかげで怖いと感じなかった。むしろ、もっと続いて欲しかった。人間って本当に何か幸せを感じてる時ってほかのことを感じないんだな。

次に観覧車に乗ることになった。待ち時間は１０分と比較的短めだった。そして観覧車に乗り、俺とことりの二人っきりの密室が完成した。俺は今渡すしかないと、バックからあるものを取り出そうとした。しかし、その動きはことりの一言によって完全に止まってしまった。

「義政くんは、私と付き合ってていいの？」

正直、質問の意味が分からなかった。なぜいきなりこんなことを聞いてくるのか。俺には全く分からなかった。

「どういう意味だ？」

「そのまんまの意味だよ」
「俺には意味が分からない！何が付き合ってていいの？なんだ！」
「だって義政くん、今日ここに居ていい人じゃないんだよ。普通なら受験勉強とかで大変な季節だし。今日の義政くんを見てて、たまに心ここに在らずみたいな感じだったし。やっぱり勉強したいんでしょ。それなのにこんなところに連れてこられて迷惑なんじゃないの？」
「それは違うよ、ことり」
「違わない。それとも、私と遊園地なんか来たくなかった？」
「は？」
「私なんかよりも穂乃果ちゃんや海未ちゃん、真姫ちゃんと来たかったんでしょ」
「おい、ことり？」
「確かにそう思っちゃうかもね。将来的に考えて私なんかと付き合ってると嫌な思いするから」
「何が嫌な思いなんだ？」
「みんなと違って私には傷があるから」
・・・その時、俺はことりの言っている傷が何か、なんで嫌な思いをするとことりが考えたかが分かった。

「左膝のことか？」
「そうだよ。男の人って体に傷がある人って嫌なんでしょ？」
「ことり、お前は馬鹿だ！」
「えっ？」
「確かに世間一般の男は女の子に傷があることを嫌がるかもしれない。でも、俺にはそんなの関係ない！むしろ大歓迎だ。と言っても変な意味じゃないぞ。ことりだからこそ大丈夫なんだ。そもそも、ことりが昔、手術をしてなかったらスクールアイドルを出来なかっただろうし、今いる元気なことりだっていなかったかもしれないだろ」
「それはそうだけど…」
「だいたい、傷があるからってなんだ！俺はことりのことが好きなんだ！あと、今日の俺がたまに無意識になっていたのは、これを渡すのが、緊張してたからだよ」
　そう言って俺は、バックからことりへのプレゼントを取り出した。
「これって…」
「開けてみろ」
　ことりは俺のプレゼントを開けた。中にはネックレスが入っていた。
「ネックレス？」
「ただのネックレスじゃないぞ。これと合わせてみろ」

俺はバックからもうひとつのネックレスを取り出し、ことりに渡した。そしてことりは元々持ってたネックレスと俺の渡したネックレスの飾りの部分を合わせた。するとハートが出来上がった

「これって」
「それが俺の気持ちだ。それぞれの飾りの部分に俺とことりの名前が彫られてるだろ。あとは言わなくても分かるよな?」
ことりは泣きながら
「うん」
と答えた。
「だからもう二度とあんなことは言わないでくれ」
「うん」
気づいたら観覧車は下に降りていた。そのあと俺たちは家に帰ることになり、遊園地をあとにした。ことりの家に着き、ことりが家に入る前に
「義政くん、目つぶって」
と言ってきた。
「分かった」

俺が目をつぶると、唇に何かが触れた感触がした。
「もういいよ」
目を開けるとことりが真っ赤な顔で目の前にいた。
「じゃあ、また明日ね」
そう言ってことりは駆け足で家に入っていった。そのあと、俺が1時間ほどその場に立ち尽くして、警察に注意されたのはまた別の話。

消失した女神編

消えゆく女神と水の女神との遭遇

とある夏の日、俺はいつものように学校に来て屋上に軽く水を撒いていた。μ' sメンバーが練習する時少しでも涼しい環境で練習してもらうためだ。水を撒き終わったら部室で1時間ほどμ' sメンバーが来るまで待つ。それが俺の日課だ。だが、今日は違った。9時になっても誰も来ないのだ。それから10分ほど経ち、ことり、穂乃果は、海未が部室に来た。

「遅れちゃった」

「遅いぞ3人とも」

「すみません、目覚ましがならなかったので」

「いや、10分なら問題ないけど」

「ところでみんなは？もう練習？」

「いや、まだ来てないんだ」

「「えぇぇぇーー!?」」

「誰も？」

「ああ。みんなして寝坊かな？」
「それは流石にないんじゃないかな」
「まあそうだろうな」
「遅れたにゃー」
「す、すみません」
「はぁ、２人が遅いからよ」
「真姫ちゃんだって寝坊してたにゃー」
「うっ・・・」
「お前らもか・・・」
「「えっ？」」
「穂乃果たちも寝坊して遅刻したんだ」
「そうなんですか？」
「うん・・・」
「まあ、練習してこい。３年生が来たら屋上行くから」
「「「「はーい」」」」
　そうして穂乃果たちは屋上に向かった。それから１時間部室のパソコンを使いスクールアイドルの情報を集めていたが、３年生はまだ来なかった。流石に心配になって

きたので絵里、希、にこにメールを送った。そして練習を手伝うために屋上に向かった。
自販機で6人分の飲み物を買い、屋上に行き
「そろそろ休憩にしろー」
と指示を出した。1人1人に飲み物を渡していると海未が
「まだ絵里たちは来ないのですか？」
と聞いてきたので
「ああ。一応メールも送ってみたけど返信来てないし」
「3人ともどうしたんだろうね？」
「分かんないな。みんなのところには連絡来てないか？」
「私は来てないよ」
穂乃果のところに来てないように他のみんなにも連絡は来てなかった。
「う～ん、今日を休みと勘違いしてるのか？」
「そうだと思うけど…」
ことりが不安そうな顔で俺に同意してきた。周りを見るとほかのみんなも不安そうだった。恐らく、3年生が事故か何かに巻き込まれたと思ってるのだろう。その時俺の携帯にメールが届いた。にこからだ。
『ごめん！今日は妹たちの面倒を見るので部活行けない』

と書かれていた。それと同時に
『ごめんなさい。今日はお祖母様が来てて学校にはいけないの』
『ごめんな。今日は神田明神で巫女さんのバイトなんや。また今度な』
絵里と希から返信もきた。その時運悪く携帯の電源が切れてしまったが3人の無事は確認出来たので
「3人とも無事だったぞ。ただ、今日は学校に来れないみたいだ。だから今日の練習は俺たちだけだな」
と穂乃果たちに伝えた。みんな安心したかのように息をはき穂乃果が
「よーし、練習再開だぁ!!」
元気よく叫んだ。それから俺は6人の動きを見て、修正点や感想などをノートにまとめていった。そうして今日の練習は終わり、俺たちはそれぞれの帰路についた。

翌日、俺はことりを家に迎えに行った。家が隣同士なので迎えに行ったと言える距離なのかは置いといて、昨日のうちにことりから
「また寝坊しちゃうかもしれないから迎え来て」
と言われてたのだ。ことりの家のインターホンを押すとすぐにことりが出てきた。パジャマ姿でだ。

「おはよぉ～」
　すごく眠たそうに挨拶をしてきた。
「ああ、おはよう。着替えてきた方がいいんじゃないか?」
　挨拶を返して、ことりの服装について指摘すると、ことりは自分の服を見て一瞬で顔が赤くなり家に飛び込んでいった。うん、やっぱり自分の格好に気づいてなかったか。それから少し経ちことりが練習着姿で出てきた。そして
「さっきは醜い格好でごめんね。見たくなかったよね･･･」
　いきなり謝ってきた。しかも自分のことを蔑んでまでだ。
「何勘違いしてるんだ?ことり」
「えっ?」
「ことりのパジャマ姿を見て俺が醜いなんて思うはずがないだろ。むしろめっちゃ可愛いぞ。あれを見れたんだ、もう死んでもいい」
「うっ･･･　それは流石に恥ずかしいよぉ」
「だから自分のことを醜いなんて言うな。もしことりにそんなことを言うやつがいたらぶん殴る」
「あ、ありがとう」
「ああ、じゃあ練習行くぞ」

「うん！」
　それから学校に着き、部室に向かうと既に部室には穂乃果と海未がいた。どうやら2人とも無事に起きれたみたいだな。それから俺は屋上に水を撒きに行き再び部室に戻った。それから練習開始時間の9時になったが俺たち以外誰も来てなかった。
「また今日も遅刻か？」
「そうだと思うけど」
「ですが、流石にていたらくすぎます」
「そう言ってる海未も昨日遅れたけどな」
「そ、そうですが・・・」
「とりあえず3人で練習してこい。みんなにメール送ったら俺もいくから」
「「うん（はい）」」
　ことりたちが屋上に向かったのを確認し、1年生と3年生にメールを送った。その後俺も屋上に向かった。
　結論から言おう。その日練習にはことり、穂乃果、海未以外誰も来なかった。絵里、希、にこに限っては2日間連続だ。しかも誰からもメールの返信は来てなかった。流石におかしいので俺は絵里の家に向かうことにした。
　絵里の家に着き、正直驚いたことがある。普通の家なのだ。ロシア人とのクォーター

と聞いていたので家もロシアっぽい家だと思っていた。そんなことはさておき、俺は絵里の家のインターホンを鳴らした。しかし鳴らさない方が良かったのかもしれない。残酷な事実を知らないで済んだのだから。

『はーい』

絵里の声が聞こえた。

「あ、俺です」

『義政ね。なんの用？』

なんの用とは失礼な。２日間も練習に来なかったから心配で来てやったのに。

「いや、２日間も練習に来なかったので何かあったのかなって思って」

『練習？なんのこと？』

は？今絵里はなんて言った？俺の耳が悪くなったのか？

「もう１度言ってもらっても？」

『だから、練習ってなんの練習？』

うん、俺の耳は正常だ。となると絵里が嘘でもついてるのか？

「μ's のですよ」

『μ's って？』

「は？」

『だからμ'sって何よ!?』
「いや、何を言ってるんですか?」
『ただ質問してるだけじゃない。それよりもμ'sって何よ?』
絵里がμ'sのことを忘れてる?記憶喪失か何かか?とりあえずきちんと話さないと。
「1度中に入れてもらってもいいですか?」
『ええ』
そうして絵里の部屋に通された。そこで絵里にμ'sについて聞かれたので、μ'sについて知ってることを全て話したが記憶はないようだった。ただ、学校が廃校になりそうだったことは覚えていた。だが、学校を廃校の危機から救ったのは生徒会らしいが。それで話は終わりになり俺は帰ることにした。念の為、亜里沙に絵里が頭をぶつけたりしてないか聞いたがそんなことはないようだった。そこで気になったので亜里沙にμ'sについて聞いたが亜里沙もμ'sについて知らないようだった。
流石におかしいので俺は希がいそうな神田明神に向かった。神田明神に着くと希が巫女姿でほうきを掃いていた。
「希!」
「ん?って義政くんやないか。なんで呼び捨てなん?」

「いや、合宿の時に」
「合宿ってなんや？」
この時点で確信した。希もμ' sについて記憶を失ってるようだった。その後、頭をぶつけてないかと聞いたが希は笑いながらぶつけてないよと言っていた。
その後、俺はμ' sメンバーの家を回った。にこと真姫も同じようにμ' sについての記憶を失ってるようだった。生憎、花陽と凛の家は知らなかったが結果は同じだろう。何故μ' sについての記憶がなくなっている。この2日間で一体何があった？そんなことを考えながら家に帰っているとUTXの前に来ていた。ここには来るべきではなかった。俺はそんな感じの悪寒に襲われた。その時ちょうどUTXのモニターにA―RISEのPVが流れ始めた。俺の勘がPVを見てはいけないと言っている。だが、俺は見てしまった。そのPVは途中までは見慣れたものだった。それで俺は安心してしまった。だが、最後にとんでもないものが映っていた。
「ほ、の、か？」
そこには俺が見間違えるはずがない幼馴染の顔が映っていた。A―RISEの4人目のメンバーとしてだ。ありえない。ありえないはずだ。何故、穂乃果があそこに映っている。そんなことはあってはならない。穂乃果はμ' sのリーダーなんだ。A―RISEにいてはならない。しかしいくら否定しても画面に映る穂乃果は消えなかった。

家に帰ろうとしたが、足取りがおぼつかない。まあ、それもそうだろう。みんながμ'sのことを忘れていて今朝まで学校で練習していた穂乃果がA―RISEにいたのだから。ことりや海未のことが気になり俺は海未の家に向かった。

海未の家に着きインターホンを鳴らすと少し経って海未が弓道着姿で出てきた。

「何の用ですか？義政」

「いくつか質問があるんだがいいか？」

「はい」

「今日の午前中何してた？」

「何って弓道部の練習に出てましたが？」

何を言ってるんだ。今日の午前中は一緒に屋上でダンスの練習をしてただろ。

「そ、そうか。じゃあ、μ'sって分かるか？」

「ギリシャ神話の女神ですか？」

ダメだ。海未もμ'sのことが記憶から消えている。午前中は一緒にいたはずなのに。

「そ、そうだな。じゃあ、穂乃果についてどう思う？」

「穂乃果ですか？凄いと思います。何故かは分かりませんけど有名なアイドルグループにスカウトされたのですから」

おかしいだろ。なんで穂乃果がＡ―ＲＩＳＥにスカウトされたんだ。そしてなんでμ’ｓの存在がみんなの記憶から消えてるんだ。

「義政？どうしたのですか？」

「えっ？」

俺は泣いていたようだ。

「いや、目にホコリが入っただけだ。じゃあ俺帰るな」

その言葉を言う前に俺は走り出していた。

「あっ、気をつけてください」

俺はただ、がむしゃらに走った。ことりからもμ’ｓの記憶が消えてるのではないか。そう思って。むしろより嫌な予感もしてたから。

俺は家に着くと家には入らずすぐにことりの家のインターホンを鳴らした。応答したのはことりのお母さんだった。

「ことりいますか？」

『何を言ってるの？義政くん。ことりは留学したじゃない』

嫌な予感が的中した。ことりがいないなんてありえない。あの時俺と穂乃果で留学を止めたはずだ。なんでことりが・・・

『義政くん。どうかしたの？』

「いや、なんでもないです」
そうして俺はとぼとぼと家に帰り自分のベットに倒れ込んだ。

翌日、結局俺は眠れなかった。俺はネットを使いμ'ｓについて調べたがそもそもμ'ｓというスクールアイドルが存在してなかったことになっていた…
そして俺は秋葉原に今いる。μ'ｓの情報を探すためだ。スクールアイドルの雑誌にならμ'ｓのことが書いてあるのではないかと期待してだ。結果は何も書いてなかった…
本当にどうすればいいのだろう。全くμ'ｓの手がかりが見つからない。ことりも留学したことになっているし、穂乃果はＡ―ＲＩＳＥに加入したことになっている。その他のμ'ｓメンバーもμ'ｓについての記憶がないようだし。ここはパラレルワールドなのではないかと思ってしまう。その時だ。声をかけられたのは。
「あの」
「ん？何か用か？」
振り向くとオレンジ髪の穂乃果と同じくらいの背の高さの女の子がいた。
「はい、先ｓって間違えた。岡田義政さんですよね？」
「そうだけど。君は？」

俺はこの子を見た時に感じた。この子は穂乃果と同じようなものを持っている。しかも穂乃果の今持っているものの成長したものをだ。
「私、高海千歌です。浦の星女学院スクールアイドルＡｑｏｕｒｓの」
「Ａｑｏｕｒｓ？失礼だけど聞いたことないんだが」
「そうでしょうね。でも、今はそのことは関係ありません。義政さん、私たちに力を貸してもらえませんか？」
「は？悪いけど俺は調べることがあるから」
「その調べることにも関係がありますよ」
「えっ？」
「正確にはμ'ｓを救うためです」
「μ'ｓを救う？」
「はい！存在が消えてしまったμ'ｓを」
「本当か？本当にμ'ｓを救ってくれるのか？」
「はい!!でも、それには私たちだけでは無理なんです。義政さんの力を借りないと」
「もちろんμ'ｓを救えるなら手伝うさ。ところで私たちって？」
「それは・・・ みんな出てきて」
「「「「「「「「「うん（はいですわ）（ずら）」」」」」」」」」

「じゃあ自己紹介から～。曜ちゃん」
「Ａｑｏｕｒｓの渡辺曜です。よろしくね義政くん」
「Ａｑｏｕｒｓの桜内梨子です。よろしくお願いします」
「あ、Ａｑｏｕｒｓの黒澤ルビィです。よ、よろしくお願いします」
「Ａｑｏｕｒｓの国木田花丸です。よろしくずら」
　ずら？
「Ａｑｏｕｒｓの堕天使ヨハネｙ「善子ちゃん？」うっ、Ａｑｏｕｒｓの津島善子。よろしくね。リトルデーモン」
　リトルデーモン？何それ？
「Ａｑｏｕｒｓの黒澤ダイヤです。よろしくお願いしますわ」
「Ａｑｏｕｒｓの松浦果南です。よろしく」
「Ａｑｏｕｒｓの小原鞠莉よ。シャイニー」
「そして私、高海千歌の９人です」
　うん、分かったことは個性派揃いってことだな。
「ありがとう。本当にありがとう」
「当然のことですわ。μ’ｓは私たちにとって伝説ですから」
「伝説？」

「そうですわ」
「てか、なんでみんなμ' sの記憶があるんだ？」
「それは、私たちＡｑｏｕｒｓが未来から来たことと関係があるんです」
は？未来？どういうこと？

水の女神の目的と黒き太陽

「未来から来たってどういうことだ？」
　突然現れたスクールアイドルＡｑｏｕｒｓは自分たちがμ’ｓを救うため未来から来たと言っているのだが、未来から来たということが信じられなかった。
「千歌ちゃんの言ってる通りです」
「私たちの時代？ではμ’ｓは伝説のスクールアイドルなのです」
「はあ」
「それでルビィたちはμ’ｓに憧れてスクールアイドルを始めたんです」
「はあ」
「そして色々ありましたが、私たちはラブライブで優勝することが出来ました」
「凄いな」
「でも、学校は廃校になっちゃったんだけどね…」
「なんでだ？ラブライブで優勝できるレベルのスクールアイドルまでいるのにか？」
「はい、私たちの学校は少し田舎の方にありまして」
　それを言われて分かった。人が集まらなかったのか。

「人が集まらなかったのか？」
「ええ、あと少しだったんだけどね…」
「でも、今はそのことについて話す暇もありません。問題はその後にあったんですから」
「問題？」
「ええ、精霊結界の損壊により、魔力構造が変化したのです！」
「精霊結界？魔力構造？」
「善子ちゃん？ちゃんと言うずら」
「うっ、Ａｑｏｕｒｓがラブライブに優勝してから数日後、ルビィの持ってたスクールアイドル雑誌が消えたのよ」
「要するになくなったのか？」
「いいえ、消えたんです」
「違いが分からないんだが…」
「スクールアイドル雑誌を買った時のレシートが白紙になってたんですよ。まるでそんな雑誌はなかったかのように」
「お前って雑誌買うたびにレシート保存してるのか？」
「ち、違いますよ！ルビィたちが雑誌に掲載されるから買ったばかりだったんです」
「なるほど。それで買ったばかりの雑誌が消えていて？」

「それだけなら不思議と思うだけで良かったのですが、ラブライブで優勝した事実までもが消えていたのです」
「は？どうしてだ？」
「私たちもそう思って運営に連絡したのよ。そしたらＡｑｏｕｒｓというグループがラブライブにエントリーしてませんと言われて」
　てか、この金髪の子めっちゃ発音良くね？
「エントリーしてないと・・・ でも、同じ学校の人たちはＡｑｏｕｒｓがラブライブで優勝したって分かってるんだろ？」
「それが・・・」
「優勝したことが記憶からなくなってたのか？」
「それどころじゃないよ。Ａｑｏｕｒｓがなかったことになってたんだから」
「それって・・・」
「はい、義政さんも似たようなことがあったと思います」
「今のμ'ｓと同じ状況ってわけか」
「でも、Ａｑｏｕｒｓのことを唯一覚えてる人がいたんです」
「本当か？」
「はい、私たちの顧問の先生でした」

「その顧問の先生はいないのか？」
「はい、先生はこの時代に来れなかったんです。ですが、代わりに助けになってくれそうな人を教えてくれて。それが義政さんでした」
「へぇー、ところでＡｑｏｕｒｓの存在が消えたんだったら、なんでお前らのいた時代じゃなくてこの時代に来たんだ？Ａｑｏｕｒｓの存在を戻すならそっちの時代に何か問題が起きたんじゃ？」
「私たちも最初はそう思ってたんです。でも、ルビィちゃんと花丸ちゃんが本屋でＡｑｏｕｒｓの存在が消えた理由を見つけてくれたんです」
「それって」
「はい、μ'ｓです。どのスクールアイドル雑誌にもμ'ｓのμの字すら載ってなかったんです」
「私たちはμ'ｓに憧れてスタートしたグループです。μ'ｓがなければ存在しないのも有り得ると思い」
「なるほど。それでこの時代に来たと」
「はい」
「じゃあどうやってこの時代に来たんだ？どう考えても未来から過去に来るなんてありえないんだが。それともお前たちがいた時代ってとんでもない先の未来でタイムマシ

ンが開発されたのか？」
「えっと、私たちも最初はどうすることもできなかったんですけど、女の人が助てくれたんです」
「女の人？」
「はい！その人はただ私たちにタイムマシンを渡して、μ'ｓを助けてと言ったんです」
「それでμ'ｓが記憶から消えた理由は分かったのか？」
「それは・・・」
「分かってないと」
「すみません・・・」
「まあ、助けに来てくれただけでも感謝してるよ。それでこの後はどうするんだ？」
「さあ？梨子ちゃんどうする？」
「えっ？どうするって・・・よ、曜ちゃんはどうすればいいと思う？」
「それ私に聞く？」
・・・本当にこれでμ'ｓの記憶を取り戻せるのか？
「千歌さん、ここは原因解明のためμ'ｓが結成された時間に行くべきですわ」
「流石です、ダイヤさん」
良かった。救いの女神はいたようだ。

「じゃあ行きますよ義政さん」
「おう・・・って、どうやって行くんだ？」
「だからタイムマシンです」
「どこにタイムマシンがあるんですか？」
「これだよ」
　と果南という子は手首につけてたブレスレットを見せてきた。
「そんなもので時間を移動なんてできるのか？」
「そうだよね。最初は私たちもそう思ってたけど、実際にできちゃったんだよ」
「了解。ところでそれって俺の分もあるのか？」
「あります」
　と千歌は俺にブレスレットを渡してきた。本当にこれで時間を移動できるのか？
「じゃあ行くよ！」
「ちょっ、ちょっと待て。これどうやって使うんだよ」
「ああ、それは行きたい時間帯を思い浮かべれば」
　そう言った途端千歌が消えた。続くように梨子、曜が消えていき俺１人が取り残された。まあ、使い方は聞こえたから平気だけど。確かμ' sが結成された時間帯に行くんだよな。そうして俺はμ' sが結成された日の朝を思い浮かべた。

気がついたら学校にいた。それも私服でだ。てか、千歌たちがいないし。俺どうすればいいの？

少し考えてから学校から出ることにした。まあ、私服で学校にいたら変だし、この時間帯の俺に遭遇することもありそうだからな。急いで学校から抜け出し、千歌たちを探すことにした。

結論から言おう千歌たちは見つからなかった。既に放課後になっている。あと1時間ほどでμ' sが結成されるはずだ。学校に入って様子を見てみるか。俺が学校に入って向かった先は屋上だ。屋上なら誰も来ないしμ' sが結成される中庭を見るのにはちょうどいいだろう。

それから1時間が経過した。その時俺の後ろの空間が歪み、千歌たちが飛び出てきた。

「あっ、義政さん」

「お前らどこに行ってたの？」

「え？ついさっきまでＵＴＸ前で話してたじゃないですか」

「いや、話してから俺もこのブレスレットを使ってこの時間帯に来たんだけどお前たち

がいなかったんだよ」
「えっと、義政さん？この時間帯の何時頃に来たのですか？」
「朝の８時くらいだけど」
「それが原因だね」
「は？」
「イエス。義政は、μ’ｓが結成された朝を思い浮かべたんでしょ？でも、私たちはμ’ｓの結成された時間だもん。それで義政が私たちを探すことになったのよ」
「なるほどな」
「あっ、穂乃果さんが踊ってる！」
「ルビィ、どこですか？」
「下だよ、お姉ちゃん！」
「本当だぁ！」
「なんで千歌たちは興奮してるんだ？」
「えっと、千歌ちゃんたちはμ’ｓの大ファンだからずら」
「ありがとな花丸」
　それはそれとして、そろそろことりと海未、そしてこの時間帯の俺が来るはずなんだが？なんで来ないんだ？

「なんかおかしくない？」
「どうしたの？曜」
「う～ん、私たちはこのブレスレットにμ' sが結成される時間に行きたいと思ったはずだけど未だにμ' sが結成されそうにないもん」
「はっ！もしや魔界の者たちが何かをしたのでは!?」
「善子ちゃん」
「だからヨハネ！」
「義政さん、まだμ' sは結成されないんですか？」
「いや、もうことりたちが来てるはずなんだが・・・」
「じゃあなんで？」
「ことりと海未を探してくる」
「あっ、義政さん。もしこの時間の義政さんに接触しそうになったらすぐに逃げてくださいね」
「分かった。お前たちはこの時間の俺を探してくれ」
「分かりました」
　さて、とりあえず海未が弓道場にいるはずだから弓道場に行くか。
　弓道場に着くと海未が弓を構えていた。そして矢を射て的のちょうど中央部分に当

てた。
「相変わらず凄いな」
「えっ？義政？」
　海未はこちらを振り向くと弓を落とした。
「おーい、弓落としてるぞ」
「本当に義政なのですか？」
「質問の意味が分からないのだが。あと、なんで泣いてるんだ？」
　海未は泣いていた。
「し、死んでしまったはずではないのですか？」
　・・・今、海未はなんて言った？俺が死んだ？そんなわけないだろ。このブレスレットが壊れて未来にでも来てない限り。
「何を言ってんだ？」
「だから義政は死んだはずでは!?」
「なんで俺が死んだことになってんだよ！」
「去年の夏に義政は交通事故で死んでしまったはずです」
　なんでそんなことになってるの？
「へぇー、じゃあここにいる俺はなんなの？」

「幽霊なのでは？自分が死んだことに気づいてない」
「その言い方酷くね？」
「変わってませんね」
「変わってる変わってないも俺生きてるからね」
「こうしてはいられません。ことりに連絡を。あと穂乃果にも」
　ああ、この人俺の話聞いてないわ。
「さあ、行きますよ」
「いや、どこに？」
「ことりのところです」
　そうして俺は半強制的に海未に連れられことりの家に向かった。
「やっと着きました」
　海未さん。ことりの家まで来るの速すぎませんか？俺足が限界なんですけど。海未がインターホンを鳴らし、ことりが応答した。
『はーい』
「ことりですか？早く入れてください。義政がいるんです」
『えっ？義政くんが？・・・海未ちゃん、冗談はやめてよ』
「え？」

『私が義政くんのことをどう思ってたか分かってるんでしょ！なのになんでこんな酷いことができるの？』
「ですから義政がここにいるんです。ほら、義政」
「引っ張るなよ！」
『えっ!?本当に義政くん？』
「だからお前たちは何を言ってるんだ」
『すぐに開けるね。あと海未ちゃんごめんね』
「大丈夫ですよ。ことりの気持ちは分かってますから」
　その後ドアが開きことりが俺に向かって抱きついてきた。
「本当に義政くん？夢じゃないよね？」
「ことりさん？流石に昼間っから外で抱きつくのは世間的にダメなんじゃないかな～」
「そんなの問題ないよ。義政くんがいるんだもん」
　うん、何が問題ないのでしょうか？嬉しいけどさ。
「とりあえず中に入ろうぜ」
「そうだね」
　そう言いことりは俺と海未をことりの部屋に招き入れた。
「ところで何故義政はここにいるのですか？」

「なんでもいいよ。義政くんが無事ならそれで」
「なんでもよくはありません。ことりも義政のお葬式に出たんですから分かるでしょ。義政が死んだって」
「死んでないよ。ここに義政くんがいて、しかも触れるんだから」
「触れる幽霊かもしれないんですよ」
「それでもいいよ。むしろ幽霊ならことりに取り憑いて欲しいな」
　なんかことりが怖いんだけど
「あのさ俺が死んでるていで話すのやめてもらえる？」
「そうだよね～。あっ、穂乃果ちゃんも呼ばないと」
　ことりはメールを打ち始めた。
「ですが、義政は死んだはずです。ことりを助けて」
「いや、俺ここにいるから。って、ことりを助けて？」
「ええ、引かれそうになったことりを助けて」
　まあ、それで死ねるなら本望だな。
「はあ」
「ですから義政。あなたは幽霊なのです」
「洗脳にしか聞こえないのだが？」

「そうだよ。実際に義政くんがここにいるんだから」
「そうですけど…」
「聞きたいことがあるんだがいいか？」
「うん！いいよ！」
「ええ」
「今日、穂乃果にスクールアイドルやろうって誘われなかったか？」
「「えっ？」」
「なんで知ってるの？」
「やはり幽霊なのでは？」
「なんで海未はその方向に持ってたがるんだよ！それで言われたんだよな？」
「うん（はい）…」
「じゃあ話は早い。２人にスクールアイドルをやって欲しい」
「うん、いいよ！ねぇ、海未ちゃん」
「はい…　って、何を言っているのですか!?今朝はことりもやらないと言っていたはずでは？」
「だって、義政くんのお願いだよ」
「そうですか…　では義政、何故私たちにスクールアイドルをやって欲しいのですか？」

「そ、それは…」
　やばい。どう答えればいいんだ？この状況下で未来から来たなんて言っても信じてくれないだろうし。悩んだ末に俺が出した答えはこの時間帯の俺を利用することだった。
「なんて言うか、ことりも海未も穂乃果にもずっと笑っててほしいんだ」
「「えっ？」」
「２人とも俺が死んでから本気で楽しいと思ったことあるか？」
　このわずかな時間でも２人が本気で楽しいと思ってることは感じていた。
「私はないかな」
「ことり？」
「どんなに楽しい時にも義政くんがいたらって思っちゃって」
「私もそうですが…」
「だろ。でも、俺はことりにも海未にも心から楽しいと思って欲しいんだ」
「だからスクールアイドルをやれと？」
「ああ。絶対に楽しめるからな。辛いことがあっても最終的には楽しめる。俺はそう思ってるからスクールアイドルをやって欲しいんだ」
「義政…」

「２人とも頼めるか？」
「私は最初からやるって言ったよ？あとは海未ちゃんだけ」
「続かないかもしれませんよ」
「続くさ」
「何故言いきれるのですか？」
「スクールアイドルをやろうって言ったのは穂乃果だろ？」
「そうだよ」
「さっきな穂乃果が中庭でダンスの練習をしてたんだ。まあ、失敗しまくりだったけどな」
　そう言うとことりと海未は複雑そうな顔をした。
「だけど練習をやめる気はなかったぞ。今からでも見てこいよ」
　そう言うと海未はいち早く部屋を出ていった。
「ことりは行かないのか？」
「行くよ！でも、義政くんがいなくなっちゃう気がして・・・」
　そうか。ことりは俺がいなくなるのが嫌なのか。でも、この世界の俺は死んでいるからここで俺がことりを穂乃果の前に連れてく訳には行かないしな。
「そうだな」

「じゃあ私は」
「スクールアイドルやってくれるんだろ？」
「そうだけど・・・」
「なら行ってくれ。俺はそのためにここに来たんだから」
「・・・分かったよ」
「ありがとな、ことり」
「うん！でも、義政くんにお礼を言われる権利は私にはないよ」
「なんでだ？」
「だって義政くんのおかげで私は生きてるんだから。実際にお礼を言うのは私。義政くん、私を助けてくれてありがとね」
そう言ってことりは部屋を出ていった。

俺はことりが部屋を出てからすぐにことりの家を後にして音ノ木坂に向かっていた。これでこの時間帯ではμ’sは存在することになる。あとは俺が生きてる時間帯のμ’sを作れればいいだけだ。そんなことを思っていた時だった。突然話しかけられたのは。
「ねえ」

その声は俺がよく知る声をより大人びた感じにしたものだった。まあ、気のせいだろうと思い返事をした。
「何か用ですか？」
「うん、すごい大事な用だよ！」
その話し方は俺のよく知る人にそっくりだ。だがそんなはずはない。俺に話しかけてきた人は彼女とは髪型も違い、何よりも彼女は今音ノ木坂学院にいるはずだからだ。
「それでその大事な用ってなんですか？」
「う～ん、単刀直入に聞くね。なんで私の邪魔をするの？」
どういう事だ？別に通行の邪魔をしてるわけでもないし、この人の邪魔をした覚えもないぞ。
「なんのことですか？」
「あ～、分からないか～。じゃあ言い方を変えるね。なんでμ’ｓの存在を消す邪魔をするの？」
こいつは何を言ってるんだ？μ’ｓの存在を消す？俺の時代でμ’ｓが無くなっていたのも、この時間帯でμ’ｓが作られなさそうになってたのもこいつのせいなのか？
「あんたが俺の時代でもこの時間帯でもμ’ｓの存在を消した元凶なのか？」
「そうだよ。それで私の質問に答えてくれる？」

「俺にとってμ' sが大切だからだ！」
「へぇ～、どのくらい？別にμ' sのメンバーでもなかったよね？」
「1番にだよ！それと俺はμ' sのメンバーではないけどμ' sのマネージャーをやってんだ！」
「μ' sのマネージャー？もしかして君は私とは違う世界の人かな？まあ、そんな質問しても分からないか。とりあえず私は全ての時間帯からμ' sの存在を消すことにしたの。邪魔しないでね。マネージャーくん」
「そんなことお前に指図される必要はないと思うが？あと俺の名前は義政だ」
「あるよ。だって私がμ' sを始めたんだもん」
「は？」
「私のこと分からないの？義政くん？」
　俺の名前を言われた途端俺はこいつが誰か分かった。いや、最初に声を聞いた時からそんな気はしてた。だが俺がそれを否定してたんだ。
「ほ、穂乃果なのか？」
「うん！そうだよ！」
　ありえない。穂乃果がμ' sの存在を消そうとするなんて。今、俺の前にいる穂乃果は確かに俺の知ってる穂乃果とは違い、大人になってる。だが、それでも穂乃果がμ'

ｓの存在を消すなんてありえないはずだ。穂乃果がμ'ｓを大切に思ってることは知ってるから。

「なんでμ'ｓの存在を消そうとするんだ？」

「それは言えないよ。でも、私の邪魔をするのは将来、絶対に不幸になるから邪魔しないでね」

そう言って穂乃果は消えた。恐らく俺と同じようにタイムブレスレットを使い時間を移動したんだろう。だけど不幸になるってなんなんだ？

「あっ、義政さん！」

「千歌か。どうしたんだ？」

「それが突然みんなが消えちゃって」

「Ａｑｏｕｒｓのみんながか？」

「はい。それで義政さんを探してたんです」

そう千歌が言った時、千歌が消えた。元々そこには誰もいなかったように。

A―ＲＩＳＥの穂乃果

千歌が目の前からいきなり消えた。なんの予備動作もなくだ。最初は千歌がタイムブレスレットを使ったのかと思ったが、あの消え方はタイムブレスレットによるものではないと思う。タイムブレスレットによる時間移動は空間が歪むからだ。それに比べて千歌が消えた時は空間は歪まず、ただ千歌が消えただけだった。まるで最初から千歌がこの場にいなかったかのように。

千歌が言うにはほかのＡｑｏｕｒｓメンバーも消えたという。そうなると俺がＡｑｏｕｒｓメンバーがいる時代にタイムブレスレットで移動してみんながどうしてるのかを見に行くしかない。そういうわけで俺はタイムブレスレットにＡｑｏｕｒｓがラブライブに優勝してから数日後に移動したいと念じた。その時には俺の見ている風景は変わっていた。さっきまで神田明神の近くにいたはずが、今は目の前に海が広がっている。どうやら移動には成功したみたいだ。後ろを振り返ると、相当昔からある雰囲気が漂っている旅館があった。その旅館から千歌、梨子、曜が出てきた。とりあえず彼女たちに話しかけることにした。

「君達、スクールアイドルのＡｑｏｕｒｓだよね？」

「アクア？なんですかそれ？」
予想外の返答が返ってきた。彼女たちは俺の時間帯のμ’ｓメンバーと同じようにＡｑｏｕｒｓというスクールアイドルを忘れてしまったのだろうか。
「いや、人違いだったよ。ごめんね」
「いえ、別にいいですけど」
そう言って彼女たちはどこかに行った。この調子だと他のアクアメンバーも同じようになってるだろう。さてと、まずはこの時間帯にμ’ｓが存在しているかを調べるか。そしてついでにだがＡｑｏｕｒｓが消えたわけもだ。

それから俺はバスに乗り沼津駅前まで移動した。そして近くの商店街にあった本屋に入りスクールアイドル関連の雑誌を探した。スクールアイドル関連の雑誌は簡単に見つかったが、やはりこの時間帯にもμ’ｓは存在していないようだ。ただ、Ａ―ＲＩＳＥがスクールアイドルの文化を定着させたレジェンドと言われているようだ。その中には当然のように高坂穂乃果の名前が乗っていた。どうやらこの時間帯は俺のいた時間帯の未来のようだ。そしてその雑誌にはＡ―ＲＩＳＥへのインタビューが載せてあり、穂乃果のインタビューを見てみるととんでもないことを穂乃果は言っていた。
『私はＡ―ＲＩＳＥの他にも大切な仲間がいたんです。みんなその時のことは忘れてい

るようでしたけど』
　穂乃果はＡ―ＲＩＳＥを大切に思ってますかの質問への答えの後にこう言っていたらしい。となると穂乃果にはμ'ｓの記憶があるのか？それを確かめるために俺は穂乃果に会いに行くことにした。

　やっと東京に着いた。移動費に費やしたせいで俺の財布の中身はほとんどない。だが、そんなことでくよくよしてられない。俺はそのまま穂むらへと向かった。
　穂むらに着くと店番をしている雪穂がいた。
「よお、雪穂」
「あれ？義政くん？なんか身長縮んだ？」
「いや、縮んだわけではないが・・・」
「でも、前にあった時はもっと身長大きかったよ」
「うーん、じゃあ縮んだんじゃね」
「何その適当な答えは」
「いや、今は身長のことはどうでもいいし。それより穂乃果いるか？」
「ううん、今はいないよ。帰ってくるとしたら夜の１０時過ぎると思うけど」
「んじゃ、それまで待機させてもらうわ」

「えっ!?本当に言ってるの?」
「ああ、どうしても穂乃果に聞きたいことがあるしな。そうだ!店番手伝うぞ!」
「それは嬉しいけど・・・ でも、本当にお姉ちゃんが帰ってくるまで待つつもり?」
「そう言ってるだろ。なんでそんなに危惧するんだ?」
「だって義政くん、お姉ちゃんと大喧嘩したんだよ!」
・・・この時間帯の俺は何をしたんだ?
「まあ、義政くんだけじゃないけど」
「どういう事だ?」
「本当に覚えてないの?お姉ちゃんと義政くん、海未さん、ことりさんで、なんかμ's があったとかそんなことはなかったとかで怒鳴りあってたんだよ」
「今、μ's って言ったか?」
「うん、お姉ちゃんがμ's のこと覚えてないのってずっと聞いてたけど」
「そうか」
とても嬉しかった。穂乃果はμ's を覚えているのだ。
「義政くんはμ's が何か分かるの?」
「分かるぞ。俺にとって1番大切なものだ」
「じゃああの時はなんでμ's なんか知らないって言ったの?」

「それは穂乃果にしか言いたくないんだ」
「何か事情があるんだね？」
「ああ」
「じゃあ聞かないでおくよ」
「ありがとな、雪穂」
　その後、穂乃果母に挨拶をして、店番を手伝った。気づいたらあっという間に夜になっていた。
「ただいまー」
　実際にあってからは数日も経ってないのに懐かしいと感じる穂乃果の声が聞こえた。
「おかえり、お姉ちゃん。義政くん来てるよ」
「えっ!?義政くんが!?なんで？」
「なんかμ’sだっけ？それについて話があるとか」
「本当!?」
「うん」
「どこにいるの？」
「今、店番してくれてるから代わってくるね」
　雪穂が俺のところに来て店番を代わってくれた。俺は穂乃果のところに向かった。

てか、なんて話そう…　いきなり過去から来ましたって言っても信じてもらえないだろうし。まずは挨拶からか。

「よお、穂乃果」

「義政くん？なんか背が縮んだね」

「いや、縮んだわけではないんだが。穂乃果の部屋で話せないか？大切な話があるんだ」

「いいけど」

穂乃果の部屋に着くといきなり穂乃果が

「義政くんはμ'sを思い出したの!?」

聞いてきた。

「あー、なんて言うかその話をする前に俺の話を聞いてくれるか？」

「うん」

「俺、過去から来たんだ」

「過去!?それって所謂タイムトラベルって言うやつ？」

「ああ、その認識で間違ってないと思う」

「それでなんで過去から来たの？」

俺はこれまでの俺の行動を話した。

「それで俺が過去から来たって信じてくれるのか？」

「う～ん、まあ信じるしかないよね。μ'ｓという存在を知ってるんだもん。しかも、今の義政くんより背が明らかに小さいし」
「ありがとう。それで穂乃果はなんでμ'ｓのことを覚えてたんだ？」
「う～ん、なんでか知らないけど、Ａ―ＲＩＳＥとしてスクールアイドルをやってた時に突然思い出したんだよ」
「は？」
「穂乃果の記憶だと最初からＡ―ＲＩＳＥに所属してたみたいなんだけど、いきなりμ'ｓのことを思い出したんだよ」
「μ'ｓを思い出した？μ'ｓが結成した時のこと覚えてるか？」
「うん！穂乃果が音ノ木坂で１人で練習してる時に海未ちゃんとことりちゃんがやって来て、私とスクールアイドルを始めてくれるって」
「何時くらいか分かるか？あと、その時俺はいなかったのか？」
「夕方の６時くらいかな？義政くんはその次の日に手伝ってくれるって」
　俺が過去を変えたことによって何らかの影響が出たのか？そしたらなんでことりや海未に影響が出てないんだ？
「それでことりや海未はμ'ｓのことを思い出さなかったのか？」
「少しだけだけど、μ'ｓについて話せたよ」

「本当か!?」
「うん、１０分くらいでμ' sのことを忘れちゃったみたいだけど」
影響は出てたみたいだ。僅かにだが・・・
「そうか・・・ もう１つ聞きたいことがある。ことりは海外に留学したのか?」
「何言ってるの?ずっと日本にいたよ」
そこだけは変えれたのか。
「良かった」
「なんで?」
「俺のいた時代でμ' sがなくなった時ことりが留学していたことになってたからだ」
「じゃあ、義政くんは過去を変えたの?」
「少しだけだがな」
「う～ん、お願いしたいことがあるんだけどいい?」
「この時代の俺じゃなくて過去の俺にか?」
「うん!」
「言ってみてくれ。出来そうならやってやる」
「それはね～」
そう言って穂乃果は棚を漁りだした。そして

「この曲をμ' ｓのみんなで歌って欲しいんだ！」
　そう言って俺に1枚の楽譜を渡してきた。
「これは誰が作詞、作曲したんだ？」
「穂乃果だよ！」
「マジで!?」
「うん！どうかな？」
「・・・最高にいい曲だ！これをμ' ｓのみんなで歌えばいいのか？過去の？」
「うん！穂乃果たちが1番輝いていた時の」
「分かった」
　そうして俺は穂乃果の家をあとにした。にしても、穂乃果がμ' ｓのことを覚えてたのは嬉しかったな。あと、この曲を絶対にμ' ｓのみんなで歌わなければ。そう考えながら俺は人通りが少ない裏道に入っていった。そしてタイムワープをしようとした時
「また余計なことをしてる」
　突然声をかけられた。未来の穂乃果にだ。
「余計なことだと？」
「うん、せっかく酷い目に合わないようにしてあげてるのに」
「酷い目ってなんなんだ？」

「なんだと思う？」
「は？」
「なんだと思う？って聞いてるんだよ、義政くん」
「μ' sの存在が消えることだ！」
「へぇ～、仮にもμ' sのマネージャーを名乗ってるのにそんなことしか考えられないの？」
「そんなこと？穂乃果にとってμ' sの存在が消えることはそんなことで片付くのか？」
「うん、穂乃果と同じ経験をしたら義政くんもそうなるよ」
いったい何を経験したら穂乃果がこんなに変わってしまうんだ？
「穂乃果にとってμ' sは大切じゃないのか？」
「大切だよ。穂乃果の人生でいちばん大切な宝物」
「じゃあ、なんでμ' sの存在を消そうとするんだ！」
「・・・みんなが死んじゃったからだよ」
「何言ってんだ？みんなが死んだ？」
「うん、穂乃果がみんなのことを誘って海外に遊びに行った時、飛行機にトラブルが発生してね。気づいたら穂乃果だけ無人島にいて。救助された時に生存者は他にいないっ

て言われたんだよ」
　穂乃果は泣きながらそう言った。
「だったら事故が起こる前に戻って飛行機に乗らなければいいじゃないか！わざわざμ'ｓの存在を消す必要はないだろ！」
「人の命を救うために時間を移動するのはダメなんだよ。でもひとつだけ方法があったの」
「それがμ'ｓの存在を消すことか？確かにμ'ｓがなければ、みんなが飛行機に乗ることはなかったかもしれないが」
「何言ってるの？みんな飛行機には乗ったことになるよ」
「は？じゃあなんでμ'ｓの存在を消すんだ？」
「罪悪感を少しでも和らげるためかな。穂乃果の計画通りにいけば穂乃果からもμ'ｓの記憶は無くなって、飛行機事故で死んだ友達は海未ちゃんとことりちゃんだけになるもん。そうなれば、穂乃果の気持ちも楽になるかなって」
「おい、穂乃果。歯、食いしばれ」
「えっ？なん」
　穂乃果の言葉は最後まで言われなかった。俺が穂乃果を殴ったからだ。
「っ痛。何するの？義政くん」

「我らが馬鹿なμ' sリーダーをぶん殴っただけだ。そもそもそんなルールに従うほどのお利口だったか？」
「穂乃果だって大人になったんだよ」
「違うな。例え大人になったとしても俺の知ってる穂乃果なら迷いなくみんなのことを助けに行った。それをしないってことは今のお前は穂乃果じゃない！」
「だから穂乃果だって大人になったの。穂乃果の勝手にできる問題じゃないんだよ」
「それをどうにかするのが高坂穂乃果だろ！今までだってそうしてきたんだから。もし、お前に出来ないのなら代わりに俺がやってやる」
「・・・無理だよ」
「いや、やってやる。μ' sを失うわけにはいかないんだから」
「義政くんとはなんの関わりもないμ' sなのに？」
「ああ、例え関わりがなくてもμ' sはμ' sだ！それならばμ' sマネージャーである俺が助けるのは当然のことだろ！」
「そんなにμ' sのことが好きなの？」
「当たり前だろ。俺はμ' sのファン第1号でもあり、μ' sメンバー全員と仲がいいんだから。それに、どんな次元だろうがμ' sメンバーが死ぬのは嫌だからな」
「本当にやるの？」

「当然。μ’ｓを失うわけにはいかないからな」
「じゃあ何があっても止めないとね」
「はあ？なんでだよ？」
「だってもう穂乃果はμ’ｓの名前しか覚えてないんだよ？どうでもいいじゃん」
　そう言いながら穂乃果はポケットから拳銃を取り出し俺に向けて拳銃を撃った。正確にはタイムブレスレットに向けてだ。
「これでもうあなたには何も出来ないよ。さよなら、そして穂乃果のことを恨み続けてね」
　そう言い残し穂乃果は消えていった。

アニメ一期廃校!?

「ブオーン」と飛行機が飛び立つ音が聞こえる。何故俺はここにいるんだろう?不思議に思った。飛行機乗り場への入り口には彼女がいる。何故彼女はここにいるんだろうか。

気がつくと瞳から涙が出ていた。何故俺は涙を流しているのだろう?そう不思議に思っていると彼女が

「義政くん、また会おうね」

と言ってきた。彼女は何故俺にお別れを言っているのだろう。そこに、1人の女の子がやってきた。

「・・・ちゃん、・・・・・・・」

その子は彼女に何かを言っていた。でも、彼女は

「ごめんね・・・ちゃん、私・・・・・・・・・・」

と言っている。ああ、このままでは彼女と会えなくなってしまう。何故か俺にはそれが分かった。その時

「ピピピピピー！」

と目覚まし時計の音が聞こえる。鳴り止まないアラームを止めるために身を起こし、アラームを止めた。嫌な夢だった。なんであんな夢を見たのだろうか。誰がいなくなってしまうのかまでは覚えてはないがあんな思いはしたくない。そう思わせてくれた夢だった。

時刻は朝の6時だ。そのままカーテンを開き窓を開けた。すると眩しい光が目に飛び込んできた。

「うわ、眩し」

少し間をおいて光が朝日だと気づく。

「今日もいい天気だな。いいことがありそうだ」

空は雲ひとつない快晴だった。そうして新鮮な外の空気を吸い、俺、岡田義政の1日が始まった。

朝食を食べ、歯磨きなどのやることをすまし、高校の制服へと着替える。着替えが終わり次第、荷物を持って玄関で待機。なんで、待機してるのかって?すぐ答えは分かるさ。すると、玄関のチャイムが鳴り

「義政くんいる?」

と、おっとりとした声が聞こえた。
「ああ、いるよ」
とドアを開けると、ベージュ色が特徴の可愛い女の子がいた。この子が俺の幼馴染の1人の南ことりだ。ちなみにことりとは家が隣で3人の幼馴染の中で1番付き合いが長い。そんなことを考えてると
「ボッーとしてどうしたの？」
「いや、何でもないよ。それよりことり、早く行こうぜ。2人を待たせたら悪いからな」
「うん、そうだね義政くん」
そうして俺とことりは2人の幼馴染との集合場所へと向かった。

いつもの集合場所である炭団坂に着いた。そこにはいつものように俺達よりも早く来ている青色の長い髪の女の子がいた。
「おはようございます、ことり、義政」
「おはよう、海未ちゃん」
「おはよう、海未」
この子が3人の幼馴染の1人園田海未だ。青い髪が特徴でザ・大和撫子が似合う女の子だ。

「んで、あの天真爛漫なやつは?」
「天真爛漫って・・・」
「あはは・・・」
「まあ、そろそろ来るでしょう。流石に始業式の日には遅れないでしょう」
　そんなことを話してると
「おーい、みんなー」
　と元気いっぱいな声が聞こえた。
「遅いぞ、穂乃果」
「えー、今日はちゃんと時間通りに来たよー」
　この子が最後の幼馴染高坂穂乃果。前述通り天真爛漫で自分に素直な女の子だ。
「いえ、3分ほど遅いですよ穂乃果。まさか始業式の日に遅れるとは思いませんでした」
「ちょっとだけだよー。ねえ、ことりちゃん」
「そうだよ、2人とも。穂乃果ちゃんもちゃんと来たんだしいいんじゃない?」
「さすがことりちゃん」
「はあ、ことりは穂乃果に甘すぎます。まあ、今日はいつもよりはやいですしいいでしょう。明日は時間通りに来てくださいね、穂乃果」
「はい、分かりましたー!穂乃果頑張ります!」

「まったく、返事だけはいいんですから。それで義政もいいですか？」
「えっ、俺穂乃果のこと何か言ってたっけ？」
「「・・・」」
「さっき穂乃果のこと義政くん遅いって言っｔ「あーそんなことより早く行こうぜ！」え～」
そんなことがありながら、学校へ、音ノ木坂学院へと向かった。

「音ノ木坂学院は来年度より廃校になります」
訂正しよう。どこがいいことがありそうな1日だ。蓋を開けてみたら学校が廃校になるお知らせだと・・・。その後の話は頭に入ってこなかった。

集会が終わり俺は教室で突っ伏していた。そんな時
「うっそーー!?」
と叫び声が響いた。この声の正体は大方検討がついている。多分そのうち海未かことりがやってくるだろう。
「義政くーん、大変穂乃果ちゃんが」
ほら、思った通りだ。

「どうしたことり?どうせ穂乃果が廃校のことを聞いてなくて掲示板でも見て倒れたんだろ」
「あはは・・・、なんでそこまで分かってるのかな」
「かれこれ7、8年一緒にいるんだ。たいてい予想がつく。この後ことりは「穂乃果ちゃんを保健室に運ぶの手伝って」と言う」
「いや、分かってるなら言わないよ」
　なんだと!?俺の予想がはずれた。いや、それよりも
「ことり、お願いだ。俺に手伝いを依頼してくれ」
「もう、仕方ないな～、義政くん穂乃果ちゃんを保健室に運ぶの手伝って、おねがい～」
「喜んで」
　と俺は過去最速で穂乃果の倒れてる場所に向かい、穂乃果を保健室に運んだ。ああ、いいことが1つだけあった。1、2ヶ月振りにことりの「おねがい～」を聞けたことだろう。
　それからしばらくして穂乃果が戻ってきた。すごいどんよりした表情でだ。
「どうしたんだ?穂乃果?そんなに学校が廃校になることが嫌なのか?」
「いいえ、違いますよ義政。おそらく勘違いしてます」
「「勘違い?」」

「ええ、見てれば分かります」
「ど～しよ～、海未ちゃん、ことりちゃん、義政くん。学校が廃校だよ。統廃合だよ。穂乃果勉強してないから編入試験とかできないよ～！」
　そうか、確かにこのまま音ノ木坂が廃校になったらどこかの高校に転入することになり、テストを受けるだろう。そうなってくると1番心配なのは穂乃果だ。
「安心しろ、穂乃果。こう見えても学年トップ5の頭脳を持つこの俺が勉強を教えてやるから」
「ありがとうございマース、義政様～！」
「苦しゅうないぞ、穂乃果よ」
　そんなことをしてると
「何を馬鹿なことを2人してやってるのですか」
　と海未から横槍が入った。
「なんだよ海未、今穂乃果が編入試験を突破できるために勉強を教えるという話をしてたんだろ」
「そうだよ海未ちゃん。もしかして海未ちゃん穂乃果より頭悪いんじゃないの～？」
「あはは・・・」
　どうしてことりは苦笑いしてるのだろう？そんなことを考えてるとちょうど海未の

いる方向から怒気を感じた。いや、正確には海未からだ。穂乃果はそれに気づいてない様子だった。そして

「穂乃果ァァ、義政ァァ、ちょっと正座してもらってもよろしいですか?」

と笑いながら声をかけてきたが、目が笑ってない。やばい、どうしよう。

「なんで穂乃果達が正座しないと行けないの?」

あ、アホノカが火に油を注ぎやがった。てか、海未の背後に鬼が見えるんですけど・・・

「ち、ちょっと待ってくれ海未!穂乃果はともかくなんで俺までお説教を受けないといけないんだ」

「流れ的にです」

「えっ、なんで穂乃果がお説教受けないといけないの?海未ちゃん?あと、義政くん今穂乃果のこと見捨てようとしてたでしょ」

やばい、とりあえずお説教は避けないと。

「海未、お前が怒ってる理由はだいたい分かる。だけどまず俺らのことを馬鹿だと言った理由を教えてくれ」

「それもそうですね。さきほど、私が穂乃果が勘違いしてると言いましたが、まさか義政も勘違いしてたとは思いませんでした。まあ、結論から言うと編入試験については心配いらないからです」

「「なんで？」」
「ちゃんと理事長の話を聞いていたのですか？」
「廃校と聞いてからの記憶がないです」
「そもそも廃校ということを知らなかったよ」
「あはは・・・」
「だからですか。ですが大丈夫ですよ。私たちが卒業するまではなくなりませんので」
「「え～～!!」」
　おそらく今日１番の大声が学院内に響いただろう。そして
「では、２人とも正座してください」
　海未からお説教を受けた。１つだけ言わせてもらおう。俺何かしたっけ？

これだ!!

昼休み

海未からのお説教を受け、俺達は中庭の大きな木の下にいた。

「学校がなくなるにしても、今いる生徒が卒業してからだから早くても3年後だよ」

「良かった～。いやー、今日もパンがうまい」

ことりの言葉を聞いて再度安心したのか穂乃果はとても美味そうにパンを食べてる。

「でも、廃校が正式に決まったら、次の1年生は入って来なくなって、来年は2年と3年だけ…」

「今の1年生は、後輩がずっといないことになるのですね…」

「そっか…」

3人とも落ち込んでいる。まあ、その気持ちは分かるがな。俺も一応はこの学校の生徒だしな。だが3人はそれに加えて他にもあるだろう。穂乃果と海未の親は音ノ木坂が母校だし、ことりに限っては親の学校でもあるからな。俺と比べても悲しみは深いはずだ。

「俺も学校がなくなるのは悲しいけどな。どうしようもないんじゃないか？できること

があってもたいていのことはことりのお母さんがやってるだろうし」
「それは違うんじゃないかな」
「「穂乃果（ちゃん）？」」
「だって、ことりちゃんのお母さんや先生達がやれることをやったからって、私達が諦める理由にはならないよ」
「そうですね」
「穂乃果ちゃん・・・」
　これだから、穂乃果はすごいよな。さっきまでとは違って、海未とことりもいい顔をしてる。こんなふうにいつもみんなを引っ張っていけるカリスマ性を持っている。そして、それには俺も付いてってしまうだろう。
「そうだな。じゃあ、具体的にｈ「ねえ、ちょっといいかしら？」誰だよ！人の話を遮るやつは？」
「そういう義政くんも今日の朝穂乃果の話を遮ったよね？」
　うるさい穂乃果。少し黙ってようか。それで声が聞こえた方を向くと
「あら、義政。ごめんなさいね、話を遮るやつで」
　と微笑む絵里先輩がいた。この人は我らが音ノ木坂学院の生徒会長でなんとロシア人とのクォーターだ。そしてもう１人。副会長の希先輩がいた。俺はこの人のことを

マジもんの預言者かと思ってた時期があった。何かの占いをすると必ず当たるんだもん。本人曰くスピリチュアルパワーらしいが。まあ、それよりも何か絵里先輩が怒ってる気がする。

「なんだ～、絵里先輩ですか～。それに希先輩も～。２人とも名乗ってくれれば良かったのに～」

「義政くん、態度変わりすぎじゃ・・・」

とことりが言っている。頼むことり。それ以上言わないでくれ。俺も普通の態度でいたいけど、この人の前じゃ無理なんだよ。そんなことを思ってると

「それよりも、南さん」

と絵里先輩がことりに声をかけた。あれ?俺のことは無視?

「はっ、はい」

「あなた、確か理事長の娘よね?」

「はい・・・」

「理事長何か言ってなかった?」

「いえ、私も今日知ったので・・・」

「・・・そう、ありがとね」

と言って、絵里先輩と希先輩は立ち去っていこうとした。それを

「あの、本当に学校なくなっちゃんですか？」
と穂乃果が1番心配してることを聞くために呼び止めた。
「あなた達が気にすることじゃないわ」
と絵里先輩は少し冷たく言った。
「あ、あと義政は放課後生徒会室に来なさい」
「えっ、なんで？今日生徒会ありませんよね？」
「命令よ。いいわね？」
「ちょっ、ここで職権乱用かよ!?」
「じゃあ義政ちゃんと来なさいね」
「ほな～。あと義政くんちゃんと来るんやで～」
そうして2人が立ち去っていった。
「なあ、今の理不尽じゃね？」
「しょうがないよね～、義政くん生徒会役員だもん」
「まあ、そうですね。諦めない」
「えっ?!義政くん生徒会役員だったの？」
「なあ、穂乃果。お前ってよく音ノ木坂入れたよな」
「それについては同感です」

「あはは・・・、海未ちゃんと義政くんが丁寧に教えてあげたからだと思うよ」
「むぅ～、何か穂乃果の扱い雑じゃない？」
「そんなことはないだろ」
そんなことを話してるうちに昼休みが終わった。

放課後
俺は重い足取りで生徒会室に向かっていた。最初は無視して帰ろうとしたが、そんなことをするとあとが怖い。そのため、初めから生徒会室に行く道しか残されてなかった。そして、とうとう生徒会室にたどり着いた。
「失礼しまーす」
と中に入ってみると、絵里先輩と希先輩がいた。はやくね？ホームルーム終わってからまだ5分も経ってないよ。
「やっと来たわね義政。逃げなかっただけ褒めてあげるわ」
やばい。なんでか知らないけど怒ってる。
「絵里先輩、何をお怒りなのでしょうか？」
「別に怒ってなんかないわよ。ただ義政に頼みたい仕事があっただけ」
「本当に怒ってないんですか？まあ、仕事だったらやりますけど」

「ええ、じゃあこれをお願いね」
と絵里先輩が指を指した方を見ると山積みの書類があった。あれ？この量を俺ひとりでやるのはおかしくない？
「絵里先輩、これ全部俺がやるんですか？」
「そうよ。３日後に提出だからね」
「ほな、頑張ってな義政くん」
そうして２人は帰ってた。マジでこれを俺ひとりでやらなきゃ行けないの？生徒会ブラック企業じゃね？まあ、とりあえず書類持って家に帰りますか。
生徒会室をでて歩いて行くと、中庭にことり達の姿が見えた。何をしてるのか気になったため中庭に行き、声をかけた。
「よう、さっきぶり。何してんの？」
「あっ、義政くん。・・・何その荷物の量？」
「絵里先輩に押し付けられた。生徒会の仕事だ！」
「そんな量ひとりでできるの？ことり手伝うよ？」
「穂乃果も手伝うよ！」
「私も手伝いましょうか？」
「いや、３人とも大丈夫だよ。気持ちだけありがたく頂戴しとく。んで、そろそろ俺の質

問にも答えてくれないかな?」
「それはね、穂乃果達今学校のいいところを探してるんだ!」
「それはやっぱり廃校を阻止するため?」
「うん、穂乃果も海未ちゃんもことりちゃんも私達の学校になくなって欲しくないもん」
「そうだよな。なら俺も協力するぜ」
「ありがと～」
　そうして、プール、弓道部、グラウンド、講堂、偉そうな人（多分創設者かな?）の像などを見て回った。結果
「めちゃくちゃ普通だな」
「ですよね・・・」
　やばいだろ。この学校昔からあるのにいいところがあまりにもない。それが俺の感想だ。それはみんなも同じらしく
「うぇ～、ことりちゃ～ん。他に何かないの?」
　と穂乃果までお手上げのようだった。
「う～ん、強いていえば・・・古くからあるってことかなぁ」
「ことり、話聞いてましたか?」
「あっ、でもさっき調べて部活動では少しいいところ見つけたよ!」

「「ほんと（か）！」」
「と言っても、あんまり目立つものはなかったんだぁ」
何か最後に不吉な言葉が聞こえた気がした。それは本当だったようで
「ウチの高校の部活で最近1番目立った活動はと言うと・・・
珠算関東大会6位」
「微妙すぎぃ～」
「合唱部地区予選奨励賞」
「もう一声欲しいですね」
「最後はロボット部書類審査で失格・・・」
「最後のは言わなくてよくね？」
うん、聞いてて思った。部活動弱すぎるわ。そう思ってると
「ダメだぁ～」
「考えてみれば、目立つところがあるなら生徒ももう少し集まってるはずですよね・・・」
「そうだね・・・」
「てかさ、海未なら弓道で全国狙えるんじゃないの？」
「それだぁ～」
「それだじゃありません。確かに私なら弓道にのみ絞れば、全国を狙えるかもしれませ

んが、そもそも園田流を継ぐので、弓道のみに絞るのは無理です」
「そうか～」
「とりあえず、家に帰ってから考えないか?今ここで話してても決められないだろうし」
「そうだね。家に戻ったらもう少しお母さんに聞いてみるよ」
　とことりが言った。そしてそのまま帰る流れになった時
「私この学校好きなんだけどなぁ・・・」
　と穂乃果が呟いた。それに続いて
「私も好きだよ」
「私もです・・・」
　とことりと海未が言った。そして俺も
「俺も好きだよ。正直男子は少ないし、何か目立つものがあるわけでもない。けど、ことり、穂乃果、海未との大切な思い出がある。それがあるだけでこの学校を守りたいと思う理由には充分だろ」
「「義政（くん）」」
「だから、みんなでこの学校を守るために必要なことを考えてこようぜ!」
「「うん（はい）!!」」

そうして家に帰ることになった。

下校中

「じゃあな穂乃果、海未」

「じゃあね穂乃果ちゃん、海未ちゃん」

「ばいばいことりちゃん、義政くん」

「また明日です、ことり、義政」

と炭団坂で穂乃果、海未とわかれ、俺とことりは帰っていた。

「ねぇ、義政くん」

「なんだ？ことり」

「義政くんはどうすれば学校を守れると思う？」

「難しい質問だな。正直俺にも答えはわかんないな。でも、1つだけ言えることがある。諦めなければきっと道は開けるさ」

俺の答えを聞き満足したのかことりは

「うん、そうだね」

と笑顔で言った。

「んじゃ、俺買うものあるからまた明日な」

「うん、また明日」

とことりとわかれ俺は秋葉原へと向かった。

秋葉原に着き俺はあるグループの新作グッズを買いに来た。お目当ての店に着いて、そのグッズを探す。そしてグッズを見つけた。どうやら残り1つのようだ。俺がそれに手を伸ばすと横からもう1本手が伸びてきた。そして、俺の手とその手がぶつかった。グッズの上でだ。まあ、俺の方が先にグッズに手をのせてたので

「すみません、これ、俺のでいいですよね?」

と聞くと聞き覚えのある声が帰ってきた。

「なんでよ、にこに、グッズを譲れないわけ?」

「なんだにこ先輩じゃないですか〜。どうかしたんですか?」

この人は矢澤にこ先輩。大のアイドル好きだ。俺にスクールアイドルについて教えてくれた人でもある。

「グッズを買いに来たのよ。そしたら残り1つでとろうとしたらあんたと手がぶつかっただけ。まあ、そんなことはどうでもいいからそのグッズはやくにこに渡しなさい」

「いや、いくらにこ先輩でもこれは譲れませんよ。A―RISEの新作グッズだけは」

「A―RISEのことを教えたのは誰だったかしら?忘れたわけじゃないわよね」

「いや〜キレイさっぱり忘れてしまいました〜」

「なんでよぉー」
「うわ、いきなり大声ださないで下さいよ」
「だって、だってぇ」
やばい、にこ先輩のことを泣かせそうだ。

なんて言うと思ってか?この先輩のことだ。きっと
「にこ先輩、嘘泣きはやめましょう。1度騙されたものに騙されるほど俺も子供じゃないですよ」
「ちっ、引っかからないか。部活に入部させた時は引っかかったのに。まあ、いいわ。いい加減、グッズを渡しなさい。部長命令よ!」
「いくら部長でもこれだけは譲れませんね」
「だったらジャンケンで勝負よ。あんただって逆の立場ならそうするでしょ」
「ええ、そうですね。いいでしょう。行きますよ」
「「ジャンケン、ぽん」」
何故俺はパーを出してしまったのだろう‥‥‥ おかげで俺はグッズを失ってしまった。

「じゃあ遠慮なく買わせてもらうわ。あんたは次の入荷でも待つのね」
と言ってにこ先輩はグッズを買い、帰っていった。なんで今日こんなに不運なんだろう・・・
そして帰り道、俺はＵＴＸの前の巨大なＴＶでＡ―ＲＩＳＥのＰＶを見てた。そしてこんなことを思った。ことり、穂乃果、海未でスクールアイドルをやってみればいいのにと。まあ、ありえないだろうけど。
そうして家に帰り、宿題、生徒会の書類（終わるわけない）などやることをやり、寝た。

そして次の日学校で
「みてみてみてぇ～」
と穂乃果が俺達に声をかけてきた。
「なんだこれって、スクールアイドルの雑誌ィーー!?」
「えっ、義政くん知ってたの?じゃあ話がはやいや。海未ちゃん、ことりちゃん私達でスクールアイドルやらない?」
まさか昨日考えてたことが当たるとは・・・
だが俺はこの時知らなかった。この言葉で俺達の学校生活が大きく変わることを。

スクールアイドル!?

穂乃果がスクールアイドルをやろうと言った時、海未が消えた。いや、正確にはいなかったが正しいだろう。

「あれっ?」

「海未は?」

なんとなく想像がつく。海未は穂乃果の言うことを察知して逃げたのだろう。まあ、そこまで穂乃果の行動が予想できたのなら、穂乃果が逃がすことがないのも予想できるだろう。何故走って逃げない。案の定

「海未ちゃん!まだ話おわってないよぉ〜」

「私はちょっと用事が・・・」

いや、海未。その言い訳は苦しいぞ。

「いい方法思いついたんだから聞いてよぉ〜」

「・・・はぁ、私達でスクールアイドルをやるとか言いだすつもりでしょ?」

「おぉー、海未ちゃんエスパー!?」

「誰だって想像がつきます!」

まあ、そうだろう。逆にこれで気づかない方がおかしい。それにエスパーというものは希先輩が1番近いだろ。スピリチュアルパワーでほとんど言い当てるし…
「だって、こんなに可愛いんだよ!キラキラしてるんだよ!」
「そんなことで本当に生徒が集まると思いますか?」
「それは…　人気がでなきゃだけど…」
「その雑誌にでてる人たちはプロと同じくらい努力し、真剣にやってきた人たちです。穂乃果のように好奇心だけで始めてもうまくいくはずないでしょう!」
穂乃果が何も言い返せないとそのまま
「はっきり言いますアイドルはなしです!」
と海未はいい、立ち去っていった。
「もう〜、海未ちゃんは・・・・・・
ことりちゃんはやってくれるよね?義政くんは手伝ってくれるよね?」
うお、いきなり俺達に質問してくるか。う〜ん、確かにスクールアイドルに目をつけたのはいい考えだと思うし、俺も昨日は3人がやれば可愛いと思ったけど、海未の言うことも正しいしな。何よりスクールアイドルをやって失敗して傷つくことり、穂乃果、海未を俺は見守れるのか?いくら考えても答えは出てこない。すると
「少し考えさせてもらってもいいかな?」

とことりが言った。きっとことりも同じことを考えてたんだろう。
「俺もだ。別にスクールアイドルに否定的なわけではないが、色々と考えることもあるしな」
「うん、分かったよ」
そうして1度その話は終わった。

放課後
俺は生徒会の仕事に必要な本を図書室に取りにいってた。ことりも穂乃果も海未も俺のことを置いてどこかに行ってしまうんだもん。正直悲しい・・・
そんな時、音楽室からピアノの音色が聞こえた。とてもいい曲だ。そんなことを思いながら俺の足は音楽室に向かっていった。
音楽室につくと中で赤い髪のショートカットの女子がピアノを弾いていた。その子がピアノを弾き終わると俺は拍手をしていた。
「ヴェェー!?」
あれ?俺変なことしたっけ?何か奇声あげて驚いてるんだけど。
「すごい、いい曲だったよ」
と、とりあえず声をかけた。すると

「あ、当たり前でしょ。私を誰だと思ってるの?」
「すまん、誰だかは分からん。あとさっきなんで奇声あげて驚いたんだ?」
　そう答えると、その子は少し表情を落としたように見えた。そして
「私は西木野真姫よ。よろしくね先輩。あと驚いたのは今日の昼間にきたサイドテールの先輩と同じ反応をしてたから」
　それだけ聞いて誰がここに来たのか分かった。てか俺、穂乃果と同じ反応してたのか。
「ああ、よろしくな。あと、俺学年とか言ってないのになんで先輩だと分かったんだ?」
「ヴェェー、それはその、ネクタイ、そうネクタイの色よ!」
「すごい観察力あるんだな。西木野」
　そう言うと何故か西木野は得意気な顔で
「ええ、そうでしょ」
　と言った。感情表現が豊かだな。
「あっ、そうだ、俺は岡田義政だ。呼び方は何でもいいからな」
「そう、じゃあ義政先輩って呼ばせてもらうわよ」
「ああ、いいぜ、西木野」
「それで義政先輩、もう1曲聞いてく?」

「ああって言いたいけど、今から図書室に本を借りにいくから、また今度聞かせてくれよな」
「そう、じゃあまたね。義政先輩」
と西木野は妖艶な笑みで言った。
「あ、ああ、またな」
となんとか返事をして、俺は音楽室から図書室へと向かった。

ｓｉｄｅ真姫

始めてあの人が入ってきた時には驚いたけど、昔と、全く変わってなかったわね。義政は。最初は同一人物か、疑ったけど話してるうちに本物だと確信したわ。まあ、私のことを忘れてたのはショックだったけど・・・
いずれ思い出させて、また真姫って呼ばせるんだから。その時まであの約束はお楽しみね。

ｓｉｄｅｏｕｔ

図書室に着いた。必要な本を借りるため、カウンターに行き、本を借りた。すると下から音楽が聞こえてくる。それもＡ―ＲＩＳＥの曲だ。窓から下を覗き込んで見ると、穂乃果が踊っていた。Ａ―ＲＩＳＥなどの全国のスクールアイドルのダンスと比較できないほどの初々しいダンスだ。だから見向きされない？いや、穂乃果のダンスには何

か惹き付けられるものがあった。そう、あのＡ―ＲＩＳＥにもない何かがだ。俺はそれを見て、決心した。スクールアイドルを手伝おうと。

下に降りて、穂乃果がいた場所に向かった。角を曲がると海未が穂乃果に手を差し伸べてる。そしてそれを微笑んで見ていることりがいた。

「ことり何があったんだ？」

「えへへ、とってもいいことだよ～」

「そうか、良かったな」

「うん！」

何があったかはことりの反応を見ればだいたい分かった。

「それじゃあ、ことりもスクールアイドルやるのか？」

「うん、穂乃果ちゃんも海未ちゃんもやるんだもん」

「そうか」

「義政くん、ことりたちのこと手伝ってくれますか？」

やばい、ことりが俺のことを頼ってくれてる。それだけで嬉しい。

「ああ、当たり前だろ！」

「ありがとう！」

「あっ、ことりちゃん、義政くんも」

「穂乃果ちゃん、ことりもスクールアイドルやるよ」
「ホントォ～、ありがとうことりちゃん」
「それで私もことりもやるんですから、義政も手伝ってくれますよね？」
「あの～、海未さん、後ろに修羅が見えるのですが…
　まあ、いいか。さっきことりにも言ったけど手伝うよ」
「本当っ！じゃあ早速部活申請に行こう！」
　そうして生徒会室にやってきた。
「・・・これは？」
　あれ？絵里先輩、不機嫌じゃね？
「アイドル部、新設の申請書です！」
「それは見れば分かります」
「じゃあ認めて頂けますよね！」
「いいえ、部活は同好会でも最低５人は必要になるの。なんで義政がいるのに分からないのかしら？」
　・・・あ、やべ、確かに部活の設立には５人以上必要だった。
「ですが、校内ｎ「海未～」なんですか!?義政」
「話遮るようで悪いけど、今５人以下の部も設立時は５人以上いたから、何言っても無駄

だぞ」
「そうですか…」
　するとここまで黙ってた希先輩が口を開く。
「あと1人やね」
　うん、あと1人だね。ことり、穂乃果、海未、俺で…
「あっ、やべ!!」
「どうしたの？義政くん」
「いっ、いや、何でもない。ただ生徒会の書類やってなかったことを思い出しただけだから」
「そう…」
　辛うじて嘘をついた。実際、書類もやばいけど、俺、にこ先輩のアイドル研究部に、強制入部させられてんだった。それをどうにかしないとな…
「あと1人。分かりました、行こう」
　と穂乃果は生徒会室をあとにしようとする。それを
「待ちなさい」
　と絵里先輩が食い止めた。
「どうしてこの時期にアイドル部を始めるの？あなた達2年生でしょう？」

「・・・廃校を何とか阻止したくて、スクールアイドルって今すっごく人気があるんですよ!だから」
「だったら例え5人集めてきても認めるわけにはいかないわね」
「どうして?」
「部活は生徒を集めるためにやるものじゃない。思いつきで行動したところで状況は変えられないわ。変なこと考えないで残りの2年自分のために何をするべきか、よく考えるべきよ」
　と絵里先輩は申請書を突き返してきた。
「・・・戻ろう」
　穂乃果は何も言い返さず、生徒会室をでてった。
「義政くん、行こ」
　とことりが声をかけてくるが
「いや、ことり。俺はやることあるから先に戻っててくれ」
　と言いことりのことを戻らせた。そして
「絵里先輩、なんで穂乃果にあんな言い方したんですか?」
「・・・えっ?」
「確かに思いつきかもしれませんが、穂乃果の廃校を阻止したいという気持ちは、絵里先

輩と同じはずですよね?なのにあんな言い方はきついと思うんですが」
「だからよ」
「えっ?!」
「私も廃校を阻止したい。その気持ちは同じだわ。でも彼女たちがスクールアイドルで失敗して、スクールアイドルをやめたら学校にとって大きなマイナスになるからよ」
「本当にそう思ってるんですか?」
「ええ」
「んじゃ、今はそういうことにしときます」
「今は?変な言い方ね。私の決心は変わらないのに。それよりも、私はあなたが彼女たちを手伝う理由を知りたいわ」
「それは、答えてもいいけど笑いませんか?」
「そんなにおかしい理由なの?」
「まあ、多分」
「うちは笑わんよ」
　希先輩、そういう時にだけ何故顔を突っ込んでくるんだろう?しかも悪い笑みを浮かべてるし…
「ええ、私も笑わないわ」

「まず、穂乃果のおかげですかね。穂乃果の言い出すことは無茶が多いけど、それをやって後悔したことなんて1度もないので」
「だから今回も手伝おうと？」
「ええ、もうひとつありますけど」
「それは何やん？」
「まあ、こっちが笑われるやつなんですけどね。・・・・・・なんで」
それを言うと、生徒会室に笑い声が響いた。
「まさか、義政がそんな人間だったなんてね」
「うちも驚きやで」
「笑わないって言ったじゃないですか・・・」
「ごめんなさい。でも私は義政の気持ちを知っても認めることは・・・」
「分かってます。それじゃあ失礼します」
と俺は生徒会室を出ていった。そしてそのままスクールアイドル部の部室へと向かった。
何か外から歌い声が聞こえる…

にこ先輩とのお話

俺は生徒会室でてからアイドル研究部の部室へついた。今から俺はにこ先輩と話をしなければならない。部室の扉を開けると

「にっこにっこにー！」

とにこ先輩がお決まりの決めポーズをとっていた。

「相変わらずですね」

「げぇ、なんで今日に限って来るのよ！」

「いや、お話があって」

「真剣な話？」

「ええ、とっても」

「いいわ。にこの時間を少しだけわけてあげる」

「ありがとうございます」

「それでどんな話なの？」

「にこ先輩、本当に申し訳ありません！兼部を認めてください！」

「なぁんだ、兼部ね」

おや？にこ先輩の反応薄くね？
「って、兼部ぅぅー!?」
訂正、いつも通りのにこ先輩だ。
「ちょっ、なんでよ？最近部活にも来てなかったし、アイドルに飽きちゃったの？」
と詰め寄って聞いてきた。
「にこ先輩、近いです」
「あっ、悪いわね。それで兼部ってどういうこと？本当にアイドルに飽きたの？」
「いや、飽きてないですよ。ただ俺の幼馴染がアイドル始めるので、それを手伝おうかと」
「ふーん」
「そうだ！にこ先輩も一緒にどうですか？」
「嫌よ」
「なんでですか？」
「まえ、あんた幼馴染が思いつきで行動するって言ってたわよね。スクールアイドルは思いつきでやっていけるほど甘くないから。あんたの幼馴染が本気でやるなら考えるけどね」
「分かりました。それで兼部はいいですか？」

「いいわよ」
「ありがとうございます」
「でも週に2度は部室に来なさいね」
「分かりました！」
　そうして俺は部室からでて、教室へと向かった。

　教室に着くとことり、穂乃果、海未が待っていた。
「穂乃果、どうするんだ？絵里先輩には認めないとまで言われてるけど」
「・・・やるよ。やるったらやるよ！」
「そうか。じゃあこれからの活動について考えないとな」
「うん！」
「んで、スクールアイドルをやるんだ。もちろんライブもやるんだろ」
「そうだね～」
「ですが、部として認められてない以上、ライブをする場所も・・・」
「どうしよう穂乃果ちゃん？」
「う～ん、どうすればいいと思う？義政くん」
「そこで俺か…そうだな、新入生歓迎会の日に講堂を借りてライブするのはどうだ？」

「それすっごくいい！」
「私もそう思う！」
「私も賛成です」
　よし、とりあえずライブをする日は決まったな。問題はその日までに何をするかだ。
「ライブで使用する曲はどうするんだ？どこかのスクールアイドルの曲を使うのか、オリジナルか」
「私はオリジナルがいいな」
「うん、私も」
「じゃあ曲を作らないとな。作曲とかは誰がやるんだ？」
「う～ん、海未ちゃん中学の時、ポエム書いてたよね　」
「あー、そんなのもあったな」
「ちょっ、やめてください！」
「読ませてももらったよね～」
「かっ、帰ります！」
「逃げた！」
「海未ちゃん！」
「絶対嫌です！中学の時だって思いだしたくないくらい恥ずかしいんですよ」

「アイドルの恥は書き捨てと言うじゃない」
「言いません！穂乃果がやればいいじゃないですか」
「なあ、海未。お前は穂乃果に歌詞が書けると思ってるのか？お饅頭、うぐいす団子、もう飽きたの穂乃果に」
「言い方ひどくない？」
「確かに穂乃果には無理そうですね。ならことりは？」
「ことりが歌詞を書くとしたら、衣装は誰が作るんだ？」
「・・・いませんね」
「よし、ちゃんと現実を見てるな」
「なら、義政くんは？」
「なあ、海未。お前たまに本当にバカになるよな。俺に歌詞が書けるとでも？無理だろ？」
「確かに穂乃果のあの俳句を絶賛してましたし・・・」
「というわけで海未しかいないんだ」
「ですが・・・」
「往生際が悪いぞ、ことり頼む！」
「うん！海未ちゃん…お願いっ!!」

出ました！ことりのお願い！これを受けたら例え海未でも持ちこたえることはできないだろ。その予想通り
「あっ！もう…ずるいですよ、ことり」
ほらな。あのお願いを断れる人間はこの世に誰ひとりとしていないだろう。
「よかった、そう言ってくれると思ったんだ」
「ただし、ライブまでの練習メニューは私が作ります。もちろん義政もやるんですよ」
「えっ、俺手伝うとは言ったけど練習もするとは」
「やりますよ」
あ、これ選択権ないやつだ。
「分かりました」
なんで俺も練習参加するんだろう？
「んで、歌詞担当は決まったけど、作曲はどうするんだ？あと、グループ名も」
「作曲には心当たりがあるんだ！」
「んじゃ、作曲は穂乃果にまかせて、グループ名は？」
「うーん」
「保留？」
「じゃあ、グループ名は各自家で考えてこよう」

そうして家に帰ることになった。ことりと海未は穂乃果の家で話し合うらしいので誘われたが、生徒会の書類があるので断った。

翌日、学校で

「朝からなに？」

俺らは生徒会室に来ていた。俺が書類を終わらせたから出しに行くと言ったらついでに講堂の使用許可を頂きたいと思いまして」

「講堂の使用許可を貰いに行く流れでだ。

「部活動に関係なく、生徒は自由に講堂を使用できると、生徒手帳に書いてありましたので…」

「新入生歓迎会の日の放課後やな」

「何するつもり？」

「それは…」

「海未、ちゃんと言っ「ライブです！」うん、こうなると思ってた」

「４人でスクールアイドルを結成したので、その初ライブを講堂でやることにしたんです。」

「新入生歓迎会は遊びじゃないのよ」

「４人は講堂の使用許可を取りに来たんやろう。部活でもないのに、生徒会は内容まで、

とやかくいう権利はないはずやん」
「それは…」
「失礼しました」

ふう、何とか講堂は使用できるな。
ｓｉｄｅ絵里
「なぜあの子達の味方をするの？」
私は希に聞いた。何故、希が彼女たちの活動に味方するのかを。
「何度やっても、そうしろって言うんや」
「うん？」
「カードが！
カードがうちにそう告げるんや！」
ｓｉｄｅｏｕｔ
「ちゃんと話したじゃないですか。アイドルのことは伏せておいて、借りるだけ借りておこうっと。なのに何故言ったのですか？」
「海未、穂乃果は多分、これからのことも考えて言ったんだと思うよ」
「えっ？」

「これから俺たちはスクールアイドルとして、音ノ木坂の顔になるんだ。それなのに始まり方が逃げたような始まり方でいいわけがない。だから言ったんだと思う。穂乃果はいつまでパン食べてるんだ！太るぞ」
「・・・そうかもしれませんね」
「ひっど～い」
「あっ、３人とも」
「「うん？」」
　駆け寄ってきたのはヒデコ、フミコ、ミカの３人だった。
「掲示板見たよ。スクールアイドル始めるんだって？」
「ひとつ言う。俺はあくまでサポートだぞ」
「分かってるよ～、でも海未ちゃんがやるなんて思わなかった！」
　どうやら穂乃果が掲示板になにか貼ったらしい。
「穂乃果、掲示板に何か貼ったのか？」
「うん、ライブのお知らせを！」
「それは生徒会から講堂の使用許可もらう前に？」
「うん！」
「・・・断られるとか心配しなかったのか？」

「もちろん！」
「それに海未は関わってるか？」
「まっ、まさか。ちゃんと手順を踏んでからやるべきですし」
「ほー、じゃあ穂乃果の独断か？」
「うっ、ことりちゃんはいいって言ってたよ！」
「じゃあ許す」
「義政!?態度変わりすぎでは？」
「そんなことはない。終わりよければすべてよしってやつだ。ことりがどれくらい進んだか見に行こう」
「おう～」
　そうして俺たちは教室へ戻った。教室ではことりが何かを書いてるようだった。
「うん！こんなもんかなあ？」
「どうしたんだ？」
「あっ、みんな～、みて～ステージ衣装を考えみたのー！」
「おぉー、かわいい～！」
「本当？このカーブのラインが難しいんだけど、何とか作ってみようかなって」
「うんうんうん」

うん、ことりの書いた衣装は確かにかわいい。だけど・・・
「ことり?」
「海未ちゃんはどう?」
「えーーと」
「かわいいよね?かわいいよね!」
「こ、ここのすっと伸びているものは?」
「足よ」
「えっ!?素足にこの短いスカートってことでしょうか?」
思った通り海未には抵抗があるようだ。
「アイドルだもん」
「大丈夫だよ」
やべ、穂乃果が海未のスカートに手を・・・ 慌てて目を逸らしたが悲鳴が聞こえない。
恐る恐る視線を戻すと
「海未ちゃん、そんなに足太くないよ!」
とスカートの上から海未の足を触る穂乃果がいた。
「人のこと言えるのですか!?」
「あっ、ふんふんふん。よし、ダイエットだ!」

「2人とも大丈夫だと思うけど」
「ことりもな」
「うっ、義政くん・・・」
「ことり？何か言ったか？」
「べ、別に義政くんのエッチって言っただけだよ」
　えっ・・・　俺ことりに変態だと思われた？嫌われた？ちょっ、ヤバすぎる
「ことり、許してくれ！お願いだ！」
「怒ってないからいいけど…」
　あっぶねー、このままことりに嫌われてたら死ぬところだった。
「海未ちゃん、やっぱり」
「ええ、そうでしょう」
　なんか穂乃果と海未は2人で言ってるし。はやく話を変えよう。
「えっーと、グループ名どうするんだ？」
「それはね～、考えてきたよ」
「おっ、なんだ？」
「来て」
　どうしたんだ？穂乃果は俺たちをどこに連れてくきだ？

「じゃーん、これでよし」
「丸投げかよ!?」
「こっちの方が、みんなも興味をもってくれそうだしね」
「そうかもね」
「よし、次は歌と踊りの練習だー！」
「まて、歌詞は決まったけど、作曲どうするんだ？」
「あっ、頼みにいかないと」
「頼みに？」
「うん！」

ｓｉｄｅにこ

義政たちが掲示板を去ったあと1人の少女が掲示板を見つめていた。リボンの色的に1年生のようだ。その子は憧れを見るような目でポスターを見ていた。そこに
「か～よちん！」
と声をかけてきたオレンジ髪の女の子がきた。それよりもかよちんって何？
「凛ちゃん！」
どうやらその女の子は凛ちゃんと言うらしい。
「どうしたの？」

「えっ、あっ！うんうん、なんでも、ない」
かよちん？の方は何故か自分の気持ちを隠してるようね。
「うー、さっ、帰ろう」
凛って子も気づいてるけど言及はしないみたい。
「うん、あっ！」
やばい、気づいたら近づいてた。仕方ないので
「何？これ」
と誤魔化した。
「さ、さあ？」
とかよちん？は言って帰ってた。それよりも義政は本気で幼馴染たちを手伝うみたいね。
ｓｉｄｅｏｕｔ
「それで誰に頼むんだ？」
「うーん、名前は分からないんだけどね。歌とピアノがすっごくうまかったから頼みにいくんだ」
「おい、まて、穂乃果。それは心当たりがあるとは言わないぞ」
「大丈夫だよ」

俺は穂乃果のその根拠のない自信がどこから湧いてくるのか分からないよ。そんな時穂乃果が音楽室の扉を開けた。えっ?音楽室?まさか・・・

「あっ、いた」

そのまさかだった。西木野がオッケーしてくれるかで俺たちの運命が決まるのか・・・

作曲をしてもらえ！

どうやら穂乃果が作曲を頼もうとしていた相手は西木野だった。
「やっぱりピアノ上手いね」
「ヴェェ」
「今日はお願いがあるの」
「何ですか？」
「えっーと、あなた「西木野だ」西木野さん。私たちの曲を作曲してくれないかな？」
「お断りします」
「お願い！あなたに作曲してもらいたいの」
「お断りします」
「歌うだけで作曲とかは」
「やりたくないんです。失礼します」
と西木野は出ていった。
「穂乃果、どうするんだ？」
「やってもらいたいんだ」

「でも断られただろ」
「今度また頼んでみるよ。あと、なんで西木野さんのこと知ってたの?」
「まえ、ここで会って名前を教えてもらったからだよ」
「なんだ〜、義政くんがナンパでもしたのかと思っちゃったよ」
「おい、流石に怒るぞ」
「ごめんね〜」
　作曲は西木野には断られたがどうやら穂乃果も諦める気はないようだな。
「それよりも練習やらないのか?」
「あ〜、忘れてたぁー」
「マジかよ…」
　穂乃果は全力で教室へと走っていった。俺もいかないと…
　教室についてから練習場所を探すことになった。最初はグラウンドに行ったが
「はっはっはっは」
「ボールそっち行ったよー」
　と陸上部などが練習をしており
「うーん、ここだと邪魔になりそうだよね」
「違う場所行こうか」

となった。次に体育館に来たが
「トース！」
「そこシュート！」
とバレーボール部や、バスケ部がいたため
「あぁ～、ここも全部使ってるぅ～」
「しょうがないよ。他のところ行ってみよ？」
となった。それよりも俺のセリフがない気がする。次に空き教室に行ったが
「んぐーんぎー」
「鍵かかってる・・・」
「空き教室は使えないんですね」
「職員室に行って先生に空き教室の鍵貸して貰おう！」
そうして、職員室に行った。
「空き教室を？何に使うんだ？」
「スクールアイドルの練習に・・・」
穂乃果が答えると山田先生が後ろにいた俺たちをみて笑った。
「お前らがアイドル？くふっ」
「鼻で笑った!?」

「まあ、部活でもないのに、生徒に空き教室を使わせる訳にはいがないんだ。すまないな」
「そうなんですか。ありがとうございます。失礼しました」
　職員室をでて
「じゃあどこでやる?」
「他に見てないところは…」
「屋上とかか?」
「それだよ!」
　そうして屋上にいき
「あれ?屋上ってこんな感じだったけ?」
「そうですよ」
「日陰もないし、雨が降ったら使えないけど、贅沢は言ってられないよね…」
「うん、でも、ここなら音とか気にしなくてもよさそうだね」
「そうだな。広さも充分だし練習するのになら問題はないだろ」
「うん、じゃあさっそく歌の練習を・・・
　まだ決まってないんだ…」
「仕方ない、今日は体力をつける練習するしかないだろ」

「そうですね」
「んじゃ、海未。練習メニューあるんだろ。さっそくやろうぜ」
「ええ。さっそく神田明神に行きましょ」
「なんで？」
「もちろん、階段ダッシュするためです」
「・・・マジ？」
「マジです」
「俺、生徒会が・・・」
「記念すべき練習1日目に休むのですか？」
「そうだよ、義政くん」
　くそ、ほのうみが手を組みやがった。てか、穂乃果は俺を道連れにしたいだけだろうし。ことりは
「義政くん。一緒に練習してくれないの？」
「よし、すぐ行こう！」
　となり、俺たちは神田明神に向かった。神田明神につき、向かったのは神田明神の正面ではなく、男坂だった。てか、この急な階段をダッシュするの？俺、2回目突入できないよ。

「では、この階段を走って昇り降りしますよ。最初は私と穂乃果でやるので、タイムの測定お願いしますね」
「うん」
「ことり、スタートの合図を」
「じゃあ、いくよ。よーいドン」
　ことりの合図とともに２人が勢いよく走り出した。２人ともスピードは階段を降りるまでは一緒だったのだが、昇り入ると穂乃果の遅れが目立ち始めた。海未のペースはほとんど一緒だったものの、穂乃果がゴールしたのは海未から３０秒ほど遅れてだった。
「やはり、穂乃果は体力が不足してますね」
「そうだな。海未は余裕だったか？」
「いえ、流石に疲れますよ。もう一度走ったらさっきと同じタイムでは無理でしょう」
「そういうものか。そろそろ俺とことりの番だな。タイムよろしく」
「ええ。では、始めますよ。スタート」
　海未の声を聞き、俺とことりが同時に駆け出した。男子と女子という差もあるのか、少しずつ俺とことりの距離は離れていった。何故か俺が遅れているという形で・・・そして俺はことりに遅れて１０秒ほどでゴールした。

「義政くん、私より遅いよ～」
と穂乃果が茶化してきた。
「ハアハア、うるせーよ穂乃果。」
「義政、流石に遅すぎませんか？」
「それについては何も言い返せない・・・」
「義政くん、体調悪いの？家で休んでた方がいいんじゃ？」
ことりが優しすぎて泣いてしまいそうだ。
「大丈夫だ。ただひたすらに体力がないだけだから」
「だったらいいんだけど」
「ちょっと、水飲んでくる」
やばい。俺ってここまで体力ないのか・・・ まあ、考えてみれば当然か。高校に行ってから、体育ぐらいしか運動してないし。とりあえず体力つけないとな。
それから1時間ほど休憩を挟みながら階段ダッシュを繰り返し今日は解散となった。
翌日の朝、穂乃果が西木野のことを屋上に呼び出した。
「お願い、私たちの曲を作曲して！」
「お断りします」
うーん、これは厳しいんじゃないか？そう思ってると、扉が開き絵里先輩がきた。

「ねえ、ちょっといいかしら？」
「生徒会長・・・」
「スクールアイドルやっても結局ダメだったとなれば却って逆効果。私も学校消えてほしくないから」
穂乃果が言い返せないでいると西木野と絵里先輩は去っていった。
それから、そのことをことりと海未に話すと海未が
「作曲をしてもらえないのであれば、他のスクールアイドルの曲を使うことも視野にいれないといけませんね」
「そうだな。って、穂乃果は？」
「まえ、置いたグループ名募集箱見に行ったよ」
そんなことを話してると
「入ってたよー！」
と穂乃果が走ってきた。
「入ってた？」
「ホント？」
「あったよぉー！1枚！」
たった1枚。だけど、その1枚は俺たちにとってかけがえのないものだろう。そもそ

も見向きされない可能性だってあったのだから。
穂乃果が紙を広げてみようとする。そこに俺とことりと海未が駆け寄る。
「・・・ユーズ？」
その紙にはμ'ｓと書かれていた。
「たぶんμ'ｓ（ミューズ）ってじゃないかと」
「ああ、石鹸？」
「・・・違います」
おい穂乃果。なぜスクールアイドルの名前を決めるのに石鹸がでてくる。
「違います・・・」
「恐らく、ギリシャ神話にでてくる女神から付けたのだと思います」
確かに海未の言う通りだ。だけどμ'ｓって９人の女神のことを表してたような気がするんだが。俺の考えすぎかな。
「いいと思う。私は好きだな！」
ことりにも好感触のようだ。これはグループ名はμ'ｓで決まりかな。
「・・・μ'ｓ。うん！今日から私たちはμ'ｓだ！」
穂乃果も決めたようだ。俺はもちろん、海未にも異論はないようだしグループ名はμ'ｓで決定だろう。

放課後、俺と穂乃果は音楽室に向かっていた。

ｓｉｄｅ真姫

音楽室でピアノを弾くのが日課になってきた。ここでピアノを弾いていれば、義政が来てくれる気がするから。ピアノを弾き終わると

「パチパチパチ」

と拍手の音が聞こえた。音の聞こえた方を見てみると

「ヴェエ」

と声を出してしまった。仕方ないだろう。また、あの先輩が来たのだから。義政と一緒に。

「しつこいですね」

「そうなんだよねぇ、海未ちゃんにいつも怒られるんだー」

皮肉のつもりで言ったのに、全く効果がないみたい。それよりも義政が私の言ったことに共感してるのかものすごく頷いてるんだけど。

「私、ああいう曲一切聴かないから、聴くのはクラシックとか、ジャズとか」

「・・・へぇー、どうして?」

「軽いからよ!何か薄っぺらくて、ただ遊んでるみたいで」

「そうだよねぇー」

私は予想にもしなかったその返答に戸惑った。
「え？」
「私もそう思ってたんだ。何かこう、お祭りみたいにパァーっと盛り上がって、楽しく歌っていればいいのかなって。・・・でもね、結構大変なの」
意味が分からなかった。ただひたすら楽しそうに歌ってることの何が大変なのか
「西木野、腕立てできるか？」
義政が聞いてきた。
「はぁ？」
「できないんだ～」
何よこの先輩。ムカつくわね。
「うぇ、できますよそのくらい！」
とブレザーを脱ぎ腕立てを始め
「1、2、3…、これでいいんでしょう!?」
「おぉーすごい！私よりできてる！」
「当たり前よ、私はこう見えても」
「ねえ、それで笑ってみて」
「なんで？」

「いいから!」
　なんで笑わないといけないのだろうか?疑問に思ったが、この先輩のことだし、笑わないと引いてくれなさそうだったので笑ってみた。すると
「うう、うう」
　何故か先程まで楽に出来ていた腕立てが厳しい。
「ね?アイドルって大変でしょ?」
「どういうことよ?」
「はい、歌詞。1度読んでみてよ」
「・・・だから私は」
「読むだけならいいでしょ。今度聞きに来るから。その時、ダメって言われたら、すっぱり諦める」
「答えが変わることはないと思いますけど・・・」
「だったらそれでもいい。そしたら、また歌を聴かせてよ」
「え?」
　いま、なんて言った?また歌を聴かせて?
「私、西木野さんの歌声大好きなんだ!あの歌とピアノを聴いて感動したから、作曲、お願いしたいなーって思ったんだ!」

お世辞で言ってるのだろうと疑ってしまいそうになる。でも、この先輩は本当に思ったことを言っているのだろう。今までの先輩の行動がそれを確信づける。

「じゃあ、考えてみてね。それじゃ！」

といって先輩は出ていった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

西木野に穂乃果が穂乃果らしい言葉をいって音楽室から出ていった。俺も一言だけ言っておくか。

「あー、西木野」

「な、なんですか？」

「作曲するかしないかの前に、朝か夕方、神田明神で穂乃果たちが練習してるから見に来てくれ。きっと何か思うことがあると思うから」

と言って、俺も音楽室を出た。その後、神田明神で練習をして解散となった。練習中に悲鳴が聞こえた気がするけど気のせいだよな。

曲をゲット！

翌日穂乃果がとても嬉しそうな顔をして朝練にやってきた。
「どうしたんだ？穂乃果」
「曲が届いてたんだよ！」
「「本当（か）!?」」
「うん！」
「じゃあ、朝練終わったら学校に行って聴こうぜ」
「「うん（はい）！」」」
朝練を切り上げ、学校に向かったが、朝練をぎりぎりまでやっていたせいか、遅刻ギリギリに学校に着いたため曲を聴くのは昼休みとなった。もう少しはやく朝練切り上げませんか？海未さん。
憂鬱な授業を４時間受け、やっと昼休みになった。さっそく屋上へ向かい
「よし、じゃあセットするよ」
「うん」「はい」「おう」
と俺たちは三者三様の返事をした。そして穂乃果がＣＤをセットし音楽が流れはじ

めた。
「この歌声、やっぱり」
穂乃果が俺に視線を向けてくる。
「そうだな」
俺たちが話してる間にも曲は流れてく。
「凄い、歌になってる」
「私たちの・・・・」
「私たちの・・・歌」
西木野って凄いやつなんだな。昨日歌詞を渡したのに、もう歌として完成させるなんて。
すると、パソコンのランキング表に動きがあった。
「票がはいった」
「票がはいったってことはお前たちはスクールアイドルとして1歩踏み出したことだ。これであとには引けなくなった。本気で練習して、ファーストライブを成功させるぞ！」
「「うん（はい）!!」」

翌日の朝、いつものように神田明神に向かい、俺たちは練習を始めた。ここで練習を始めてからことりと穂乃果の体力も増えてきた気がする。前までは海未よりも遅かったが、今ではほとんど同時にゴールするレベルだ。え?俺?俺はみんなより5秒ほど遅れてるよ…

まあ、練習参加よりもマネージャーとして働いてる方が多いから仕方ないよね。

「よし、ことりも穂乃果もだいぶタイムがあがったな」

「当たり前だよ!今、私は1番やる気いっぱいなんだから」

「私もだよ」

それからダンス練習へと入った。海未が掛け声をし、俺がことりと穂乃果を見る。

「ことり、左手」

「あっ、はい」

それから海未もダンスに加わり、3人のダンス練習がスタートする。

「穂乃果」

「タッチ!」

うん、見てる限りだと順調だ。もちろん、トップスクールアイドルと比べると目も当てられないが、始めたばかりにしてはとても上手い。まあ、俺のようなスクールアイドルオタクが見なければの話だが。

「いい感じです」
「うん！」
そのままミスというミスもなく、ダンス練習は終わった。
「ふぅー、終わった～」
穂乃果が壁に寄りかかりながら座り込む。
「ほらよ」
俺は穂乃果にジュースをわたし、ことりと海未にも渡した。
「ミスも減ってきて、いい感じに仕上がってきてると思うよ。ただ、本気でスクールアイドルをやるなら、このままだと遊んでるだけになる」
「「えっ!?」」
俺の発言に3人とも驚いてるようだ。
「なんでですか?」
「A―RISEなどのトップスクールアイドルと比べると明らかに動きにキレがないし、ダンスの動きをいちいち確認しながら練習してるからだよ。本番のライブではその1回が全てなんだから、練習の時からも踊り終わってから確認するべきだと思う。ライブ中に踊りながら確認できないからね。頭ではなく身体で覚えないと。じゃなきゃ、絵里先輩や他のみんなにも結局は遊びだったんだって思われちゃうよ」

「うん」
「でも、３人とも笑顔を絶やさないで踊ってられたのは凄いよかったよ。１週間前なんて、終盤には誰も笑顔を保ててなかったから。だから、もっと練習していけばきっと最高のライブを披露できるはずだよ！」
「「分かった（分かりました）よ！」」
　そして、そろそろ学校へ行こうと話してると、穂乃果が
「あっ、西木野さーん！まーきちゃーん!!」
　大声で西木野のことを呼んだ。西木野は顔を真っ赤にしながら、こっちに近づいてきて
「大声で呼ばないで！」
「ほえ？どうして？」
　でました！穂乃果さんお得意のすっとぼけ。まあ、これを素でやるから穂乃果らしいんだけど。
「恥ずかしいからよ！」
「そうだ！この曲３人で歌ってみたから聴いて！」
　おい、そのスルーはないだろ。穂乃果って、頭で思ったことをすぐに行動に移さないといけない呪いにでもかかってるのか？

「はぁ？なんで？」
「だって、真姫ちゃんが作ってくれた曲でしょ！」
「・・・だから私じゃないって何度も言ってるでしょ」
「まだ、言っているのですか」
　海未がツッコミをいれるが２人は聞いてないし、ことりは苦笑いで２人を見てるし。
俺は何度このやり取りを見ればいいんだろう・・・　仕方ない
「まあ、西木野も１度でいいから聴いてみてくれよ。そしたら穂乃果も納得するだろうし」
「仕方ないわね」
　そう言って西木野はイヤホンに手を伸ばした。
「結構うまく歌えたと思うんだぁ！いくよぉ～！」
　すると、ことりと海未が穂乃果のところへ駆け出し
「μ’ｓ！」
「ミュージック～」
「「スタート!!!」」
　俺だけハブるとか酷くない？

その後、西木野は歌を聴き終わり、「まだまだよ」と言い残して去っていった。でも、少しだけ嬉しそうな顔をしてたのは、俺の見間違いだろうか？

「んじゃ、俺たちもはやく学校行こうぜ」

３人は返事をし、着替えるために走っていった。俺はいつものように見張り役としてその場に座り込んだ。えっ？覗き？無理無理。それをしたら、海未に控えめに言って殺されるし、穂乃果には言いふらされて社会的に死ぬし、ことりには嫌われてしまい、一生話せなくなるかもしれない。そんなことになったら自殺するだろう。

そんなことを考えてると

「お待たせ～」

と３人がやってきた。それから学校へ向かった。やべ、生徒会の資料終わしてない…　今日は徹夜だな。その日は絵里先輩に呼び出され、生徒会の追加の資料を貰った。訂正しよう。１回の徹夜じゃ足りない…

ｓｉｄｅ花陽

壁に背を向けながら、周りを警戒しながら私は目的地に向かっていた。そして、ついに掲示板にたどり着いた。ここからが本番だ。ササッとチラシを手に取り、少しその場を離れる。すると、掲示板の目の前に西木野さんが通りかかった。西木野さんはチラシ

を少し見つめると、すぐに教室へ向かった。その後、私はチラシを見ながら明日のライブに行くかを考えてた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ライブが明日に迫ってきた。すなわち、ライブ前最後の1日だ。いつものように朝練を終え、俺たちは学校に着いた。学校の正門をくぐり、少し歩いてると

「ねえ、あの子達じゃない？」

後ろからそんな声が聞こえた。

「ん？」

ことりが立ち止まり、それに続いて穂乃果と海未も立ち止まる。

「あなた達ってスクールアイドルやっているっていう」

「あ、はい！μ' sってグループです！」

「μ' s？ああ、石鹸の」

「違う（違います）！」

やべ、海未と被った。

「あっ、そうそう。うちの妹がネットであなた達のことを見かけたって」

「ホントですか？」
　まあ、予想通りだな。ネットに載せたのは歌だけだが、スクールアイドルのサイトだし、このままいけば、多少の知名度はつくだろう。
「明日ライブやるんでしょ？」
「はい、放課後に！」
「どんな風にやるの!?ちょっと踊ってみてくれない？」
「えっ？こ、ここでですか？」
「ちょっとだけでいいから」
「いいでしょう。もし来てくれたらここで少しだけ見せちゃいますよ～？お客さんにだけ特別に～」
　穂乃果、それは怪しい店の店員に見えるぞ。
「お友達を連れてきていただけたら、さらにもう少し！」
　マジか!?ことりまで言い始めたぞ。
「ホントぉ！」
「行く行く」
　よし、言質はとったぞ。
「毎度ありぃ！」

まあ、こうなると恥ずかしがり屋の海未が心配ｄ「ビューン」…何か通り過ぎなかった？

「あれ？もう１人は？」

「海未ちゃん？」

本当に海未のこの恥ずかしがり屋どうすればいいの？

チラシ配り

屋上にて、俺たちは問題に直面していた。
「やっぱり無理です…」
体育座りしている海未が呟いてる。
「えぇー!?どうしたのー?海未ちゃんならできるよぉー!」
穂乃果が海未のことを励ます。今日1日でこの流れを何度見たことか。
「・・・できます」
「「え?」」
その予想外の答えを想像しておらず、俺たちは驚いた。
「歌もダンスもこれだけ練習してきましたし、でも人前で歌うことを想像すると…」
海未は確かに人見知りだったがまさかここまでとは…　明日ライブだけどどうするの?
「あー、そうゆうことね」
「緊張しちゃう?」
海未は無言で頷いた。まあ、そうだろう。いっそのこと観客を野菜だと思えばいいの

ではないか。
「そうだ!そういう時はお客さんを野菜だと思えってお母さんが言ってた」
「野菜・・・私に1人で歌えと」
　海未、どうやったらそういう発想に思い立った?
「はあ、困ったな～」
「でも、海未ちゃんが辛いんだったら何か考えないと・・・」
「そんなこと言ったって、やれることなんてひとつぐらいだろ」
「なんなの?それ?」
「チラシでも配って人に慣れさせるぐらいだな」
「それだ!」
「そういう訳だから、ことり、穂乃果で海未を立たせてくれ。そして、今からチラシを配りに行こう」
「「おー!」」
「え?あの・・・」
　はいはい。海未のことは無視しましょうね。
「あっ、俺今から行く場所あるから頼むわ」
「うん」

そうして、1度俺とことりたちは分かれて行動することになった。

それから俺は、アイドル研究部の部室に向かった。ことり達は秋葉原でチラシを配ると言っていたので、このあと秋葉原に向かうつもりだ。

「失礼しまーす」

「にっこにこにー！」

「またですか・・・」

「仕方ないじゃない！私と言ったらこれなんだから！」

「いや、挨拶くらいはちゃんと返しましょうよ」

「そうね。それで何か用？」

「いや、ただ部活に顔を出しに来ただけですよ」

「あ、そう」

「反応酷くないですか？」

「いつも通りよ」

「明日、ことり達のライブがあるんですけど来てくれますよね？」

「あんた、それ本気で言ってるの？」

「えっ？」

「今朝、あんたのグループの1人が恥ずかしがって逃げってたじゃない。それでライブなんて本当に出来るの？本気でライブが成功すると思ってるの？」
「バカですね。にこ先輩は」
「なんでよ!?」
「出来ると思ってるから誘ってるんじゃないですか」
「そんなにあの子達を信じてるの？」
「当たり前です。親を除けば1番付き合いが長いんですから。恥ずかしいなんて簡単に乗り越えてきますよ」
「そう」
「そういう訳でμ'sに入りませんか？」
「それはまだダメよ」
「はあ、まあ明日のライブには来てくださいね」
「興味が出たらね」
「はい。じゃあ、失礼しますね」
「また来なさいよ」
　そうして俺は部室をでて、秋葉原に向かうために昇降口に向かってると、ケータイが鳴った。見てみると、ことりからのメッセージで「学校でチラシを配る」とのことだっ

た。なので、正門で待ってると、どんよりした雰囲気の海未と海未を励ますことりと穂乃果がやってきた。
「どうだった？って聞くまでもないな」
「多分想像通りだと思うよ」
「それでここに戻ってきたと？」
「うん」
「もし俺の想像通りだと、海未が現実逃避したことになるんだが？」
「してたよ…」
やべえ、本当に成功するか不安になってきた。
「まあ、ここなら平気だろ」
「まあ、ここなら…」
うん、最初から秋葉原は難易度高すぎたよな。海未も他人にチラシを配るより、まだ顔を知ってる音ノ木坂生に配った方が気が楽だろう。
「じゃあ、始めるよ！μ’ｓファーストライブやりまーす！」
穂乃果がチラシを配りだし、ことりも穂乃果に続きチラシを配り始めた。
「じゃあ、海未も頑張ってこい」
海未はチラシを配ろうとしてるのだが、オロオロしており誰にも話しかけられずにい

た。そして
「お、お願いします」
海未が声をかけた。すごい、俺、感動して涙が・・・ さてと、海未はどんな子にチラシを渡したのかな?と思い見てみると・・・
にこ先輩がいた。マジかよ。海未のやつにこ先輩にチラシ渡しやがった。って、にこ先輩そのままスルーはひどくない?いや、海未、そのまま頑張ってにこ先輩にチラシを渡すんだ!
・・・無理でした。うん、なんか分かってた。海未も断られたら深追いしないし、今日の態度的ににこ先輩も貰ってくれなさそうだったから。そこに穂乃果が駆け寄ってきて
「ダメだよそんなんじゃ」
「穂乃果はお店の手伝いで慣れてるかもしれませんが、私は・・・」
うん、穂乃果はなんだかんだ言って和菓子屋の娘だしね。海未は恥ずかしがり屋だから、いきなり穂乃果のようにはいかないだろう。
「ことりちゃんだってちゃんとやってるよ?」
穂乃果が言ったのでことりの方を見ると
「お願いしまーす!μ’ｓファーストライブでーす!」

ゆるふわボイスで声を出していた。接客やったことないはずなのに、穂乃果と同じくらい堂々とチラシを配っていた。
「ほら、海未ちゃんも。それ配り終えるまでやめちゃダメだからね」
穂乃果が海未に恐ろしいことを言った。多分無理だと思う。
「えぇ!?無理です!」
「海未ちゃん、私が階段5往復できないって言った時、なんて言ったっけ?」
穂乃果が海未に言われたことを似たような形で返した。
「うぅ、分かりました!やりましょう!」
海未が吹っ切れたかのようにそう言うと
「よろしくお願いしまーす!μ's ファーストライブやりまーす!」
大声で言った。うん、何とかなったかな。すると
「あ、あの・・・」
穂乃果に声をかけた人がいた。見るとメガネをかけた女の子がいた。
「あ、あなたは誰?」
知らないのかーい!俺も知らないけど・・・
「こ、小泉花陽です・・・」
「そう。で、どうしたの?小泉さん?」

「え、あ・・・あの・・・ら、ライブ見に、行きます・・・」
やべえ、辛うじで聞き取れるぐらいの声だ。もしや、海未よりも人見知りなのか？もしくは臆病か？
「ほんとぉ？」
「来てくれるのぉ？」
うわ、びっくりした。いきなり現れるか。
「では、1枚2枚といわず、これを全部」
「海未ちゃーん」
海未・・・ それはないだろ。さっきの勢いはどこに行った？穂乃果も睨んでるぞ。
「分かってます・・・」
その後小泉も帰っていき、3人がチラシを配り終えるまで茂みで隠れてみてようと思った時だった。
「何してるの？」
「うぉ」
びっくりしながら振り向くと絵里先輩がいた。
「なんだ絵里先輩ですか」
「なんで驚いてるのよ？」

「いきなり声をかけられたからです。何か用ですか？」
「茂みに女子生徒を見ている怪しい男子生徒がいると連絡があってね。見に来たら義政がいたわけよ」
「へえー、うちの学校にも変態がいるんですね」
「ええ、今私の目の前にね」
「え？」
「いるじゃない。茂みに隠れて女子を見つめている変態な生徒会役員が」
「・・・もしかして俺ですか？」
「他に誰かいるの？」
「いませんけど、これは隠れてるのではなく見守っていると言うものでして」
「別に茂みじゃなくてもいいじゃない。なのになんで茂みなのかしら？」
「・・・そこに茂みがあったからと答えておきます」
「まあ、冗談なんだけどね」
「冗談かよ！」
「ただ、茂みから女子を覗いてる変態がいたから話しかけただけよ」
「今変態って言いましたよね？それより用がないんですか？」
「そうね。明日の新入生歓迎会の司会の準備出来てるの？」

「・・・Ｏｎｅ　ｍｏｒｅ　ｐｌｅａｓｅ?」
「なんで英語なの?司会の準備出来てるの?」
あはは、予行練習してから何もしてない・・・　殺されるんじゃね?
「えーと、予行練習はしました」
「その後は?」
「予行練習はしました!」
「だからその後は?」
「予行練習ｈ「やってないのね?」・・・はい・・・」
「はあ、今日の夜練習しなさい」
「わかりました!絵里先輩!」
「じゃあ、私は行くわね。ちゃんと練習してきなさいよ」
「はい!お疲れ様でした!」
絵里先輩がそのまま帰っていき、俺はことり達がいた方に目を向けた。・・・3人ともいない。
あれ?3人とも俺を置いて帰ったのかな?穂乃果や海未はともかく、ことりがそんなことするわけないよね。きっと教室にいるよ。その時電話がかかってきて
「ごめんね。義政くん。忘れちゃってた」

「え？」
「今、穂乃果ちゃんの家に向かってるから。先に帰ってね」
「ああ、わかった」
やばい。置いていかれてた。それよりも俺のこと忘れられてたって・・・　酷くない？

よし、家に帰る前に神田明神にお参り行くか。明日のライブが成功するようにお願いしないとな。

その日の夜、穂乃果からのメールで神田明神にお参りをしたときた。タイミング合わなすぎでしょ。せっかくならみんなでお参り行きたかったよ。

ファーストライブ

いよいよ新入生歓迎会の日だ。ちゃんと昨日の夜、司会の練習したよ。今、思ったけど司会に練習必要なくない？

いつもより15分ほど遅れて朝食を食べ、身支度を整え玄関に向かう。玄関を出るとちょうど、ことりがチャイムを押そうとしていた。

「おはよう、ことり」

「うん、おはよう義政くん」

「じゃあ、行くか」

「うん」

そのまま炭団坂に向かった。

「いよいよ今日だな」

「そうだね」

「まあ、いつも通りにやれば平気なはずだ」

「うん、海未ちゃんが心配だな。恥ずかしがって動けないかもしれないし」

「それを言ったら穂乃果の方が心配だな。張り切りすぎて空回りしそうだ」

「あはは・・・　そうだね～」
「まあ、本番まで時間もあるし平気だろ。それよりも新入生歓迎会の司会で噛まないかが心配だよ。俺は」
「えっ!?今日司会なの？」
「そうだけど、言ってなかった？」
「うん、初めて聞いた」
「マジか・・・」
「今日司会だったら、ことり達のこと手伝えるの？無理しない方が・・・」
「大丈夫だよ。新入生歓迎会が終わってからライブまで時間あるし、何よりμ'ｓのファーストライブをマネージャーとして見逃すはずないだろ」
「そうか・・・」
「緊張してるのか？」
「えっ？してないよ」
「嘘つくなよ。幼馴染なんだ、すぐに嘘だってわかるさ」
　俺の発言を聞いて
「・・・少しだけだよ」
　ことりはバツが悪そうな顔で言った。

「そうか・・・ でも、ことりなら大丈夫だ！」
「なんで、そんなことが言えるの？」
「いつもマイペースだから」
「えっ？だからって緊張しないわけじゃないんだよ」
「冗談だよ。ことりはいつも物怖じない性格だし、もしその緊張が続いてたら、俺が笑わせてやるから」
「笑わす？」
「ああ」
「どうやって？」
「それ言ったらつまらなくなるだろ」
「そうだね」
「しかも、ことり1人じゃなくて穂乃果と海未もいるんだから平気だろ」
「うん！」

いよいよ新入生歓迎会だ。とりあえず司会の位置にはいる。そろそろ時間か。

『え～、新入生の皆さんご入学おめでとうございます！本日、新入生歓迎会の進行は生徒会が行わせていただきます。私は司会の岡田義政です。心を込めて進行させていただきますのでよろしくお願いします』

よし、出だしは順調だ。

『開会の言葉。副会長よろしくお願いします』

俺が言うと、希先輩が壇上に登壇し

『これより新入生歓迎会を始めます』

開会の言葉を言った。

『まず始めに理事長より、ひとこと挨拶をいただきたいと思います。理事長よろしくお願いします』

そう言うと、ことりのお母さんが壇上に登壇し話し始めた。長い話だと思っていると３分くらいで話が終わったため、少し驚いてしまった。

『理事長ありがとうございました。続いて校長先生のお話です。校長先生よろしくお願いします』

・・・長っ！なんでそんなに話すんだよ！もう１０分ぐらい経ってるぞ。ほら、あそこのオレンジ色の髪の毛の１年生も眠ってるし。てか、その後ろの寝てるやつ穂乃果じゃね？このあとライブなのにどんだけメンタル強いんだよ。あっ、海未が穂乃果のこ

とを起こした。何か海未に言ってるけど起こされたことの愚痴かな？

それからさらに１０分ほど経過して、やっと校長の話が終わった。ことりのお母さんを見習えよ！

『校長先生ありがとうございました。続いて生徒会長から、新入生への歓迎の言葉です。生徒会長よろしくお願いします』

そう言うと絵里先輩は壇上に登壇し歓迎の言葉を言った。時間にして大体５分くらいだった。うん、まだ短くて良かったよ。さっきの校長と同じくらいだったら、みんな寝ちゃうからね。

『生徒会長ありがとうございました。続いて新入生代表挨拶。新入生代表、西木野真姫さんよろしくお願いします』

「はい」

西木野は返事をし、そのまま壇上に登壇した。・・・うん、長いな。もう１０分経過しそうだよ。

おっ、そろそろ終わりそうだな。西木野が礼をしたので

『西木野さん、ありがとうございました。では、閉会の言葉。生徒会長よろしくお願いします』

『これで、新入生歓迎会を終わります。各部活とも、体験入部を行っているので、興味があったらどんどん覗いてみてください』

よし、終わった～。これで一息つける。いや、つけないな。このあとライブあるし。宣伝しないとな。

あれ？絵里先輩が何か言ってる。なんだろう？まあ、いいか。俺がその場を離れようとすると、絵里先輩が走ってこっちに来て

『では、先生方からご退場ください』

マイクに向かって言った。…やべぇ、それを言うの完全に忘れてた。どうしよう…絶対に絵里先輩に怒られる。生徒のみんなも笑ってるし…

新入生歓迎会後、俺は絵里先輩に怒られていた。いや、しょうがないでしょ。もう頭の中はファーストライブのことでいっぱいだったんだから。てか、俺ことりの緊張ほぐすとか言っといてそれをやるのも忘れてたんだけど…

「ちょっと、聞いてるの？」

「あ、もちろんですよ」

「じゃあこのあと生徒会で片付けをするから」

「えっ!?マジですか？」

「何か問題でもあるの？」
「いや、μ' sのライブがあるんですが・・・」
「片付けが終わってからでも間に合うでしょ」
「はい・・・」
一応メールを送っておくか。
『３人ともごめん。俺片付けあるから、直前のライブ宣伝参加できない。本当にごめん。片付けすぐに終わして手伝いに行くから』
するとすぐに返信がきて
『分かったよ！頑張ってね』
ときた。それから片付けを始めた。
片付けを始めてから１０分くらい経った時
「今日のライブ、本当に成功すると思ってるの？」
絵里先輩が聞いてきた。
「うーん、絵里先輩の言う成功がどういうものかが分かりませんけど、俺は成功すると思いますよ」
「私の中の成功はパフォーマンスの出来よ」
「正直、絵里先輩が納得するパフォーマンスは無理ですよ。Ａ―ＲＩＳＥのパフォーマ

ンスも絵里先輩には遊んでるようにしか見えないんですよね？」
「そうよ」
「1度やってみればいいのに」
「何か言った？」
「いいえ。まあ、いい感じのライブになるので、是非来てくださいね」
「興味が出たらね」
「分かりました」
　その後片付けを終わし、教室へと向かった。
　教室に向かう途中穂乃果の声が聞こえたのでそちらの方に向かうと、ことりと穂乃果と海未がチラシを配っていたが誰も受け取ってなかった。
「3人とも変わるぞ」
「あっ、義政くん。片付け終わったの？」
「ああ。じゃあ3人ともライブの準備してこい」
「うん！あっ、そうだ。ヒデコ、フミ、ミカも手伝ってくれるって」
「お～、ヒフミトリオがか。これで百人力だな」
「ヒフミトリオって･･･ そうだ、義政くん。さっきの歓迎会の退場の言葉言わなかったのって私たちを笑わせてくれるため？おかげで緊張ほぐれたけど」

「えっ!?あ、あれは「ことりちゃんはやく行くよ」・・・」
「うん！穂乃果ちゃん。義政くん先に行ってるね」
「おう！着替えた頃らへんに行くからな」
うん、良かったよ。ただのミスで緊張ほぐせて。知らぬが仏ってこういうことなのかな？
その後、ヒフミトリオと合流して、俺たちは宣伝をしていた。ただ、振り向いてくれる人が全然いなかったが・・・ まあ、仕方ないのかもしれない。そもそもの生徒数が少ないのだから。それよりも3人とも平気かな？海未とか直前になって衣装の下にジャージとか着てるかも・・・ まあ流石にそれは無いか。そんなことを思ってた時、ヒデコが
「そろそろ穂乃果たちも着替えただろうから、行ってきてあげな。マネージャーさん」
「もうか？俺も手伝った方がいいんじゃないか？」
「大丈夫だよ！私たちに任せときな！」
「うん！しかも、岡田くん今、穂乃果たちと一緒にいたいんでしょ？」
「この中で1番穂乃果たちのことを心配してるもんね」
なんで俺がことりたちを心配してるが見抜かれてるの？まあ、その通りだけど
「じゃあ、一足先に講堂に向かってるから」
「はいよー」

そのまま俺はことりたちが着替えてるであろう控え室に向かった。
控え室につき、ドアをノックしようとすると中から
「いやぁぁあー！」
海未の叫び声が聞こえた。その後すぐに穂乃果の声が聞こえたので誰かに襲われたとかではないようだ。
「俺だけど、着替え終わったか？」
「あっ、義政くん。終わったよー」
「じゃあ入るぞ」
「いいよ～」
お許しも出て控え室に入るとそこにはそれぞれの衣装を着たことり、穂乃果、海未がいた。
「義政くん感想は？」
「義政？」
「義政くん大丈夫？」
うお！いきなりことりの顔が目の前に。やばい可愛すぎる。あれ？ことりの顔赤くなってない？
「うぅ～、いきなり可愛いなんて言わないでよぉ～」

「あれ？今俺口に出してた？」
「うん（ええ）」
あー、だからことりの顔が赤いのか。
「ことりちゃんばかりでなくて、私たちにも感想ないの？」
「２人とも可愛いよ。２人のイメージに合う衣装だよ」
「やったー」
「うぅ、恥ずかしいです…」
「でも、海未ちゃん今までで１番似合ってるんじゃない？」
「え、ええ…？」
海未さんや確認しながら答えるのはいいけど、もう少し自分に自信を持とうや…
「どう？こうして並んで立っちゃえば、恥ずかしくないでしょ？」
穂乃果をセンターに３人が並んだ。おぉ、これは写真に収めるものだな。この写真はどんなファンも手に入れることができない俺だけの特権だな。
「はい、確かにこうしていれば…」
「じゃあ最後にもう１度だけ練習しよう！」
「そうだね！」

そう言って、穂乃果、ことりが出ていき海未が鏡を見て、顔を赤くしながら出ていった。じゃあ俺も宣伝してきますか。

それから15分後いよいよライブの時間まで5分を切った。俺は宣伝を切り上げて講堂に向かった。講堂に入ると中にはヒフミトリオしかいなかった…

まだ大丈夫だ。きっと誰かが来てくれる。そんなことを考える余裕など俺の頭にはなかった。すぐに講堂から出ていき、宣伝を再開した。ライブまで3分しかない。このまま誰も来ないでことり、穂乃果、海未の挑戦を終わらすのだけは認められない。それだけは防がなければ。3人の傷つくところなんて見たくないから。気づいたら4時になっていた。まだ誰も講堂には入っていってない。そこに、走ってきてくれてる女の子がいた。昨日、穂乃果に声をかけてた子だ。確か小泉さんだったかな?

「ハアハア、ライブ、やってますか?」

「多分やってると思うけど」

俺が答えると一目散に講堂へ走っていった。そこに今日、歓迎会で寝ていた女子が来た。

「かよちん、あっ、薄い茶髪のショートカットの子が来ませんでしたか?」

「ああ、さっき講堂に走っていったよ」

「ありがとうございます」

そう言って、講堂に走っていった。良かった～。観客が来てくれて。観客が来てくれればまだライブは出来るだろう。俺も講堂に行くか。

講堂に入ると、ことり、穂乃果、海未が踊って歌っていた。曲名は「ＳＴＡＲＴ：ＤＡＳＨ!!」。μ'ｓ初めての曲にふさわしい曲名だ。３人ともとてもいい表情で歌って踊っている。確かにＡ―ＲＩＳＥなどに比べるとパフォーマンス面では劣る。でも、３人からはそれを補うものが感じられる。まだ小さなものだが、きっと大きくなり、μ'ｓの名を広げてくれる。そんな何かを感じられた。

気づくと周りには、にこ先輩や西木野がいた。そして曲が終わり

「「義政くん・・・」」

「良くやったよ。本当に良くやった。そして頑張ったな。ことり、穂乃果、海未」

３人ともとても疲れてるだろう。そしてそれ以上に悔しいだろう。あんなに練習したのに、ライブに来てくれたのはたったこれっぽっち。そんなんで悔しいはずがない。なのに涙を見せないのは、来てくれた観客のためだろうか？

そこに暗闇の中からでも、よく目立つ金髪が目印の絵里先輩が階段を降ってきた。

「生徒会長・・・」

「絵里先輩・・・」

「どうするつもり？」

その言葉の意味は誰にでも分かるだろう。観客は全然来ないライブ。これだけでも諦める理由には充分だ。さらに絵里先輩から見れば、全く認められないパフォーマンス。

すなわち、絵里先輩はこんなことはやめろと言いたいのだろう。しかし、穂乃果は言い切った。

「続けます！」

「なぜ？これ以上続けても、意味があるとは思えないけど」

「やりたいからです！」

穂乃果は即答した。

「私、もっと踊りたい、歌いたいって思ってます…　こんな気持ち、初めてなんです！やって良かったって、本気で思えたんです！このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない…　でも、私達がとにかく頑張って届けたい、今、私達がここにいる、この想いを!!」

ことりと海未も頷いてる。

「いつか私達、ここを満員にしてみせます！」

穂乃果ははっきりと言い切った。じゃあ、そのためにも俺ももっと協力してやらないとな。

「そう、なら精々悪あがきしなさい。これから活動を続けても、何も変わりはしないわ」
そう言って絵里先輩は立ち去っていった。今何を言っても意味が無いだろう。ただ
「絵里先輩待ってください」
「・・・何？」
「これだけは言わせてください。・・・最後の言葉取り消せよ！」
「なぜ？」
「ことりに穂乃果、海未の努力を否定されて、挙句の果てに今後のことまで否定するなんて、許せないからですよ。別に神様でもないのに未来なんて分かんないでしょ。だから取り消してください。お願いします！」
生まれて初めてだろう。他人のために土下座までしたのは。いや、他人ではないか。俺の1番大切な人達のためか。
「・・・ごめんなさい。最後の発言は取り消させてもらうわ。義政に土下座までさせたんだから、その分ぐらいは頑張る事ね」
そう言って絵里先輩は立ち去っていった。
俺が立ち上がるとことりが抱きついてきた。それに続いて、穂乃果と海未もだ。
「ありがとう義政くん」
穂乃果が言い、海未が

「かっこよかったです義政」
そしてことりが
「・・・だよ。義政くん」
ああ、これ萌え死ぬやつだ。そのまま俺は意識を失った。
このあと保健室に運ばれたのはまた別のお話。

アルパカ使いと覚えてない西木野家

「ほわぁぁ～、ふぇぇぇ～」
頂きました！ことりの脳トロボイス！これが俺に向けられていればどれだけ幸せか・・・ いや、それでは俺がこのアルパカのように、ことりから愛玩動物のように見られてしまうのか。ある意味嬉しいな。
「ことりちゃん最近毎日来るよねぇ。飽きないのかなぁ」
「急にハマったみたいです」
そう、ことりは毎日ここに来てアルパカと戯れているのだ。ああ、ことりのほっぺすりすり俺にもしてくれ。
「ねえチラシ配りに行くよぉ」
「あとちょっと～」
「でも、５人にしないと部として認めてもらえないんだぞ」
「あとちょっと～」
ああ、ことりはきっと動く気がないな。ことりの気が済むまで待つぐらいしか解決策が思い浮かばないな。

「可愛いかな？」
　その穂乃果の一言で茶色のアルパカが怒ったように声を上げた。
「可愛いよ～ひゃっ」
　白いアルパカのやつ、ことりのこと舐めやがった！許せねえ！しかも、ことりのことを倒しやがって。
「ことりちゃん、大丈夫？」
「どうすれば・・・　は!?ここは弓で」
「おぉー、いい判断だな。俺も手伝うぞ！」
「ダメだよ！」
　穂乃果が止めてきた。
「止めるな穂乃果、俺はこのアルパカを狩らなければ気が済まない」
「だからダメぇー！」
「穂乃果に止められても、俺はやらないといけないんだ。ことりのことを押し倒したんだから」
「いや、押し倒させたわけじゃ・・・」
「とりあえずこのアルパカは狩らなければ気が済まない」
「ことりちゃんお願い、義政くんを止めて」

「うん、義政くん落ち着いて」
「うっ」
「お～、この調子だよ」
「義政くん、お願いっ！落ち着いて」
「・・・」
「おぉ～、完全に落ち着いた」
「うわ、なんでこのアルパカ暴れてるんだ？」
「それは・・・」
「はあ、それで俺が怒ってアルパカを狩ろうとしてたと」
「うん、ことりちゃんに止めてもらったけど」
「じゃあ、このアルパカはどうするんだ？」
「それは・・・ 考えよう！」
「ノーアイデアなのね・・・」
アルパカをどうするかを考えていると、俺たちとは服装の違う女子がやってきて
「よ～しよし大丈夫」
うお、すげぇ。たったそれだけでアルパカを静かにするなんて。アルパカ使いじゃないか。

「おぉ～アルパカ使い！」
　何か穂乃果と感想被ってるし・・・
「私飼育委員なので・・・」
　声小さいな。人見知りかな？
「ライブに来てくれた花陽ちゃんじゃない！」
「は、はい」
「ねぇあなた！スクールアイドルやってみない？」
「穂乃果ちゃんいきなりすぎ・・・」
「君は光っている。大丈夫っ、悪いようにはしないから！」
　完全に悪いようにするやつが言うセリフだよね？
「おーい穂乃果、完全にセリフが悪役なんですが・・・」
「もぉ～、勧誘してるんだから義政くんは黙っててよ」
　穂乃果さん、扱いひどくないですか？
「あの・・・ 西木野さんが・・・」
「ごめん、もう1回いい？」
「西木野さんがいいと思います・・・ 西木野・・・真姫ちゃん」
「だよねだよね！私も大好きなんだ。あの子の歌声」

「だったらスカウトに行けばいいじゃないですか」
「もう行ったよ～、でも嫌だってさ」
「そうでしたか」
　すると
「か～よちーん、早くしないと授業始まるよ～」
「今行くよ、それじゃあ失礼します」
　と小泉は去っていった。俺らも授業なので教室に戻っていった。

　放課後、俺は悩んでいた。μ' sの今後についてだ。今のままでもスクールアイドルとしてはやっていけるだろう。だが、廃校を阻止するためにやるのなら、まだ全然足りてない。ことりたちも頑張ってはいるのでいつかは阻止出来るかもしれないが、時間がないのだ。この限られた時間で廃校を阻止するならば、圧倒的歌唱力を持つ人やダンスについての知識がある人が欲しいところだ。うん、ちょうどいい感じの人達がいるんだけどね…　今のままじゃ入ってくれなさそうだし。
　そんなことを考えていると気づけば掲示板のある廊下にいた。ちょうどμ' sのポスターを貼った場所に誰かがいるようだ。その人が誰なのかは遠目からでもすぐに分かった。西木野だ。チラシを持ち去って逃げるように昇降口の方へとかけていった。

なんだ。西木野も少しはスクールアイドルに興味を持ってくれたのか。そう思いながら、ポスターの方に近寄っていくと、生徒手帳が落ちてた。拾うと、なんとまあ西木野のものだったのである。どうしようかと考えていると、そこに小泉がやってきた。
「あの・・・」
「ああ、小泉か」
「何してるんですか？」
「いや、西木野の生徒手帳を拾ってさ。どうするか迷ってたんだ」
「なら、私が届けましょうか？」
「うーん、拾ったのは俺だしな。小泉に任せるのもなー・・・」
「い、一緒に、と、届けるのは・・・？」
「いい考えだな。そうしよう」
「はい」
そうなったため、ことりたちにメールを送り、俺と小泉で西木野の家に生徒手帳を届けるようになった。そのまま西木野の家に向かい、着いた。
「・・・すごいなぁ」
小泉は感想を洩らしたが、俺はそんなことを考えなれなかった。なぜなら俺はこの家に来たことがある気がしたからだ。しかし、俺が西木野の家に来たことなどあるはずが

ない。そんなことがあればこの家のことを忘れないはずだからだ。
　だいぶボッーとしてたのか
「大丈夫ですか?」
　小泉が聞いてきた。少し遅れて
「ああ、平気だよ。さっさと生徒手帳届けようぜ」
　と誤魔化し西木野の家のチャイムを鳴らした。
「は〜い」
　と女の人が出てきた。若くね? 姉とかかな?
「何か用?」
「あっ、えっと」
　小泉が困ってる。助け舟出さないとな。
「西木野さんの生徒手帳を拾ったので届けに来たんです」
「ありがとね。待っててね。あの子今病院の方に顔を出してるから」
「病院ですか?」
「ええ、あの子、うちの病院を継ぐことになってるの」
　・・・ごめん。今病院を継ぐとか聞こえたんですが・・・　俺たちの前にいる西木野姉（仮称）さんは継がないのか?

「えっと、お姉さんは病院を継がないのですか？」
「まあ、嬉しいこと言ってくれるのね」
「「嬉しいこと？」」
　どうやら小泉も俺と同じ疑問を思ってたらしい。
「私、真姫の母です」
「「・・・・・・・えぇぇぇーーー!!!」」
　うん、恐らくこれから生きていく人生でも絶対に経験しない驚きだろう。だって見るからに若すぎるんだもん。パッと見２０代にしか見えないよ。
「それにしても義政くん私のこと覚えてなかったの？」
「・・・はっ？ど、どういうことですか？」
「え？本当に覚えてないの？小さい頃遊びに来てたじゃない」
　あれ～？なんの話だろう？全く分からないな～？
「本当ですか？」
「本当よ。ミサちゃんに聞いてみなさい」
「分かりました」
　口ではそうは言ったが、正直何も分かってなかった。
　それから少しして

「ただいま。誰か来てるの？」
　と西木野が帰ってきた。うん、俺にとってはそれどころじゃないけどね。小泉が
「こ、こんにちは」
　挨拶をしたが俺はそれよりもなんで西木野の家に遊びに来ていた記憶がないのかを考えていた。それから西木野と小泉で話をしていて、たまに俺にも話が来ていたようだが全くと言っていいほど覚えてなく、気づいたら外にいた。
「あれ？」
「どうしたんですか？」
「今どこに向かってるの？」
「家に帰ってるんですよ」
「そうか」
「ちょうどそこの和菓子屋でお土産を買うという話になってたのですが・・・」
　へー、和菓子屋か。穂むらのまんじゅうを食べたいな。
「ああ、大丈夫だよ」
　と返事をし、小泉が指差した方を見ると・・・　あれ？穂むらじゃね？てか小泉が穂むらに入っちゃったよ。
「いらっしゃ～い、って花陽ちゃん、それに義政くんも」

「穂乃果が店番を手伝ってるだと・・・　これは夢か？うん、夢だ」
　そう言って俺は自分の頬をつねり始めた。
「勝手に自己完結しないでよ！そうだ。義政くんμ-　sの活動あるから上がってよ。もう用事も終わったんでしょ？花陽ちゃんも」
　特に考えずに返事をし、ボッーとしながら階段を登った。もう少し気を張ってれば、この後起こる地獄はマシになってただろう。
　２階につき、小泉が手前の扉を開けてしまった。俺が気づいたのは完全に扉を開けた後で、部屋の中には雪穂がバスタオル姿で何かをやっていた。うん、何かをだ。詳しくは俺の口からは言えない。勢いよく扉を閉めて
「穂乃果の部屋はこっちだ」
　と穂乃果の部屋の扉を開けると
「みんな～ありがと～！ラブアローシュート！」
　海未が妄想をしていた。おっ、海未がこっちを見た。一瞬顔が赤くなり、怒気を纏った。あ、これ俺死ぬやつだ。
　海未が部屋を出てくると同時に、雪穂も部屋から出てきて
「見ました？」
「見たよね？義政くん」

訂正死ぬだけでは済まないかもしれない。

まきりんぱな

目が覚めると穂乃果の部屋にいた。そこまではまだいい。周りを見渡すと、何故かことりと穂乃果と海未が俺とは真逆の場所でこっちを見ていた。穂乃果と海未は冷たい目で、ことりは泣きながらだ。

「あの・・・　皆さん？」

「何ですか？覗き魔さん」

・・・ああ、あれか。海未の妄想タイム中に扉を開けたことを恨んでるのか。あれ？そしたらなんで穂乃果まで俺のこと冷たい目で見ていて、ことりは泣いてるんだ？

「いや、海未。あのことは謝るから許してくれよ」

「私が許せるはずないでしょう」

「お願いします海未様。許してください」

「何も覚えてないのですか？」

「いえ、「ラブアローシュート」h「それ以上言わないでください」・・・はい」

「では雪穂のことは？」

「いや、なんで雪穂？」

「それは・・・」
「それは?」
「義政が雪穂のb「なんで雪穂ちゃんのバスタオル姿を見たの?」・・・ことりの言う通りです」
「は?」
いや、ちょっと待て。俺が雪穂のバスタオル姿を見た?そんな覚えないぞ・・・

あっ、あったわ。小泉が雪穂の部屋のドアを開けた時か。うん、確かに見た気がする。
「えっと、もしかして小泉が雪穂の部屋のドアを開けた時のことか?」
するとここまで黙ってた穂乃果が
「そうだよ!義政くんなら止められたんじゃないの?もしくはわざと止めなかったの?」
「いや、待て待て待て。止められなかったんだよ。考え事してたから。信じてくれ」
「嘘つかないでよ」
ことりが信じてくれないだと・・・ いつもなら信じてくれるはずなのに
「いや、ことり。嘘じゃないよ」
「嘘だよ」

やばいやばいやばいやばい。ガチでことりに信じられてない。てか、それ通り越して嫌われたまである。そんなことになってたら生きていけない。死ぬしかない。
「ことり・・・ 信じてくれ」
「義政くん、嘘はやめて。嘘つく義政くんなんて大嫌い」
やばい泣けてきた。てか、完全にことりに信じられてない。死にたくなってきた。ああ、死ねばいいのか。ことりに嫌われてしまった世界じゃ生きてる価値がないし。

そうだ。この後μ' sがどうするべきかメモとか書いとかないとな。一応マネージャーだし。
「義政？何してるのですか？」
「いや、これからμ' sがどうしていくべきかを書いてるだけ」
「何故ですか？」
「一応μ' sのマネージャーな訳だし。俺が死んでからも活動できるようにと」
「「えっ？」」
「ちょっ、義政くんどういうこと？」
「どういうことって、分からないのか穂乃果？」
「分からないよ」

「いや、ことりに嫌われた世界で生きていく価値なんて微塵もないから自殺するんだよ」
「・・・ほ、穂乃果、どうするのですか？」
「どうするも何もドッキリでしたって言うしかないでしょ。ことりちゃん・・・？」
「グス・・・ 嫌だよ・・・」
「どうするのですか？ことりまで泣き出してしまいましたよ」
「義政くん、これドッキリだよ」
　あれ？穂乃果が何か言ってるけどそんなのどうでもいいや。この世界に生きてる価値ないし。
「ダメだよぉ～、私の声聞こえてないみたい」
「こうなったらことりから説得してもらうしかないでしょう。ことり、1度泣き止んで義政にこれがドッキリだったと伝えてください」
「うん・・・ 義政くんこれドッキリだよ。私義政くんのこと嫌いになったりしないよ」
「・・・・・・マジ？」
「うん」
「・・・よかったぁ～。俺、ことりに嫌われたらガチで死ぬとこだった。本当にドッキリで良かったよ。じゃあ、俺がわざと覗いてないって知っててやったのか？」
「うん、花陽ちゃんから聞いて、義政くんは悪いことはしてないことは分かってたから」

「そうか。ところでこの悪趣味なドッキリ考えたのは誰だ？」
「・・・私です」
「マジ!?海未が？」
「ええ、私としては見られたくないものを見られたので少し仕返しをと」
「はぁ」
「えっ？何か言い返したりはしないのですか？」
「言い返すも何も、元はと言えば何も考えずにドアを開けた俺が悪いし。まあ、確かにあのドッキリは心臓に悪いからやめて欲しかったけど」
「すみません、もう2度このようなことはしないので許してください」
「うん、俺も海未がいる部屋には必ずノックするようにするよ」
　その後は、雪穂に謝りに行き、家へと帰ることになった。
　帰り道、ことりが突然
「でも、義政くんが考え事をしてても、花陽ちゃんが部屋を間違えそうなら気づくよね？どうして気づけなかったの？」
「えっ？考え事に集中してたからだろ」
「うん、義政くんがそう言うならいいけど・・・」
「じゃあ、これでこの話は終わりだな」

「でも、義政くんその考え事についてまだ考えてるでしょ?もし出来たら、私に相談してね?きっと力になれるから」
うお、こう来るか。確かにことりに相談したら力になってくれるだろう。でも、この問題のことをことりに話してもあまり意味もない気がする。んじゃここは
「いや、大丈夫だよ。この問題は俺のことだから、ことりに話しても解決しないだろうし。その気持ちだけで充分さ」
「・・・ならいいけど。でも、1人で考えてても答えが出なかったら相談してね」
「分かった」

家に着くと同時に、俺は母さんに
「ただいま、突然だけど西木野さんって知ってる?」
と尋ねた。すると母さんは、運んでいた皿を落としてしまった。あれ?俺の質問のせい?
「きゅ、急にどうしたの?」
なんでこんなに慌ててんだろう?てか、皿どうにかしないと・・・ 俺は割れた皿を片付けながら、今日あったことを話した。
「そうだったんだ。てっきり真姫ちゃんのこと思い出せたのかと思っちゃった」

「思い出せた？」
「うん。でも、その様子じゃ覚えてもないのね」
　ナニソレイミワカンナイ。てか、俺って西木野と関わりあったの？
「えっと、教えてくださいませんか？お母様」
「何よそれ」
「いや、敬語で頼めば教えてくれるかなって思っただけです」
「まあ、いいけど。アンタがよく真姫ちゃんと遊んでたの覚えてる？」
「いや」
「じゃあ最初からか」
　そう言うと母さんは、昔のことを話し出した。

　母さんが言うには、母さんと西木野の母親は中学校からの親友らしく、社会人になってからも付き合いは続いてたらしい。そしてお互い子どもも生まれひと段落ついたので、子どもを連れて会うことになったようだ。そこで俺は初めて西木野にあったのだという。さらに、西木野とは通っていた幼稚園も一緒だったらしく、俺はよく西木野家に遊びに行ってたのだという。そして俺が小学生になり、そこから俺と西木野との関係は

徐々に薄くなっていったのだという。ちなみに母親同士でよくあってたらしいが。てか、そん時俺のこと連れてけば良かったじゃん。
「あの時は良かったわ。義政ったら真姫ちゃんと将来結婚するんだとか言ってたのだから」
「いや、覚えてないし。しかもまだ子どもの時のことだろ」
「まあ、そうなんだけど。真姫ちゃんは覚えてるかもね」
「それは無いな。覚えてたら話しかけてきたりするだろ」
「そうね」
衝撃の事実が発覚したな。俺と西木野が昔会っていて、しょっちゅう遊んでたなんて正直信じられないな。まあ、こんなこと気にしてもあまり意味ないけど。なんでこんなことで悩んでたのか・・・

翌日、いつものように学校へ行きいつものように時間が過ぎていった。そして放課後これまたいつものように屋上で練習をしていた。そんな時
「あーあーあーあーあー」
声が聞こえてきた。それは少しずつだが、もう1人の声が混ざってきているようだった。声の聞こえる中庭を見てみると、西木野と小泉が発声練習をしていた。そこにオレ

ンジ髪の小泉を追いかけてファーストライブに来てくれた子がやってきた。そのままオレンジ髪の子と西木野が何か言い争い始めた。いや、何してるの？すると、２人して小泉の腕をつかみどこかに連行していった。小泉、強く生きろ。

　そんなことを思ってるとドアが開き、西木野とオレンジ髪の子に連れられた小泉がやってきた。

　西木野とオレンジ髪の子、星空の説明を聞いて

「つまりμ’ｓに入るってこと？」

　穂乃果が結論を言った。まあ、そういうことだけど小泉本人が何も言ってないな。

「かよちんはずっとアイドルに興味があったんです！」

「それはどうでも良くてこの子凄い歌唱力あるんです！」

「どうでもいいってどういうこと！」

「そのまんまよ！」

「おーい、ここまできて言い争うのか？」

「うっ…」

「私は…」

「もういつまで迷ってるの！かよちん絶対やってみた方がいいよ！」

「それには賛成！やってみたい気持ちがあるならやった方がいいわ！」
「凛は知ってるよ、かよちんがアイドルになりたいって思ってることを」
「凛ちゃん・・・　西木野さん・・・」
　なんでだろう。目から涙が出てきてるよ。俺ってこんなに涙脆いっけ？
「頑張って！凛がずっとついててあげるよ！」
「私も少しは応援してあげるって言ったでしょ？」
「えっと・・・　私・・・・・　私小泉花陽といいます。１年生で背が小さくて声も小さくて人見知りで・・・　得意なものは何もありません。でも！アイドルが好きという気持ちは誰にも負けないつもりです！だから・・・　私をμ’ｓに入れてください！」
「こちらこそよろしくね花陽ちゃん！」
　小泉が自分のやりたいことを言えたからか、西木野と星空は安心したように息をついた。この２人も誘えばいいのにと思った時
「それで２人はどうするの？」
　どうやら、ことりと海未も同じ結論にたどり着いたようだ。
「「どうするって？ええ!?」」
「まだまだメンバーは募集中ですよ」
　ことりと海未が２人に手を差し出した。２人は困惑してるようだったので

「やってみたい気持ちがあるならやった方がいいんじゃないのか？」
そしてμ's のメンバーは6人になった。

翌日の早朝
「朝練ってこんな早くからやるの～…」
「当然でしょ！」
文句を言いながら階段を上がってくる星空、当然と言い張りながら上がってくる西木野がいた。この2人は仲がいいのか悪いのか分かんねえな。
「おはよう、西木野、星空」
「おはようございます」
「おはようございます。かよちんもおはよっ～」
星空に挨拶され小泉が振り向くとそこにはメガネをはずしてコンタクトにした小泉がいた。
「可愛いよ！すっごく！」
「悪くないわね」
「ありがとう凛ちゃん、西木野さん」
「ねえ、メガネやめたついでに名前で呼んでよ…　私も名前で呼ぶから…　凛、花陽」

お～、ツンツンしてる西木野が遂にデレた。小泉と星空も嬉しそうな顔をしてる。
「うん、真姫ちゃん！」
「真姫ちゃん真姫ちゃん真姫ちゃ～ん！」
「そんなに連続で呼ばなくてもいいんじゃね？」
「あっ、義政先輩もですからね」
「私も」
「凛のこともにゃ～」
俺も名前で呼ぶの？まあ、いいけど・・・
「分かったよ。真姫、花陽、凛」

うん、それは別としてμ’ｓの掲示板に
「アイドルを語るなんて１０年早い
(((┏━ｙ（、Ａ、）ｙ━～ケッ!!」
って書き込んだの誰？

にこ先輩勧誘活動

μ'sメンバーも6人になり、このままいい感じに進めると思っていたが唯一上手くいかないことがあった。それは練習だ。別に練習の内容が上手くいかないわけではない。むしろ上手くいってるレベルだ。問題は梅雨になったので練習ができない事だ。しかも今朝、穂乃果達は朝練中に

「解散しなさい」

とまで言われてしまう始末だ。ファンが増えてくれれば、その分アンチも増えてくるので仕方ないといえば仕方ないのかもしれない。まあ、練習に乗り込んできて、解散しろとまで言うのは害悪だが・・・

「おーい、義政くん！義政くん！」

「うお、なんだ？」

「今の話聞いてた？」

なんの話なのかがわかんねえ・・・ でも、そんなこと言ったら怒られるだけじゃ済まない気がする。どうしよう？

「・・・」

「義政？」
　あっ、海未さんが若干怒ってます。弓とかで打ち抜かれなければそれでいいか。
「ごめんなさい。考え事をしてて話を聞いてませんでした。グォ！」
　正拳突きが飛んできた。酷くないですか？
「雨のせいで練習ができないのでどうしたらいいという話です」
「？」
「何をきょとんとしているのですか？」
「いや、部室貰えばいいじゃんと思って」
「何言ってるの義政くん。まず部として認めてもらうためには5人必要なんだよ。今は私と海未ちゃんとことりちゃん、義政くん。それに真姫ちゃん、凛ちゃん、花陽ちゃんしかいないんだから・・・　あれ？もしかしてもう5人以上いる？」
「いるだろ。てか、部活申請もしてないのか？」
「・・・忘れてた」
　なんで忘れてるんだよとツッコミを入れようとしたら
「忘れてたんかーい！」
　と隣の席からツッコミが入ってきた。誰だと思って、隣の席を見てみると、変装してるにこ先輩がいた。うん、無視しよう。にこ先輩もどっか向いてるし。

そんなことを思っていたら「ピコン」とメールがきた。見てみると
『今日生徒会なんだけどどこにいるの？早く来なさい！』
と絵里先輩からお怒りのメールがきていた。
「どうしたの？」
「なんか生徒会あったみたい。というわけで学校に至急戻ります」
「あ、頑張ってね」
「おう」
そういう訳で俺は急ぎ学校へと向かった。

生徒会室に入った瞬間に
「本日は生徒会のことを忘れてしまい、誠に申し訳ございませんでした！」
謝った。もし生徒会室にいたのが希先輩だけなら許してくれただろう。だけど、絵里先輩もいるから無理だろうな。そう思い顔を上げると
「謝るのは後でいいから早く席につきなさい」
絵里先輩が言ってきた。おかしい。なんでこんなに優しいの？まあ、そんなことを口に出したらやばいので
「分かりました」

そう言って席についた。
「では、これから生徒会会議を始めます」
「初めに目安箱に入っていた生徒からの意見についてです」
あ～、確かにそんなのもあったな。
「では、初めに・・・」
それから、１５分ほど目安箱についての話は続いた。まあ、問題としては目安箱に入ってた意見の大半がμ’ｓが関わっていたことには驚きだったが。１番ひどかったのは
「今、スクールアイドルをやっているのですが、人気になった時の想像が止まりません。最近では友達の家でも想像してしまいます。どうしたらいいですか？
園田　海未」
というものだ。何でそんなことを本名で生徒会産の目安箱に入れるんだよ。絵里先輩も呆れて
「これは義政がどうにかしなさいね」
だよ！しかも苦笑いしながら。今、絵里先輩の頭の中では海未がかわいそうな子になってるよ。

それは置いといて今は廃校問題をどうするか話し合っていた。まあ、一向に話は進んでないが・・・なぜかと言うと絵里先輩が

「廃校を無くすためには学校の良さを宣伝するしかないと思うの」

と言ったからである。正直、この学校に良さという良さがあるのかと聞かれたら俺は答えられないだろう。今の絵里先輩が言っている良さはだ。強いていえば古くからあると言うだけだ。さらに生徒会会議の最中に穂乃果たちが、生徒会室に来たので絵里先輩と希先輩が廊下で応対してたけど何だったんだろう?まあ、話はすぐに終わったらしいけど。そのふたつが原因で話が進まず、時計は6時を過ぎてしまった。

「仕方ないわね。次の生徒会までに何か考えてきてね」

となり、生徒会会議は終わった。

翌日教室で穂乃果が

「今日の放課後アイドル研究部の部室に行くよ!」

俺に言ってきた。

「なぜ?」

「昨日の生徒会会議の途中で私が生徒会室に行った時、同じような部活が学校に2個あるのはダメだとかで・・・ その後アイドル研究部の部室に行ったんだけど先輩に逃げられちゃって・・・」
「それで？」
「帰り道ににこ先輩がこっち見てたんだよ。それでもしかしたら海未ちゃんの時と同じなんじゃないかと思って」
「海未と？・・・あー、あの時か！」
「うん！」
「いい作戦だと思うけど、俺が兼部してるのは知ってるよな？」
「知ってるけどそれが何か関係あるの？まさか、今日の放課後部活？」
「いや、部活は部活だけど。俺元々アイドル研究部の部員なんだよね」
「「えっーー!?」」
「いや、なんでそんなに驚くの？」
「だって1度もそんなこと言ってなかったよ」
「マジ？」
「うん」
「それでその作戦実行するのか？」

「もちろん！」
「それなら俺は部活に遅れて行くよ。その方がいいと思うし」
「何言ってるの？義政くんはμ’ｓのメンバーなんだよ。なのにその場にいないのはダメだよ」
「分かったよ」
　そうして放課後、俺たちは足早にアイドル研究部の部室に行った。
「そろそろにこ先輩が来ると思うけど、準備は出来てるか？って、聞くまでもないみたいだな」
　俺がみんなを見るとみんなとてもいい顔をしていた。その時ドアが開きにこ先輩が入ってきた。そのまま電気をつけた時に
「「「「「「お疲れ様でーす」」」」」」
　と声をかけた。
「ちょっ、義政はともかくなんでここにいるのよ!?」
　そんなことはお構い無しに穂乃果が
「お茶です、部長！」
「部長!?」
「今年の予算表です、部長！」

「はあ？」
「次の曲の相談をしたいのですが部長！」
「さ、参考までに部長のおすすめ貸して」
　なんか敬語じゃない言葉が聞こえた気がするけど気にしない気にしない。
「こんなことで押し切れると思ってるの？」
「押し切る？私はただ、相談しているだけです」
　にこ先輩が呆けた顔で穂乃果の方に振り向いた。穂乃果は続けて
「音ノ木坂アイドル研究部所属の７人が歌う、次の曲を」
　と言った。にこ先輩がこちらの方を振り向いたので
「一応言っておきますが、俺は部員ですけど、アイドルじゃないんで歌いませんよ」
　そう言うとにこ先輩は穂乃果たちの方に振り向き一呼吸おいて
「・・・厳しいわよ」
「分かってます。アイドルへの道が厳しいことぐらい」
「分かってない！あんたはあまあま。あんたも、あんたも。あんた達も。いい、アイドルっていうのは、笑顔を見せる仕事じゃない！笑顔にさせる仕事なの!!それをよーく自覚しなさい」
　ちょっ、今とんでもないこと言ったよね。にこ先輩のアイドルへの思いだろうけど、

マジで名言すぎるよ。「アイドルっていうのは、笑顔を見せる仕事じゃない！笑顔にさせる仕事なの!!」か。今日から俺の教訓にしよう。

屋上にて

「いい！やると決めた以上ちゃんと魂込めてアイドルになり切ってもらうわよ！分かった？」

「「「「「はい！」」」」」

「声が小さい！」

「「「「「はい!!」」」」」

にこ先輩嬉しいのは分かるけど張り切りすぎじゃね？いや、むしろ足りないくらいか。約2年間もやりたいことをできなかったんだから。その分を今からでも楽しんでもらわないとな。でも

「「「「「にっこにこにー」」」」」

それはみんなでやる事じゃなくね？にこ先輩のアイデンティティみたいなものでしょ？てか、にこ先輩泣かないでよ。また、無理だろうけど。にこ先輩の事情を知ってる俺も泣きそうだから。もちろん、嬉し涙だけどね。

リーダー？

現在、アイドル研究部部室は異様な雰囲気に包まれていた。このような雰囲気になった理由は生徒会の取材での希先輩の

「穂乃果ちゃんってどうしてμ' sのリーダーなん？」

からだ。そして現在にこ先輩の

「リーダーには誰がふさわしいか。だいたい私が部長についた時点で1度考え直すだったのよ」

から今のこの状況が生まれた。まあ、俺からしたらμ' sにとってのリーダーは穂乃果だけど、この状況になってしまった以上みんなで話し合うべきだろう。それよりも取材中にことりのバックに入ってて、一瞬だけ見えた写真の方が気になるのだが・・・ まあ、ことりが誰にも見せたがらなかったんだから勝手に見たりはしないけどな。

「それはそうね」

真姫がにこ先輩の言ったことに同意した。じゃあ俺も

「まあ、新しいリーダーを決めるんだったら早くした方がいいんじゃないか？ＰＶの撮影もあるんだし」

「ＰＶ?」
あれ?海未が顔をかしげてる。もしやＰＶが分からないのか?
「リーダーが変われば、必然的にセンターだって変わるでしょ。次のＰＶは新リーダーがセンター」
「そうね」
「でも、誰が?」
花陽の質問を待っていたかのようににこ先輩が立ち上がり、後ろにあったホワイトボードを回した。そして
「リーダーとは!まず第一に、誰よりも熱い情熱を持って、みんなを引っ張っていける事!次に、精神的支柱になれるだけの懐の大きさを持っている事!そして何より!メンバーから尊敬される存在である事!この条件を全て備えたメンバーとなると」
「海未先輩かにゃ?」
「なんでやねーん!!」
いや、仕方ないと思うけど･･･ だってにこ先輩、先輩として見られてないと思うから。いや、先輩としては認識されてるけどリーダーには向いてないと思われてるが正しいか?だって、尊敬されてる感じがしないし･･･ まあ、情熱は誰よりも持ってそうだけど。
それに比べて海未は、可愛い笑顔の練習をするくらいの情熱は持ってるし、懐も深そ

うだし、尊敬もされてるからな。にこ先輩の言ってたリーダーの定義には完全にあってるな。
「私ですか!?」
「いいかも。海未ちゃん向いてそうだよ!」
・・・それでいいんですか、穂乃果さん？μ' sの発起人だよね？
「いいのですか？」
「え、何が？」
「リーダーの座を奪われようとしているのですよ？」
「それが？」
「何も感じないのですか？」
「だって、みんなでμ' sやってくってのは一緒でしょ？」
「確かに一緒だけどセンt」
「でもセンターじゃなくなるかもですよ!」
うん、ありがとう花陽。無駄に声を出さないですんだ。
「いいんじゃない？」
「ええっ!?」
「だってみんなで歌うことには変わりないでしょ？」

「そんなことでいいのか?」
「うん、じゃあリーダーは海未ちゃんで決まり～」
　まあ、穂乃果らしいと言ったら穂乃果らしいな。でも
「ま、待ってください…　私には無理です…　恥ずかしい…」
　うん、そうなると思ってた。
「面倒な人」
　あの～真姫さん。一応、海未は先輩なんだから。もう少し優しく言おうね。
「じゃあ、ことり先輩?」
「私?」
「副リーダーって感じだね」
　まあ、ことりは副リーダーかな。みんなのことを影から支える感じだし。
「じゃあ、義政先輩は?」
「おい、真姫。これはμ' sのリーダーを話し合ってるのであって、女子でもない俺は入れないで欲しいのだが…」
「分かったわ」
　ふう、良かった～。てか、なんで俺を推薦したんだよ。
「でも、1年生でリーダーという訳にはいかないし」

「仕方ないわね～」
「やっぱり穂乃果ちゃんがいいと思うけど～」
「仕方ないわね～」
「私は海未先輩を説得した方がいいと思うけど」
「仕方ないわね～！」
「投票がいいんじゃないかなぁ？」
　にこ先輩可愛そうじゃね？あれ、なんか取り出した。
『し、か、た、ないわね～!!』
　うるせえ。てか、メガホンどこから出したの？さっきまで机の下になかったよね？
「で、どうするにゃ？」
「どうしよう？」
　にこ先輩どんまい。

　その後にこ先輩の提案で俺たちはカラオケに来ていた。にこ先輩曰く、「歌とダンスで決着をつける」ようだ。そして
「はあ、恥ずかしかった…」

　最後に海未が歌い終えた。正直な感想をいうとみんな歌うまくね?まだ海未の結果は出てないけど確実に９０は超えたと思うし。俺の予想通り結果は
『９３点』
　だった。
「これで全員９０点台だよ。みんな毎日レッスンしてるもんね」
「ま、真姫ちゃんが苦手なところ、ちゃんとアドバイスしてくれるし」
「気づいてなかったけどみんな上手くなってるんだね」
「じゃあ次はダンスか?」
「何言ってるの?義政くん。まだ義政くんが歌ってないよ」
「・・・えっ?何を言ってるんだことり?今日はμ' sのリーダーを決めるためにカラオケに来てるんだし俺が歌う必要はないだろ」
「それはそれ。これはこれだよ」
「あっ、私も義政くんの歌聞きたい」
「凛も～」
「いや、今日はμ' sの」
「私も恥ずかしかったのに歌ったのですよ」
　海未の目が笑ってないんだけど・・・

「分かった。歌えばいいんだろ。にこ先輩、ちょっと歌本貸してください」
歌本を見ながら曲を探しその曲を入れた。俺が歌う曲はＡ―ＲＩＳＥの「Ｐｒｉｖａｔｅ　Ｗａｒｓ」だ。

・・・結果は
『９６点』
だった。
「嘘・・・」
「すごいにゃ」
「なんでＡ―ＲＩＳＥの歌をそんなにうまく歌えるのよ！」
「いや、なんか乗ってきちゃって」
「義政も化け物か・・・」
「ひどくね?!」
続いてゲームセンターに移動し
「次はダンス。今度は歌の時みたいに甘くないわよ。使用するのはこのマシン、アポカリプスモードエキストラ！」
・・・何その名前。てか、ことりと穂乃果と凛は？

「ことりちゃんもうちょっと右」
「おぉー」
「えーい」
「「取れたー」」
　なんでこんなに緊張感ないの?
「だから緊張感持てって言ってるでしょー!」
　おぉ、にこ先輩と同じ感想だった。
「凛は運動は得意だけどダンスは苦手だからなー」
「こ、これどうやるんだろう」
「経験0の素人が挑んで、まともな点数が出る訳ないわ。くっく、カラオケの時は焦ったけどこれなら…」
　にこ先輩、本音ダダ漏れですよ。しかも
「すっごーい」
「な、何?」
　予想つくだろ。凛がほぼ完璧に出来たんだよ。
「なんか出来ちゃった」
　その後みんなも踊り、結果はみんなが五分五分の状況だった。てか、みんな凄いな。

俺もダンスゲームやったけどDという結果で運動オンチっぷりを発揮したよ・・・

そしてにこ先輩の提案でリーダーをオーラで決めるということになり、1時間でチラシを配り1番多く受け取ってもらえた人が1番オーラがあるというシンプルなものだった。そこに何故か俺も参加という形でだ。

結果だけ伝えるとすると俺とことりがほぼ同時に配り終わった。ことりが配り終わるのは予想ついてたけど俺が終わるとは思わなかったよ。

そして部室にて

「ふぁー、結局みんなおんなじだー」

「そうですね。ダンスの点数が悪い花陽は歌が良くて、カラオケの点数が悪かったことりはチラシ配りの点数が良く」

「結局みんな同じってことなんだね」

「・・・俺以外はな」

「義政くん、そんなに落ち込まなくても」

「いや、俺ダンスでDだったんだよ」

「でも、義政くんはマネージャーだし」

「そう言ってくれるだけで嬉しいよ」
「にこ先輩もさすがです。みんなより全然練習してないのに同じ点数なんて！」
「あ、当たり前でしょ…」
　なんか俺と同じくらいのダメージ受けてる人がいる。
「でもどうするの？これじゃ決まらないわよ」
「う、うん。でもやっぱりリーダーは上級生の方が…」
「仕方ないわねー」
「凛もそう思うにゃー」
「私はそもそもやる気ないし」
「アンタ達ブレないわね…」
　冒頭からにこ先輩の扱いが可哀想なんだけど。
「じゃあいいんじゃないかな。なくても」
　突然そういったのは穂乃果だった。
「「「「ええっ!?」」」」
「なるほどな」
「義政、穂乃果の言ってることが分かるのですか？」
「まあ、大体はな。今までリーダーなしで練習も歌も歌ってきたんだからだろ」

「うん！」
「しかし…」
「そうよ！リーダーなしなんてグループ、聞いた事ないわよ！」
「だいたいセンターはどうするの？」
・・・確かに。センターどうするんだ？
「それなんだけど、私考えたんだ！みんなで歌うってどうかな？」
「みんな？」
「家でアイドルの動画を見て思ったんだ。何かね、みんなで順番で歌えたら素敵だなって！そんな曲、作れないかなって」
確かにそんなグループにμ' sがなれれば最高だろうな。いや、穂乃果の言ってることは現実になるんだろうな。というか俺がそうする。
「順番に？」
「そう！無理かな？」
「まあ、歌は作れなくはないですが…」
「そういう曲なくはないわね」
「ダンスはそういうの無理かな？」
「ううん、今の７人ならできると思うけど」

海未、真姫、ことりが穂乃果の意見に賛同もしたし問題は無いだろう。
「じゃあそれが1番いいよ!みんなが歌って、みんながセンター!」
あとはみんなの反応を待つだけだな。結果は目に見えてるが。
「私、賛成」
「好きにすれば」
「凛もソロで歌うんだ〜」
「わ、私も?」
「やるのは大変そうですけどね」
「俺もそういうことなら全力でみんなのことを手伝うぞ。なんたってμ'sのマネージャーだからな」
そして全員がにこ先輩のことを見る。
「・・・仕方ないわねえ。ただし、私のパートはかっこよくしなさいよ!」
「了解しました」
「よーし、そうと決まったら早速練習しよう」
階段を登る最中ことりが
「でも、本当にリーダーなしでいいのかなぁ?」

そう言った。
「いえ、もう決まってますよ」
「不本意だけど」
「何にも囚われないで、1番やりたい事、1番面白そうなものに怯まず真っ直ぐに向かっていく。それは、穂乃果にしかないものかもしれません」
「そうだな。だから穂乃果がリーダーでいいと思うぞ」
「じゃあ始めよう！」

それから数日後俺たちはＰＶを撮った。曲名は「これからのＳｏｍｅｄａｙ」だ。

さらにそれから数日後。生徒の服も夏服に変わり順調に時が流れていたある日の放課後。バタン!!と部室のドアが大きな音を立て開き、花陽が入ってきた。
「どうしたんだ花陽？」
「た、た、助けて」
「助けて？」

「じゃなくて、大変、大変です」

ラブライブ出場のために親鳥の出した条件とは!?

「何が大変なんだ?花陽?」
部室に大変と慌てて入ってきた花陽に俺は問いかけた。
「ラブライブです!ラブライブが開催されることになりました!」
「ラブライブ!?って何?」
おい穂乃果、流石にそれはないと思うぞ。一応スクールアイドルなんだしそれくらいは知っとけよ。
「はあ、花陽。説明してやってくれ」
「分かりました!」
花陽はパソコンへと向かいそれにみんなが続いた。
「スクールアイドルの甲子園と言われている大会、それがラブライブです!全国のエントリーしているスクールアイドルのランキング上位２０位までが出場できナンバーワンを争う大会です!噂には聞いていましたがついに始まるなんて」
いやあ、花陽のアイドルのことを話してる時の性格の変わり具合はすごいよな。
「今のランキング上位２０位となると１位のＡ―ＲＩＳＥは当然として２位や３位

は・・・　まさに夢のイベント!初日入場特典は・・・」
　あれ?なんか花陽ラブライブを見に行こうとしてない?
「ねえ、花陽ちゃん。もしかして見に行くつもり?」
　お、穂乃果も同じこと思ってたらしいな。
「当たり前です!これはアイドル史に残るイベントですよ!見に行かないわけにはいきません!!?」
　そして花陽。今は自分もスクールアイドルということを忘れてるのか?
「花陽ってアイドル関係のことになるとキャラ変わるわね」
「凛はこっちのかよちんも好きだにゃ～」
　真姫と凛もなんか言ってるし。まあ、俺もさっきまで似たようなこと考えてたけど・・・
「なんだ～、私てっきり出場目指して頑張ろうって言うのかと思った～」
「私たちが出場だなんて恐れ多いです・・・」
「キャラ変わりすぎ」
「凛はこっちのかよちんも好きだにゃ」
　凛、お前はどんな花陽も好きなんだな。
「でもスクールアイドルやってるんだし目指してみてもいいんじゃないかな?」

「いや、ことり。それは出場を目指すとこだろ」
「そうだよ！」
「たしかに目指してみるのも良いと思いますが・・・」
「現実は厳しいんじゃない？」
　海未と真姫が現実的な意見をだしてきた。まあ、そこはあまり心配はいらないだろうが。なぜなら
「穂乃果、ことり！」
「すご～い」
「順位が上がってる！」
「嘘!?」
「どれどれ～」
「急上昇のピックアップスクールアイドルにも選ばれてるよ！」
「ほんとだ～。ほらコメントも」
　そこから穂乃果はコメントを読み上げていった。
「ほら、μ' sの人気も高くなってきているんだし、出場を目指すべきだろ」
「そのせいね」
「えっ？」

うん、回想に入る前に練習に行こうか。

「出待ち!?」
「うっそ!?私そんなの全然ない・・・」
「そういう事もあります。アイドルというのは残酷な格差社会でもありますから」
「うぅぅぅ」
　穂乃果さん、落ち込みすぎじゃないですか?リーダーに向いてないと言われた時そこまで落ち込んでなかったよね?それともアイドルをやってるから出待ちくらいされたいのか?
「でも、写真なんて真姫ちゃんも随分と変わったにゃ～」
「わ、私は別に」
「あ、赤くなったにゃ」
　はい、そこ2人だけで盛り上がらないでくださーい。あっ、真姫が凛にチョップした。凛泣き出しちゃったし。すると屋上の扉が勢いよく開き
「みんな聞きなさい。重大ニュースよ」

とにこ先輩が走ってきた。
「あっ、にこ先輩」
「ふっふっふ、聞いて驚くんじゃないわよ。今年の夏、ついに開かれる事になったのよ。スクールアイドルの祭典！」
「ラブライブですか？」
「知ってんの？」
うん、仕方ないと思う。ついさっきラブライブについて知ったばかりだし、そこまで言われたらどんな人にでも予想はつくだろ。

そして、ラブライブに出るなら生徒会の許可をとるべきという話になり、生徒会室の前まで移動してきた。今、穂乃果が生徒会室の扉を叩こうとして立ち止まっている。まあ、理由は分かるだろう。
「どう考えても、答えは見えているわよ」
「学校の許可ぁ？認められないわぁ」
「だよねぇ」
そういうわけだ。うん、そうだけど凛による絵里先輩の真似は少し違うと思う。
「でも、今度は間違いなく生徒を集められると思うんだけど」

穂乃果が言うと、生徒会室とは逆側の扉が開き
「そんなの、あの生徒会長には関係ないでしょ。私らの事目の敵にしてるんだから」
にこ先輩がそう言った。まあ、確かにそうだけね。てか、にこ先輩なんでその部屋の中にいたわけ?
「まあ、絵里先輩に許可をとらなくても生徒会に許可とるなら別の方法もあるけど」
「本当!?」
「本当だよ。ただ、絵里先輩が認めたわけじゃないから効き目が弱いというか・・・」
「なんなのよその方法は?」
聞き方もう少し改めた方がいいですよ真姫さん。俺は心が広い先輩だけど狭い人にその聞き方したらキレられるからね。
「いや、だって俺一応生徒会役員だし。希先輩に頼むのもありだし」
「それだぁ!」
「まあ、それができるかも分からないけど」
「なんで?」
「俺はあくまでもただの生徒会役員なんだよ。だから俺が許可しても絵里先輩がダメって言ったらダメになる可能性が高い。希先輩ならどうにかなるかもしれないけど、やっぱり生徒会長の方が権力が強いからな」

「つまり、義政の提案では許可が無許可になる確率があると」
「そういうこと。手っ取り早く理事長に頼みに行った方が早いとは思う。ことりもいるからほとんど確実に許可は出るだろうし。あと理事長のところに直接行くのが禁止されてるわけでもないから」
そういうわけで理事長室前に来たわけだが、先程よりも緊張感が増してるんだが。
「さらに入りにくい緊張感が・・・」
穂乃果もそう思ってるようだ。
「そんなこと言ってる場合?」
「分かってるよ」
穂乃果が意を決して理事長室の扉をノックしようとした時扉が開き
「お揃いでどうしたん?」
希先輩が出てきた。ということは
「おわっ、生徒会長っ!?」
だろうな。
「タイミング悪」
にこ先輩、そう思っても言っていいことと悪いことがありますよ。
「なんの用ですか?」

穂乃果が答えられないでいると真姫が
「理事長にお話があって来ました」
凄いな。絵里先輩相手に1歩も引いてないぞ。
「各部の理事長への申請は生徒会を通す決まりよ。そうよね義政?」
うお、いきなり俺に問いかけないでくれません?
「申請はそうですけど、別に真姫は申請とは言ってませんよね?ならいいんじゃないですか?」
「そうだけど…」
すると理事長が中から出てきた。なので真姫たち1年生を廊下に残して理事長室に入った。
「へぇ〜、ラブライブねぇ」
「はい、ネットで全国的に集計される事になっています」
「もし出場できれば、学校の名前をみんなに知ってもらえる事になると思うの!」
「私は反対です」
絵里先輩が歩きだし
「理事長は学校のために学校生活を犠牲にするような事はすべきではない仰いました。であれば」

と言った。へぇ、そんなこと言われてたんだ。
「そうねえ、でもいいんじゃないかしら？エントリーするくらいなら」
「本当ですかぁ!?」
「ええ」
「ちょっ、ちょっと待ってください。どうして彼女たちの肩を持つんです？」
「別にそんなつもりはないけどぉ」
「だったら、生徒会も学校を存続させるために活動させてください！」
なんか最近の絵里先輩、必死になりすぎじゃないか？別に必死になること自体ダメなわけじゃないが、絵里先輩の必死さは何か違う気がするけど・・・
「ん～、それはダメ」
「意味が分かりません」
「そう？簡単なことよ」
・・・俺にも分からん。あっ、絵里先輩が出ていった。
「ふん、ざまあみろってのよ」
にこ先輩って結構毒舌じゃね？
「ただし条件があります。勉強が疎かになってはいけません。今度の期末試験で、１人でも赤点を取るような事があったら、ラブライブへのエントリーを認めません」

まあ、正論だろう。どこの学校でも部活より勉強優先だしな。でも、穂乃果とにこ先輩が大丈夫かどうか。そんなことを思ってると穂乃果と凛とにこ先輩がなんかショック受けてた。いや、凛もかよ!

場所は変わって部室で

「大変申し訳ありません!」

「ません!」

穂乃果と凛が俺たちに謝罪会見をしていた。

「穂乃果は知ってたけど凛もできないとは・・・」

「え～、なにそれ～」

「いつもテスト前に俺とことりと海未を頼ってくるからだよ」

「そうだけど～」

「まあ、いつも通り数学のプリント渡せばいいのか?」

「うん!よろしくね義政くん!」

「あっ、私もお願いっ」

「私もです」

この幼馴染たちはいつもこうだよ。まあ、去年作ったやつコピーするだけだから問題はないけどね。

「凛は何が苦手なんだ？」
「凛は英語！」
「英語難しいもんね」
　花陽・・・ それはフォローだが今するフォローではない。
「う～ん、去年作ったプリント渡すか？」
「絶対貰うべきだよ凛ちゃん！義政くんの作ったプリントから同じような問題が半分以上でたもん！」
「貰うにゃ～」
「わ、私も」
「みんなが貰うなら私も」
　うん、1年生にもプリント配布決定か。こちらも去年希やつコピーで問題はないか。
それで
「にこ先輩はどうするんですか？」
「大丈夫よ！それよりみんな。赤点なんか絶対取っちゃダメよ！」
「教科書逆に見てる先輩に言われても・・・ いつも通りプリント作りますか？」
「お願いできる？」
「できます」

「あの義政？」
「なんだ？海未？」
「今いつも通りと？どういう意味ですか？」
「えっ？そのままの意味だけど」
「ことばが足りませんでした。義政は「いつも通りプリント作りますか？」とにこ先輩に聞いてましたがいつもにこ先輩のも義政がプリントを作ってるのですか？」
「何言ってんだ海未。当たり前だろ」
「「「「えっ？」」」」
　にこ先輩以外のみんなが驚いた。
「何驚いてるんだ？」
「よ、義政先輩は2年生でしたよね？」
「そうだけど？」
「じゃあ、なんで3年生のプリントを作れるの？」
「いや、去年からそうだったし・・・」
「えっ？」
「だから俺は1年の初めの時からにこ先輩の勉強を手伝ってたんだよ！」
「それは本当なん？」

うお、いきなり会話に入ってこないでくださいよ。希先輩。
「本当ですけど」
「じゃあにこっちの成績が上がった理由は義政くんやったんか？にこっち？」
「そうよ」
「ふーん。じゃあウチにもプリント作ってくれん？そしたらにこっちへの勉強はウチが責任もってみるから」
「分かりました」
「じゃあ決まりやね」
「あっ、穂乃果と凛は誰がみる？」
「穂乃果は私とことりでみます」
「凛は私がみてあげるわ。もちろん花陽手伝ってくれるわよね？」
「う、うん」
よし。意外とはやく決まったな…　てか、俺はみんなの勉強見なくていいの？
「俺は？」
「義政くんは今回プリント作ったら自分のために勉強したらいいんじゃない？」
「あ～分かった。まあ、分からないとこがあれば俺が教えるから」
そうしてμ-ｓはテストに向けて準備を進めていくのであった。